GAPニュースレター

UFOと宇宙哲学の研究誌 季刊日本GAP機関誌

GAP-JAPAN NEWSLETTER

No.75 AUTUMN 1981

驚異実話！ ジョージ・アダムスキー

土星旅行記 (1)

新しい文明を考える ハルオ宮内

イメージ法で起こる奇跡 高梨和明

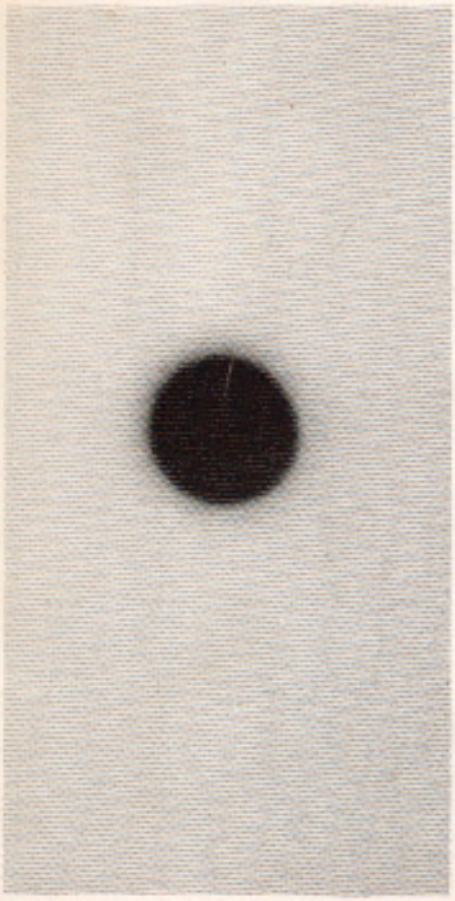
●「アメリカ ネイティブ 宇宙考古学の旅」紀行

太陽と神々の国讃歌 久保田八郎

「さらば空飛ぶ円盤」(3) ジョージ・アダムスキー

第3章 宇宙船と重力（続き）

第4章 最近の科学の発達



GAPニューズレター　第75号目次

〈巻頭言〉 信念と試練…1

土星旅行記(1)　G．アダムスキー…2

新しい文明を考える　ハルオ宮内…6

イメージ法で起こる奇跡　髙梨和明…8

●「アメリカ縦断宇宙考古学の旅」紀行
太陽と神々の国讃歌　久保田八郎…10

回想のアメリカ・メキシコの旅(1)　参加者一同…22

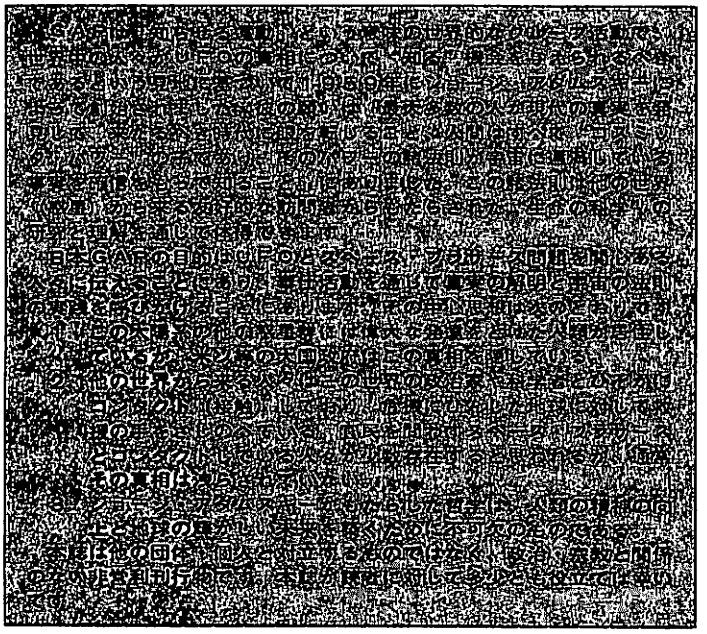
さらば空飛ぶ円盤(3)　G．アダムスキー…28

第3章　宇宙船と重力（続き）
第4章　最近の科学の発達

群馬支部月例研究会…3
沖縄支部月例研究会…34
日本ＧＡＰ各地行事報告と予告…37
〈予告〉 エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅…38
日本ＧＡＰ全国月例研究会案内…40

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他誌への無断転載を禁じます。

GAPとは



■表紙写真は1972年（昭和47年）9月17日午後5時半頃、神奈川県三浦半島の剣崎灯台で編者（久保田八郎）が撮影した円盤。周囲のモヤのような放射状のものはフォースフィールドと思われる。写真左は円盤の拡大。中央の山は富士山。

データ：ニコンフォトミックFTN／ニッコール 200mmF4／ニコンY48フィルター使用／絞り15.6／1/250秒／ネオパンSS／ミクロファイン使用自家現像。

〈巻頭言〉

信念と試練

先日UFO研究者と称する男の人から手紙を受け取った。筆跡や文面から察するに高校生らしい。それによると、巷間に出まわっている雑多なコンタクトストーリーをすべて真実だと鵜呑みに信じ込み、その上、アメリカの金星や土星の探査機の報告なども信じて、太陽系内の地球以外の惑星に人間が存在するというアダムスキーの説は誤りで、UFOはおそらく太陽系外から来るのだろうという趣旨であった。まじめに冷静に書かれたこの文章は決して攻撃的なものではなく、むしろ自己の所信が率直に述べてあり、好感のもてるものであったので、編者は早速返信を送った。「あらゆるコンタクトストーリーをすべて無条件に信じないように」と。

GAP会員ではないこの発信人の意見は大方のUFO研究者の考え方を代表したものであろう。惑星探査機の報告結果を百パーセント正しいと信じきっている大衆の純情さには返す言葉がない。

うるさいほど繰り返すことだが、米ソ両国とも宇宙開発の重大な発見事を極秘にしている、と思われるフシが多々あるのだ。それは探査機の報告の特に新聞に掲載される記事内容を少し仔細に検討すれば判断のつくことなのだが、大衆はそこまで分析はせず、見出しなどを目にしたとたんに文句なしに信じるのである。

アメリカ政府の要人や一部の科学者は太陽系の地球外惑星に高等な人類が存在することを知って知り抜いているのだけれども現状ではどうにもならないのだと今夏八月にカリフォルニア州でアダムスキー財団のフレッド・ステックリング氏が編者に語ってくれた。氏によると、米政府の官憲二人が氏を訪問してアダムスキーの体験は真実であると語ったという。

なぜ米政府は隠すのか？

理由は非常に簡単である。地球外の惑星、たとえば金星や土星などに偉大な発達をとげた〝人間〟が居住し、我々の想像を絶した文明を築いていると政府が公表しようものなら、価値観の変化によって世界に大混乱が発生するからだ。宗教界は猛烈な圧力を加え、各種の学界が大反発し、経済界は株価の大変動により収拾のつかない状態になり、人心は恐怖に満ちて大戦争につながりかねない。そうなると現時点で強大な軍備を持つソ連との対決においてアメリカは不利になる。だから異星人存在説を米要人はオクビにも出さないのだ。

人間というものは自分よりもはるかにすぐれた人間が他所に存在すると知った場合、それを讃嘆するよりもおおむね嫉妬心を起こして憎悪か敵意をいだくのが普通である。敵意は恐怖にかわり、攻撃か混乱へと展開する。地上のあらゆる権威者よりもすぐれた〝宇宙人〟なるものの出現は劣等幼児園に大学の優等生が入ってくるのに似て喜劇よりも悲劇のタネとなり、滅茶苦茶な状態になるだろう。

むかしある大きな新興宗教の機関紙がアダムスキーをイカサマ師ときめつけて猛攻撃した。正道に返れと大書したその記事は明らかに〝地上最高の偉い人〟である教祖よりも〝もっと偉い宇宙人〟の出現により信者を失うことを恐れていた。これを読んで編者は大笑した記憶がある。無名の田舎青年の翻訳が大宗教教団の幹部を狼狽させるの巻は滑稽でもあるが、重要な示唆も含んでいた。新興宗教の実態がよく把握できたし、一般大衆の思考のパタンもわかってきたからである。実際、編者は二十年以上にわたる宇宙問題の促進活動でUFOの真相よりも地球の人間の真相解明について莫大な学習をすることができたのだ。もって感謝する次第。

それはともかく、最近はどうみてもアダムスキーの主張は不信の対象となり忘却の彼方に押しやられる傾向がある。その例証が前記の少年の書簡である。

しかしガリレオ・ガリレイ気取りではないが「それでも異星人は存在する」と編者は声を大にしてではなく、声を低くして呟きたい。大声でわめくと〝宗教裁判〟に付されるからだ。こいつは二十世紀の現代でも案外こわいので猪突猛進は避ける方が賢明だろう。どだい人間の精神の状態は二千年前にイエスをぶっ殺した時愚な時代と大差はない。君子危うきに近寄らずだ。

ここで問題になるのは〝信念〟である。あくまでもアダムスキーは正しかったとする不屈の信念を貫き通すか、大勢に巻かれて関心を失い、大宇宙から目を閉じるか、今こそその試練の秋だろう。もちろん人間には思想信条の自由があるし、他のいかなる人間といえども一個人の思想を侵害することはできない。太陽系の地球以外の惑星群に人間が存在すると信じる自由も、信じない自由もある。信じる方に夢とロマンがあってよいと言う人もあろうが、信じないでギャンブルにでも凝って一獲千金を夢見る生き方にもロマンはあると人は主張するだろう。

しかしこの問題には複雑きわまりない要素が含まれているので性急に結論は引き出せない。ただしアダムスキーのいわゆる宇宙的な哲学にはおそろしく高次元な理論が展開しているので、これを重視せざるを得ないというのがアダムスキー派の意見である。なぜなら、これほどの深遠な哲学と思想を持った人がUFO問題で捏造記事を書くとは逆立ちしても考えられないからだ。しかも彼の宇宙哲学は実際に人間を救うのであって、観念の空転ではない。そして究極においてア氏の信憑性を決するものは探査機の結果発表などよりも氏の哲学を実践する人々の生き方であろう。つまりギャンブラーの生き方と宇宙哲学実践者の生き方が短い生涯でどのような影響を他人に与えたかで勝負は決まるのである。自己の精神は必ず〝他に〟何らかの影響を与えずにはおかないのだ。

一人間の価値は他人に与えた影響と他人の胸中に残る追憶と賛美の度合で推られるものなのであろう。

驚異実話！

土星旅行記（1）

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

●この写真はアメリカの惑星探査機ボイジャー2号が今年8月3日、2,250万キロメートルの距離から撮影した土星のリング。Bリングの外側に黒いスポーク状のものが見えるが、これは全くの謎。

この記事は（地球日付で）一九六二年三月二十七日より三十日まで土星で行われた太陽系の十二惑星の代表者会議にアダムスキーが出席したときの宇宙旅行に関する報告で、一九六二年六月に各国GAPリーダーに送られたもの。七年後の一九六九年十二月刊行の編者（久保田）編「空飛ぶ円盤とアダムスキー」に収録したが、絶版になって久しいため、ここに改訳決定版を掲載した。この貴重な資料が読者に裨益すれば幸いである。

●第一部　土星に着陸す

二十六日に私は一機の宇宙船（注＝別な惑星から来た宇宙船）に乗ってこの旅行に出発しました。この宇宙船は二十四日にアメリカのある航空基地へ着陸し、そこで米政府の一高官が宇宙船の乗員と会談しました。この会談後に宇宙船はもとの惑星へ帰ることになったのです。

壮麗きわまりない土星の光景

この宇宙旅行は時速三千二百万キロ以上のスピードで九時間ほどかかりました。おもな会議は二十九日と三十日に開かれたのですが、私は二十七日に到着したときにほとんどの出席者に会いました。

二十八日は会合はなくて、訪問者は都市や周辺の見学に案内されましたが、それは言葉で表現できないほどに美しい光景でした。建築物や大通りなどの壮麗さは信じられないほどです。

ここで大通りというのは私たちが地球で知っているような種類のものではありません。というのは土星の大通りは花で作られているからです。地球のコンクリートやアスファルトのようなものではなくて、何マイルも何マイルも花が敷きつめてあって、各大通りが異なった色を帯びています。

土星の乗物には車輪がありませんので地球にあるような種類の道路を必要とせず、ただ進行路線があればよいのです。この路線というのは横幅の広い花壇なのであって、この上の空間を電磁作用で進行する乗物が、植えてある花を傷つけないで滑空するのです。私たちは多くのこのような大通りを進行しましたが、先にも述べたように、すべてがあまりにも美しくて地球の言葉ではとても表現できません。目撃したとおりに正確にこれらの光景を私が思い浮かべるにつれて、私の心の中を写真に撮ることができればよいのにと思います。

私はカメラを携行して写真を撮りましたが、地球へ帰ってフィルムを現像してみたら、それがすっかりだめになっているのがわかりました。カメラさえも元のままには作動しません。どういうわけか私にはわかりませんが、たぶん船体の磁場がフィルムを傷つけたのでしょう。

天国のような生活

私は次のように言うことができます。土星の建築様式は私たちの想像を絶したものであると。遠くから見れば都市は白く見えますけれども、そのなかを歩いたり乗ったりして通過しますと各建物やその他一切の物は乳白色を呈しています。それは息のつまるような体験でした。建物の幾何学的な構造があまりに美しいからです。それは、私たちがこれまでに教えられてきた〝天国〟そのものであると言えるでしょう。

人々は一大家族として住んでいますが、この地球上の兄弟姉妹よりももっとすぐれた生き方をしています。土星人は私たち地球人がいわゆる〝神〟に対して敬意を払う以上に、はるかに大いなる敬意を人間同士が互いに相手に対して示し合っているのです。

だれも完全な調和を感じることができ

ました。というのは、私たちが地球で知っている素晴らしい音楽においては、多くの音符が一つの美しい旋律を作っているのと同様に、宇宙の法則という関係においてそれは最低から最高に至る多くの心を含んでいたからです。

また、だれも土星人の想念や行動に関して彼らのあいだにいささかの疑念や不信をも感じることはできませんでした。

もちろん私たち（各国のGAPリーダー）すべてが知っているように、土星は天秤すなわち完全な釣り合いをあらわしています。一度そこへ行ってみればこれを疑うことはできません。しかも土星人は、宇宙の生き物のあいだにより大きな美とより大きな調和があるのだと言っています。

創造主と一体化して"間抜け"になれ

私たちの現在の精神状態からみれば、私たちはこの事を全然理解できないようにも思われます。しかし私たちがこの素晴らしい生命の計画に自己をゆだねるならば、それは私たちの理解するところとなります。

私は何度も考えることがあります。この地球上のすべての人間はこのような大きな名誉を受けるように自分を向上させるのだろうかと。地球的な見地からみますと、ときとして少数の人だけがこの特権にあずかるのだろうと思われます。なぜなら地球人の心はあまりに個人的な事に熱中していて、容易に腹を立てるからです。このことはすでに長い時代を通じて行われてきましたので、次のような疑問が起こってきます。

「創造主から与えられた生命の充実に対する権利を得ようとして、一体どれだけの人が努力しているのだろう？」

そこで私は永遠というものを考えてきました。その中に万人が含まれていますので、そのためにいつかはだれもがそれを行うでしょう（努力するでしょう）。ある人は早くそこへ到達するでしょうし、数十億年かかって到達する人もあるでしょう。なかには全然到達しない人もあるでしょう。私たちの自我または個性を創造主の意志にゆだねることは容易ではありませんが、しかし自我にどのような犠牲が起ころうともそれは努力すべき事柄なのです。

次のように言う人があるかもしれません。

「もし私たちが自我または個性を捨てるならば、私たちは間抜けになるのではないか」

そうです。地球的な見地からすればそのとおりです。しかし人間は創造主の意志に向かう以上に大きな間抜けになることができるでしょうか。自我を捨てればあなたは創造主と一体になるでしょう。それが創造の目的なのです。私たちが黄金とか何とかの言葉で富を計っても、いかなる富といえども、このような参与者になる人々（創造主と一体になる人々）を待っている報いを私たちに与えることはできないでしょう。

さて、私が目撃した素晴らしい美を表現することは困難です。それはこの地球上のいかなる物をもはるかに凌駕している"心"からです。私たちの取るに足らぬ"心"は積極的であるかもしれませんが、まだ目覚めてはいません。というのは、心は依然として永遠という子宮の中にあって、創造主の目でもって実際に存在する物を見るかわりに、存在するかもしれない物を夢見ているからです。そうです、リーダーの皆さん。私は今度の宇宙旅行で私に与えられた名誉を皆さんにおわかちする特権を授けられようとして実際に自分が何をやったのかは私にもわからないほどです。

もし私が知る特権を与えられた物事のすべてを心の中に集めることができれば一冊の書物が書けるでしょう。しかし、おわかりのことと思いますが、例の世界講演旅行から帰って以来ずっと私には多くの複雑な状態が起こっていますし、また人間は二人の主人に仕えることはできません。したがって私が美しい宇宙を眺めているあいだに受けた印象のすべてが充分に蘇ってくる日を待つことにします。私にはあまりに仕事が多すぎるのです。私は自分の義務を遂行することができるように必要な援助が現れることを祈っています。援助する人はいかなる性質の疑惑をも起こさないようにして、私が洩らす物事に対して人間の心の素直さを持つ必要があります。

土星における太陽系会議

さて、土星の会議の説明を続けましょう。地球時間の三月二十七日に私たちは最初の会議を開きましたが、それは三時間続きました。各惑星から来た代表者が紹介されました。全部で十二名です（注＝我々の太陽系には十二個の惑星があるので代表者は十二名となる）。そして各自の惑星をあらわす徽章を一同は授けられました。この会議はその都市の小さな会合や演劇の上演のような諸活動の集合場所として用いられるある建物の中で開催されました。

二十八日は休養や見学のために費やされました。二十九日にはきわめて美しいデザインの建物で主要会議が開かれました。操作はすべて押しボタン式です。

会議の後に一同はこの操作法の説明を聞きました。まず床を片づけてからボタンを押すと、会議用の準備のできた議場が床の下から現れてくるのです。四方の壁も必要に応じて調節できるようになっています。会議中それらの壁は優美な紫色に輝いて、黄金色の模様が浮かび、きわめて高い柱がついていました。

一同が座ったテーブルは長くて、片側に六人が座り、端に十三人目の議長が座りました。テーブルの端から端までには真ん中に一条の凹みが貫いており、その中に十二の噴水がしつらえてあり、一つの噴水が各代表者の前になるように位置しています。各噴水はそれぞれ異なる色と芳香を放って、建物中に快適な雰囲気を生み出しながら一体となって混ざり合っています。

その噴水や天井、各壁などから音楽が流れてくるように思われましたが、地球には全然ないような音楽でした。それは

宇宙のあらゆる活動の音響の融合であり、木々のあいだを流れる微風または波の音にたとえてよいでしょう。地球人に知られているあらゆる音や未知の多くの音が完全に調和して融合した音楽です。そしてその旋律がどのようなものであったにしても、それは地球人の理解力を越えたものと思われます。私にわかったところでは、その音楽は創造主に捧げられた創造の表現なのでした。

会議用のテーブルについて着用するために各代表は長い外衣を与えられました。私に渡された外衣は優美な青色のものでしたが、実際にはその色を言葉であらわすことは不可能です。右袖には一輪の薔薇のような刺繍が施してありましたが、その薔薇は私が地球で見たことのないものです。その薔薇の棘は地球上の生命をあらわしていました。それを見て私はイエスの次の言葉を思い出しました。

「わが道は茨で満ちている」

議長は宇宙の諸原理をあらわした乳白色に反射する外衣を着用していました。(地球時間に換算して)十八時間の会合のあいだに私が感じたのは、私はもはや自分自身の心を持たず、また個人という感じも起こらず、むしろ宇宙的感覚をもって最高の知識の中にみずからをあらわした、ある完全な実体と調和している一つの重要な部分としての自分を感じました。

地球人は大宇宙船を建造すべし

議事として最初に出た話題は太陽系と地球に関する問題、太陽の磁極の逆転とそれが全惑星群にどのような影響を与えるかといった事柄です。

論点は次のようなものでした。すなわち、私たちの太陽系は崩壊期にあるのか、もしそうだとすれば、いかなる処置をとればよいか、といった問題です。長時間にわたる熟慮の末の結論は確定的なものではありませんでしたが、科学装置に示される測定によって発生しつつある諸変化が記録されていますので、太陽系が崩壊期にあるということになれば数年以内にそのことがわかるでしょう。

地球を除く各惑星は宇宙船を所有していますので、居住に適している新しい太陽系へその住民を移動させることになるでしょう。この新しい太陽系にはすでに各惑星から連れて行かれた百万の人が住んでおり、そのなかには地球人もいます。太陽系崩壊の場合は、地球人はみずから宇宙船を建造しない限り苦難に遭遇することになります。

もし他の惑星群の住民に時間的な余裕があって、しかも地球人を救出するための余分な宇宙船があるならば救ってくれるでしょうが、それが可能かどうかは疑問です。というわけは他の惑星群は各自の住民をまず輸送しなければならず、しかもこの全太陽系中の人口は総計一千四百四十億に達するからです。地球の四十億はこの中に含まれています。このことは財産の輸送までを含んではいません。ですから財産までも運ぶとなれば大仕事です。この時期がいつになるかはだれにもわかりませんが、いつかその時期が来るでしょう。

異星人たちは地球人が宇宙船を建造することの重要性を強調しています。そして、地球人がそれを行うように彼らは現在地球人を援助しているのです。

原子エネルギーを平和利用に転ぜよ

地球人は責任感を失いつつあること、そしていつか目覚めなければみずからを絶滅させることになることが指摘されました。現在の原子エネルギーの爆発は間違った方向に進んでいますので、実験を中止しなければその結果はただ文明を失うだけでしょう。

かつてきわめて平穏に存在していた宇宙空間の諸状態を放射能はひどく妨害しています。それは海洋を惑乱する暴風にたとえられます。これは他の惑星群にも影響を与え、太陽系全体に妨害を加えて崩壊を早めることになります。また宇宙の各種の力が悪用されていて、宇宙空間の平穏さに反して作用しています。最近の核実験が更に続けられるならば、竜巻、地震、異常気象などが地球に災難をもたらすでしょう。これら一連の実験はあらゆる自然の法則を不均衡にしています。異星人たちの話によりますと、それは全く好ましくない状態であるということです。つまり地球人はみずからの手で地獄を作り出しているわけです。別な楽しい状態を作り出すこともできるのに——。

この太陽系のある惑星群もかつて同じ原子力を発見した当時、現在の地球と同様の状態になったことがあるそうです。しかし彼らは自滅するかもしれないことにすぐ気づいて、破壊のかわりに人類の福祉の方向に転じた結果、このエネルギーを用いて事実上の天国を築き上げたということです。地球でも同じことがやれるでしょうに——。

宇宙旅行より転生がよい

三十日の朝三時間と夕方の三時間は、"宇宙計画"について私たちを啓発することに費やされましたが、それについてはいずれお話しすることが許されると思います。というのは、この会議のあいだに火星から来た代表と私の二人の頭部にある器具が取り付けられました。私たち二人だけはその場で話される事柄のすべてを記憶することができないことを一同は知っていましたので、こんな装置によって私たちの脳細胞に知識を植えつけたのです。洩らしてもよい時が来れば私たち二人は聞いた事柄を思い出すでしょう。そのとき印象は活性化され、聞いたときと同じように新鮮によみがえるわけです。いいかえれば私は今テープレコーダーなのであって、与えられた印象はすべて無期限に頭の中に詰められているわけです。

その機械はまるで多くの針が私の脳の各細胞へ突き刺さるような奇妙な感じを与えました。その機械の使用や急速な宇宙旅行は、私の肉体がそれに慣れていなかったために私のバランスを失わせてしまいましたので、なるべく正常な気分を保つためにある処置を受けました。この処置というのは一つの振動機械から成っ

ていて、それが私の肉体内のエネルギーばかりでなく細胞のバランスを保つのです。こちらの地球にいる異星人はそんな機械を持たず、また私を治療できる人もいませんので、私はそれを自分でやらねばなりませんが、楽なことではありません。こんな宇宙旅行の後に体の調子を地球の状態に合わせることは想像以上に困難です。私は他の人もこのような宇宙旅行をしないほうがよいと思いますし、移住するために別な惑星へこの肉体を運んでもらおうとは全然思いません。むしろ魂のままで行って生まれかわり、新しい環境で生長するほうがはるかに楽です。

彼ら異星人が浴しているのと同じ創造主の栄光にこの地球上で浴そうとするのなら、私たちすべてが遂行しなければならない一つの計画が私に与えられています。それにはまず私たちを絶滅という言葉でおびやかしている危険を取り除く必要があります。近い内にこの計画の準備ができると思います。

私はまた米政府高官へメッセージを渡すように頼まれましたので、そのためにワシントン市へ旅行に出かけました。率直に申しますと私たちすべてにはこれから多くの仕事があります。そのすべてを片付けるのに必要な援助が得られることを願ってやみません。

土星よりテレパシーで放送

さて、この土星の会議の件を知った各国GAPリーダーたちは、各自がテレパシーで感受した印象の内容が正しいかどうかがわかるはずです。会議全体の内容が私の声をも含めて地球へ放送されたのですが、特に二十九日にはそれが強力に行われました。テレパシー感受力がかなりのものであったにしても、あなた方は自分の能力をきびしく判定しなければなりません。一つ私が言えることは、メッセージのいくらかを正確に受信した人は――実際そのような人がいたのです――受信の能力を持っていることで祝福されるだけでなく、その持って生まれた力のためにも祝福されたということです。そして未来において想念伝達に同じ方法を用いることができるように自分を分析することです。あのメッセージを受信した当時にあなた方の精神状態がどのようであったかを考えてごらんなさい。そうすれば自分にとって大きな助けとなるでしょう。

（編者注＝右の記事中に土星から想念を放送した件が述べてある。これはアダムスキーが土星へ行った際に地球へ向けて異星人と共にテレパシーでメッセージを放送し、それを各国GAPリーダーがテレパシーで受信する実験を行う計画を出発前に各国リーダーに連絡したことを意味する。

地域によって時差があるけれども、各国GAPリーダーは指定の時刻にテレパシーによってそれを受信し、アダムスキーに報告した。受信テストが実施されたのは一九六二年三月二十九日である。

後日の成績発表によると、オランダGAPリーダー、レイ・ダクィラ女史が七十パーセントの適中率を示して最高点、編者（久保田）は五十パーセント適中という成績であったことが判明した。

メッセージの内容は、①自分は今どこの惑星にいるか。②何の目的で来たか。その他であった）

ワシントン市にいたあいだ私はGAPとは関係のない一人の男に会いましたが、彼も約十パーセント受信していました。彼は財務局に関係のある人です。そこで、結局だれでも番組に波長を合わせることができたはずで、それにはある種の心の状態を必要とするだけで、それだけのことだということがわかります。テレパシーで受信するためには精神的に高くある必要はありません。現在の危機から人類を救い出そうという気持さえあればよいのです。これは結局本人をも助けることになります。

妨害のワナにおちいるな

もっとこれ以上に洩らしてよい時が来たらそうしましょう。しかし今のところこれだけの情報で一応満足して下さい。物事に成功するには一時に一歩ずつ踏み出すことが肝要です。多くの妨害が現れるでしょうし、それは疑いないことですが、人間は何をやっても妨害や敵対行為がつきまとうものです。

私たちの計画（GAP活動）に対抗しようとする一定のパタン（型）があります。私は二名の人を心に思い浮かべます。一人はかつて密接な協力者でしたが、今は協力することを拒んでいます。他の一人はかつて私を防衛するために働いた人でした。ところが彼らの両方とも疑惑のワナにかかってしまい、不信の状態に落ちいりました。私はその証拠を持っています。彼ら二人が出す情報の内容と私に対する非難は一致していますが、二人は互いに数千マイル離れています。米東海岸にいるあいだに私は他の妨害者たちに出くわしました。

このことで一つの事実がわかります。すなわち地球全体に放射されている一つの精神的反対勢力があって、それがある種の考え方に役立っているという事実です。その勢力は想念伝達、テレパシー、その他の方法を応用しています。

したがって心中に起こる疑惑の念に気をつけて下さい。そして早計に他人を疑わないことです。私たちのものであるはずの美を失うよりも、忍耐強くあることによって一度バカにされるほうがよいのです。疑わないで互いに信じ合いなさい。私たちが〝至上なる父（創造主）〟のために働くとき、それは自分自身のために働いていることになるのです。

天使のような顔をして現れる人があるでしょうが、その姿と動機は異なっています。それに対しては忍耐強くあることです。その人々の（天使のような顔をした妨害者の）ワナに落ち込まないようにして下さい。悪魔でさえも神のように行動できるのです。

すべからくヘビのように賢明に、ハトのように穏和であるべきです。そうすれば私たちは勝利を得ずにはおられません。

（第一部完。以下次号）

（文中ゴシック体は編者の指定による）

新しい文明を考える

ハルオ宮内

●ハルオ宮内氏の作品

地球の断末魔は迫っている

ニューズレター六十一号に私の「太陽が黄金色に見えた」と題する文章が載った。あれから五年、今や新時代。前の人類がかつて経験したことのない大混乱期に突入している。世を見渡せば財政の破綻、医療の荒廃、公害汚染、異常気象から登校拒否にいたるまでその徴を見ることが出来る。

今の文明はそれらの問題を両手いっぱいに抱えて右往左往しているのである。このままで行くならその先は容易に推測出来よう。滅亡か起死回生の大手術をするかのどちらかである。断末魔は目前に迫っているのである。

自己中心性に克つこと！

私は二十一世紀は美しく輝ける宇宙時代であると思う。しかしその人類宿願の理想の彼岸は、近づくほどどんどん遠くへ離れていくかに見える。

私は十年近くニューヨークで生活し痛切に感じたことは、アメリカは二十一世紀への確かな解答を持ってないということであった。極度に発達した物質主義文明はここに来て方向を見失って完全に行き詰っている。歴史学者のA・トインビーがいったように、今こそ自己中心性に克たないかぎり二十一世紀はない。今や個人も大国も自己中心性に犯されコントロールされている。今の世を支配するものは、物欲であり不信であり対決である。

奉仕、信、調和等の輝く宇宙時代をすぐ目の前にしていながら、我々は核戦争の脅威に常に晒されながら生きているのである。

その輝く宇宙時代、すなわち人類が夢みてきたユートピアは彼岸にさん然と輝いているが、そこへ到達するまでには険しい山河あり未曽有の大試練あり、闘いがある。その闘いとは、少なくとも数千年の間ぬくぬくと育ってきて、今やどうしようもないバケモノのようにふんぞりかえっている心の中の自己保存、自己主張、自己の意見、自我、自尊心、エゴ等の自己中心性との闘いである。

今世紀末の避けられない最後の戦いハルマゲドンは、イスラエルでも米ソの戦いでもなく、個人個人の心の中の非個人的人間と自己中心的人間との闘いである。その血みどろの死闘で自己中心性に克った者のみが二十一世紀の光明の中で永遠の生命を得ることが出来る。個人的人間から非個人的人間への転換が出来た者が、地球を卒業出来、宇宙へのパスポートを得るのである。

いばらの道を通り抜けよう

私はこの四月に、今こそという気概をこめて「宇宙の仲間入りの会」をはじめた。若者が近県から、遠くは東京、九州からも参加してくれた。真面目で熱心な集りであった。皆「私は誰よりも熱心に宇宙哲学を実践している」というつわもので、想念チェックも数冊に及ぶという。私はその彼らにテレパシーの基礎的質問を試みた。

●感情をコントロール出来ますか？
●万物と一体であると自覚出来ますか？
●習慣的な考え方をすてましたか？

私もそれらが簡単にできるとは思わないが、やっぱり力強い〝ハイ〟という答えは返ってこなかった。五年十年と宇宙哲学をやっていて一ページの中の一行すら実行、実践出来てない事実に直面して、今まで何を一体学んで来たのか胸倉をつかんでゆすりたくなる思いであった。こんなことで誰が宇宙の仲間入り出来よう。

花園にいて宇宙哲学をただもてあそぶだけではいつまでたっても進歩は望めない。我々にとって宇宙の道、すなわち個人的から非個人的への道はいばらの道であるはずである。

そのきびしいいばらの中で、悶え、苦しみ、傷つき、引き裂かれしながら自我と習慣を削り取らねば、神の子としての真我なる輝きは現れない。そのいばらの道を通り抜けた者のみが自己中心という牢獄から脱して、宇宙の意識の王国の眩しい光を享受することが出来る。

何よりもまず「自分を知ること」である。自分を知ってはじめて新しい宇宙的一歩をふみ出すことが出来る。ここであなたは「私は体験を通して学んでいる」というかもしれない。しかしそれは「真の学び」ではなく、悩み苦しみの体験を一つ一つ数えているにすぎない。「真の学び」とは、その学びを通じて宇宙的に進歩し二度と揺れない自分を作り上げることである。

ビルディングのたとえ

ここに十階まで行けば地球を卒業出来る建物があるとしよう。皆十階目差しているGAPの人は、宇宙哲学というさん然と輝くガイドブックを抱えて十階を目差している。ほとんどの人々は一階でうごめいているだけで二階への階段を見つけられないでいる。またある人々は二階で右往左往していて三階への階段を見失っている。三階まで来た人は、一階二階で苦しんでいる人々がよく見えるが、四階以上にいる人々は見えないのと同じように一階にいる人は二階以上にいる人々は見えない。本人が手さぐりで上段へとよじ登らねばならないが、往往にして自分がいったい何階にいるのかさえ人々はわからない。

地球人は「棺をかつぐ死人」

先日上京のおり、私は奇抜な衣装に身を包み、それぞれの振り付けで踊り狂う原宿の竹の子族を見る機会があった。その数万人ともいえる竹の子族は、まった

く私の目には操り人形に見えた。死者の群に見えた。

イエスの言葉に「死者に死者を葬らしめよ」とある。それは棺桶の中の人と同じように、かつぐ人々も死んでいる。そして弔いに参列する人々も見物する人々も死者の部類に入るということだ。イエスただ一人だけが「生きた人」であった。あなたはどうか。私はどうであろう……。

私はイエスのような人か、或いは棺桶をかついでいるタイプの人か。残念ながらどう贔屓目にみても果てしなく死者の方に近い。はっきりいって我々地球人は未だ覚醒していない死者の集りであるといえばいいすぎだろうか。最近とみにサバイバルという言葉が使われる。現在「生きている人」のみに当てはまる言葉で、死者が生き延びることを考えるのはおかしい。こっけいである。

我々は今こそ「真に生きる」とはどういうことか。「真の幸せ」とは何か。自己中心性の中には生命も幸せもないということに気付かねばならない。自己中心性から脱皮して、宇宙へはばたく時が来たのである。

愛の共鳴こそ真のテレパシー

ここでテレパシーをとりあげてみよう。我々はESPカードの結果に一喜一憂する。しかしカード練習で素晴らしい成績をあげても、それは真のテレパシー能力とはたしていえるだろうか。アダムスキーは「愛に満ちた感覚こそ真のテレパシーの伝達径路である」といっている。我々はその愛に満ちた感覚をどれだけ真剣に育てて来ただろう。たとえばイエスは空よりも広い包容力があった。海よりも深い愛があった。人々の心の奥の「いたみ」「苦しみ」「悲しみ」をひしひしと感じることが出来たゆえに、よく泣かれたという。人々が持つ「いたみ」への共鳴である。その一〇〇%の愛の共鳴があったればこそ、すべてが見えすべてが聞こえ、万物と一体であった。この愛の共鳴こそが真のテレパシーである。テレパシーにとって愛に満ちた感覚を育てることこそが最重要であり、それなくしてテレパシーの開発はあり得ない。

地球卒業のラストチャンス

我々は今、地球卒業のラストチャンスをむかえている。永遠の生命の光の中で宇宙の王国に住むか、或いは永遠に消滅するか、絶対に後に引けない時であるからこそアダムスキーは「目標にむかって弾を撃ちまくれ」といったのだ。

我々は今日まで何回転生リンネをくり返して来たことか。何度くり返したら覚醒するのだろう。ある時は貧困のドン底に喘ぎ、ある時は傲慢な貴族として搾取にあけくれ、それら数千年の苦闘を通じて、どれだけ宇宙に近づけたであろう。万物は兄弟といわれているが、血肉をわけた家族の中ですら調和がなくて、はたして宇宙の仲間入りが出来ようか。

自分のものは元来何もない。肉体も離れてゆく。魂すら自分の思い通りにはいかない。それなのに人々は肉体にとらわれ、物に執着し、金に生涯翻弄される。そして自己保存の闘いに明けくれて来たのではないか。それは本当に長い長いトンネルであった。しかもほとんどの人は永遠に抜けることのない暗黒の世界へと突っ走っているのである。その列車は一見物にあふれ快楽に満ちている。しかし冷静に凝視するなら蛆虫だらけの屍文化であることに気付く。このまま走ればまちがいなく奈落の世界へ墜落する。そのことに気づいたなら一刻も早く飛び降りなければならない。列車はだんだんスピードを増している。列車地球号の搭乗員はそのことに気づかないまま列車とともに滅亡するだろう。今世紀の終わらないうちに。

列車から飛び降りるということは、おのれから離れることである。自我我欲の自分から飛び降りるということである。それが「おのれの生命を失う者は永遠の生命を得る」ということである。

地球人類がはじめてネオホモサピエンスとして宇宙の仲間入りする時である。もはや自分中心の想いは存在をゆるされない。宇宙的進歩のみられない者は立ち去らねばならない。しかも我々はさん然と輝くガイドブックを抱えているのである。今のあなたにとって何が最も大切か、手おくれにならない前にじっくりと考えねばならない。

まず自分自身を知ること

今あなたは何処にいるのか。「生きた人間か」「死んだ人間か」。宇宙哲学に接して何年になるかは問題ではない。どれだけ宇宙的な、たしかな前進が出来たかが問題である。本当に一行が、一ページが実行出来ているか、実践出来ているか。明日になれば微塵に砕ける安っぽい何かを「宇宙的フィーリング」と称して陶酔してはいないか。

静かに自分の胸に聞いてほしい。今あなたは聞っているかどうか。聞いの相手すらわからないのではないか。自己中心の牢獄の中にいるかぎり、一〇〇年宇宙哲学をやろうとも宇宙的一歩をふみ出すことは出来ない。

最後に再び聞こう。一つだけ

●習慣的考えをすてましたか。

（『テレパシー』53ページ11行）

まず「自分を知ること」だ。ころがる石には苔がつかないといわれているが、神の子である真我は習慣的考えと自己中心の想いでまったく醜いコールタール漬けのようになっている。我々のそれは苔というようなまやさしい代物ではない。その真我を覆っている偽我の自分を叩き割るには想念のチェックと反省が必要である。

想念のチェックと反省は、その方法とコツを誤るとたとえ数十冊やっても無意味である。堂々巡りでたとえ二十年、三十年やろうとも前進はない。

その想念のチェックと反省のコツは次回に譲りたい。

●宮内氏への質問や会見を希望される方は左記へ。会見は電話で予約すること。

510三重県四日市市安島1－2－10、ユキマリンビル。☎0593－51－2317

イメージ法で起こる奇跡

■東京大会の講演録
■今年5月2日の月例会における講演録
■例会で発表された要旨

高梨和明

「イメージ法」が実践の主軸

私は石橋をたたいて渡る性格ですから『生命の科学』の本でさえも買うのも躊躇し、やっとそれを手に入れても、それも石橋をたたきながら読みました。『生命の科学』を読むのが本当に怖かったのを覚えています。

徐々にGAPについてわかるようになり、想念観察も始めるようになりましたが、なかなかその具体的な方法というのがよくわかりませんでした。ですから試行錯誤をやってきたわけですが、だんだん悪い想念ばかりを集めてしまい、徹底して自分の悪い想念を排除しようとするとだんだんネガティブな想念が増してきて引き寄せてしまい、全く困った状態に達してしまいました。そこで想念観察を中止してしまい、しばらくたって思い出したかのように開始する、というようなことを今まで何度も繰り返してきました。そのたびに自信をなくしてしまうこともありましたが、長い人生ですからGAPにしがみついてでもやってゆこうと思っておりました。

このようにいつも想念観察というものにつまっておりましたが、それまでにいろいろな方法を自分で考えてみました。その中で自分を励ましてくれた方法が、「イメージ法」でした。今でもこの方法が私の実践法の主軸となっています。このイメージを描く方法の応用によって想念観察を実践する際の、よきアイデアがどんどん湧き出てくることになりました。この心の中にイメージを描く『イメージ法』が私の人生を変えることになり、それまでずっといじけていた私がだんだんと明るくおおらかな気持ちになってきたのです。この変化は今思えば想像を絶するものです。

イメージ法で手にした優勝カップ！

私の職場は中伊豆温泉病院といい、リハビリテーションの病院ですが、その職場の人たちでボーリングクラブをつくっております。

私はイメージを描く方法をこのボーリングにもやってみたのです。昨年の十二月に、いつものように優勝しているイメージを描いてみたのです。スコアカードにできるだけ欲張って書いて、名まえも「タカナシ」と書いたわけです。

そして実際は、イメージが実現しなかったのでしょうか三位でした。ところが私の妻が優勝してしまったのです。妻は私の何分の一かの練習しかやっていませんので、あまりうまいとはいえなく、むしろヘタな方なんですが、なぜか優勝してしまったのです。後で考えてわかったのですが、私は姓字の方だけ「タカナシ」と書いてしまい、名まえの方を書かなかったためにこうした現象が起こったんだとはっきりわかったんです。

次回の大会の前にまた強烈なイメージを描いてみました。今度は私の妻ではなく自分自身が優勝しているイメージを一層強力に描いてみたんです。そして今度はフルネームで書いたんです。その結果運動神経の鈍い私が、まるで機械がこわれたかのようにストライクが連続してゆくんです。投げれば全部バタバタ倒れるのです。結局二五六点という点数がでたわけです。ボーリングを少しでもご存知の方はこの得点がなかなかでないということをご存知だと思います。ストライクが連続して出ないとこの点数にはならないのです。ちょっとでもミスをするとだめなんです。とにかく私も驚きましたがむしろ会場に来たみんなが驚いて、もうどうかなっちゃんたんじゃないかといっていました。

しかし私にはもうはっきりこんな奇跡がどうして起きるのかがわかっていました。そして私はとうとうイメージに描いた通り優勝カップを手に入れることができたのです。

「ミラクルイメージ」を考案

このように日常生活にはいろいろな利用法があると思います。これが毎日、試行錯誤しながらも何とかモノになってゆくわけです。自分で体験してゆくことが重要だと思います。そして「イメージを描くなら具体的に、しかも鮮明に描け」というのは実に本当だと思います。私は「イメージ法」というものを、先生が奇跡を起こすことばを「ミラクルワード」と呼んでいるのにヒントを得て、「ミラクルイメージ」と呼んでいます。

このように私はミラクルワードやミラクルイメージをいつもやっています。これらをやめたときがどうも変だ、というぐらいしょっちゅうやっています。日常いつもイメージを描いて、幸せな雰囲気でいると、どんどんまた幸せなことを引き寄せる。そしてどんどん人生が楽しくなる、創造主は人間を不幸にするために生かして下さっているのではなく、宇宙的に、幸せにするために生かして下さると私は思っています。ですから想念観察をして、ミラクルワードを唱えて、ミラクルイメージを描いて、創造主の意思に応えなければならないと思っています。一日二十四時間徹底的にこれをやるんです。

私はこのイメージを描くということにいろいろ懸念もあったのですが、初めは静かな場所で、ひとりきりで描かなければならないと思っていました。またGAP関係の資料をギンギン読んで、意識を高めてからやるということをしていました。でも今考えるにそうしたことはちょっと間違っていたという気がします。

これも自分が経験してきてわかったことですけれども、もっと気軽に始めるべきだと思いました。私は最初の頃、一日に一回か二回しかイメージを描かなかったのですが、この時はやはりあまり実現しませんでした。そこで私は静岡支部代表の野口さんにこの件についてご相談してみましたが、即答で、「イメージというものは緊張して、あらたまって描くものではなく、今すぐにでもその場で、一日二十四時間ずっとやることです」というものでした。私はこのアイデアを野口氏から頂いたとき大変驚きましたが、同時にパッと開けてきました。

それからというものイメージを一日中描くという方法を応用してきました。最近では、毎日仕事をしているときでも、歩いているときも、電車に乗るときも、その他何をするときでも、どんどん絶えることなくミラクルワードを唱えています。

太陽のイメージ法

イメージを描くことが実践の主軸であると思いますが、アダムスキー哲学では「想念観察」をしきりに勧めています。そしてこの基本が重要だともいっています。私も想念観察中に、宇宙的なプラスの想念か、マイナスの想念かを分析して、マイナス想念には「注意！」といって打ち消し、プラス想念には「もっと増幅せよ」という想念を加える練習をしてきました。ところがマイナス想念が「これでもか、これでもか」と出てきて、まるで電気掃除機のようにそのマイナス想念を吸い込むような、そんな想念観察ばかりをしていたわけです。これでは何にもならないことに気づいて、昨年の総会で笠原氏が言われた「想念通過法」というのもやってみました。でもなかなかマイナス想念が消えないで、すっかりいじけてしまいます。でも何とかして想念観察中にすっきりさせたいと考えていました。

偉大なパワーのようなものがあれば、そのようなものが消えると思うんです。でも私にはむずかしくて、そのパワーを随意にコントロールすることはできません。そこで私はミラクルワードやミラクルイメージで、あるひとつのパワーのシンボルを考えついたのです。それは〝太陽〟です。自分が太陽になってしまったイメージを描けば、太陽の放射線を万物に放射することができて、その放射を受けた万物は輝いて、自らの眼にも輝いて見える、と久保田先生はおっしゃっておられました。これは大変驚くべき素晴らしいご教示でした。私はこれにヒントを得て「太陽のイメージ法」というものを考えついたのです。これを想念観察中に、利用するわけです。マイナス想念がある場合、これを太陽からの放射線で焼ききってしまったり、あるいは太陽の焼却炉をつくってその中へ入れてしまうというようなイメージを描くわけです。この「太陽のイメージ法」を意識の銀幕の中に描くんです。私は太陽をパワーのシンボルと考え、意識の銀幕の中のヒーローと考えています。イメージはどんなことにも応用できますし、各個人によって異なると思いますので、他の方は別のイメージを描くかもしれません。自分に合ったイメージを描くのが一番よいと思います。

このように心のイメージ法にはたくさんの応用法があると思います。そしてイメージを描いてよいことを考えていれば、調和の法則によってよき物事をどんどん引き寄せ、よき人間をも引き寄せます。GAPの研究をするのにはめぐり合う人々の影響というものが本当に大きいと思います。これまでだいぶ時間がかかりましたが、最近よき友達や先輩に出会うことができました。

予知夢が完全に実現する！

睡眠中の夢を記録することを私もときどき思い出したかのようにノートに記録しています。夢はわからないことばかりですが、その夢の中に「予知夢」というものがあります。昨年の四月三日のスケッチに次のようなことが書いてあります。

「私は愛用のカメラに二百ミリの望遠レンズをつけ、撮影の準備をしながらうろうろ歩き回っています。そうすると五人の人が正面に並んで、一番右側が遠藤氏、その隣に野口氏がおり、しかしその隣に立つ女性らしき人物ともう一人の男性は誰かわからない。そして一番左端には浜松の小島氏が立っていた」

そしてその翌月になって静岡支部大会があり、その前日にこの夢の方々とお会いすることになったのです。会長を待ちながら、やはり二百ミリの望遠レンズと大きなストロボをつけ、待っておりました。そのうち小島氏がみえ、次に突然野口氏がいらっしゃって、その場にいた人たちを紹介し始めました。それが向かって右から、遠藤氏、野口氏、そして問題の女性ですが、これはわからないわけです。私が今生で初めてお目にかかった藤原美由紀さんだったのです。そしてその横隣りは、やはりその時初めてお会いした松山支部代表の伊藤達夫氏でした。その隣は浜松の小島氏だったわけです。先に見た夢が見事に実現した予知夢でしたが、実に感動的な出来事でした。

勇気と信念と希望をもって前進しよう！

私の実践の基礎は想念観察、ミラクルワード、ミラクルイメージ（イメージ法）ですが、これらは区別するのではなく渾然一体として実践するものだと思います。想念観察も受身的にビクビクしながらやるよりも、積極的に心中に常にミラクルワードを唱えてやる方が、ネガティブな想念を受け付けないでやれば傷つくこともなく、ますます宇宙的なことが舞い込んできて、人生がほんとうに楽しく、裕福になってくると思います。

特にGAPのメンバーは、偉大なるジョージ・アダムスキー氏や久保田会長からこの上もない恩恵を頂いているのですから、この特権に感謝して、ミラクルワードを唱え、ミラクルイメージを描いて自己の意識の変換をして、勇気と信念と希望を持てば理想的な世界を実現できるはずです。これからも宇宙の友としてよろしくお願い致します。

●日本GAP企画第3回海外研修旅行

「アメリカ(メキシコ カリフ海)宇宙考古学の旅」紀行　久保田八郎

太陽と神々の国讃歌

日本GAPが今夏実施した企画第三回「アメリカ(メキシコ カリフ海)宇宙考古学の旅」は、去る八月十五日に総勢二十八名で成田空港を出発し、米西部のカリフォルニア州とアリゾナ州を周遊した後、メキシコへ飛び、メキシコ市を根城にテオティワカンの大遺跡やユカタン半島一帯の古代マヤの宇宙的な遺跡を見学、十六日間にわたる大旅行を終えて八月三十日全員無事に成田空港へ帰着した。今回は総員二十八名という少人数のため、まとまりのよい、ゆったりとした非常に愉快な旅となり、アメリカとメキシコのリラックスした雰囲気と異国情緒(エキゾチズム)を存分に満喫することができた。参加者各位とご支援を頂いた全国の会員各位に厚く感謝する次第である。

×　×　×

八月十五日正午、遠藤君が阪田尚子さんと共に拙宅へ車で迎えに来た。一方、山口君、安藤君（旅行参加者）、田中義則君、松本君らも見えて、荷物を二台の車に積み込み、勇躍成田へ向かって出発した。私が企画主宰した海外団体旅行は出版屋時代に二回、GAPとしてはこれが三回目で計五回目となり、団体の引率には慣れているつもりだが、やはり緊張する。なお私個人の海外旅行はこれで計八回目である。

しかし〝危険をのがれる特殊なカルマを持つ私〟が参加する旅は絶対に事故が発生しないという確信があるので不安感は全くない。提携旅行会社の添乗員(スチュワーデス)たる田中氏もこの点を不思議がっておられた。氏は過去数十回海外旅行の世話をしてこられたベテランだが、毎年私が企画する海外旅行に限ってたまに軽い病人が出る程度で全く何の支障もなしに安全に事が運ぶので、不思議でしようがないと言われる。そして今回も無事に全旅程を終えたのである。

成田空港には早目に到着したのでレストランで暫時少憩後、四時より南ウィングで参加者全員の簡単な結団式を挙行後、全員記念撮影を行い、五時すぎに野口、遠藤、阪田、山口、松本、大山、山木、田中（義）、渡辺の各氏らの盛大な見送りを受けてパスポートコントロールへ降りたあと、シンガポール航空12便で定刻を二十分遅れて七時二十分に離陸した。

田中氏によるとシンガポール航空は機内のサービスが優秀だということだったが、間違いなかった。民族衣装を着たスチュワーデスたちはきわめて親切で、酒類は無料で飲み放題。私はウイスキー水割りを二杯ほど飲んで体を休めた。

ロサンジェルスまでの十時間という時間をもてあますので、昨年の南米旅行の際はポケット用ステレオテレコにテープを携行してマーラーの交響曲などをヘッドホンで聴いたが、今年になってからどういうわけか人工的なクラシック音楽に対する関心が極度に薄れてしまい、自然界の音響（I／fともいう）――風の音、川のせせらぎ、波の音、雨だれ、鳥や虫の声など――に心がひかれるようになったので、今回は音楽を聴かず、安全に帰国するイメージをひたすらに描き続けた。そして少し眠った。

●成田空港にて。前列左より、近藤久美子（広島市）、升田裕子（同）、宮下志づゑ（東京）、伊藤遠夫（愛媛県）、石川敏雄（東京）、中根豊（青森県）、星富治夫（新潟県）、内田淳次（大阪市）、鶴田清則（鹿児島県）、原弘子（東京）、ワールドセブントラベル古尾谷社長。中列左より、新里義雄（沖縄県）、元井武士（東京）、佐々木朋子（広島市）、伊東佐和子（千葉県）、佐々木三羊子（秋田県）、佐々木由香子（東京）、島田利勝（長崎県）、工藤千恵子（神奈川県）、山城尚雄（前橋市）、渡辺貫子（兵庫県）、吉田嘉美（北海道）、大橋博子（同）、田中正（添乗員）、久保田八郎（旅行団長）。後列左より、斉藤康英（大阪府）、清水正（山形県）、佐分敏治（愛知県）、安藤澄雄（宮城県）。

アメリカ人よりも日本人が優秀!?

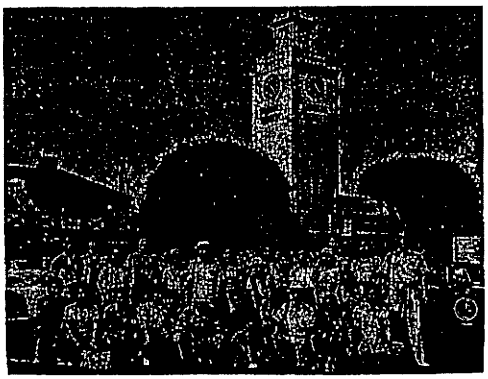
日本時間の午前三時十分前に機内点灯、総員起こしとなり、おしぼりが配られ、朝食が出たが、あまり食欲はおこらない。日本にいれば夜中だから当然だ。

日本時間の五時十五分、現地時間で十五日の午後一時十五分にやっとロサンジェルス空港に到着した。ここのイミグレーションの手間どることは有名だが、今回はわりとスムーズにゆく。空港ビルを増築中とのことで、バルーン（気球）と呼ばれる巨大な布張りの仮設建物の中でパスポートの検査が行われた。外へ出ると空は抜けるように青く、日差しは暑いが、空気が乾燥しているので爽快である。

ガイドさんは現地在住の日本人、山本博氏（福井県出身）で、英語はアメリカ人なみにしゃべれる方だが、移住してまだ三年にしかならぬという。この方の中学時代からの英語学習体験は傾聴に価する。要は信念と努力の問題である。

三時から全員バスで市内見学に出た。私自身は何度も来ている町だから物珍しくはないが、アメリカを初めて見る人が多いので、型どおりにセンチュリーシティー、ウィルシャー通り、ベバリーヒル、サンセット大通りと周遊し、ファーマーズマーケットで降りて広場で全員記念写真を撮り、市場で百パーセントオレンジジュースを一ビン買って、バスの中でときどきラッパ飲みをやりながら喉をうるおし、更にハリウッドの中国風映画館前で休憩して、次にロサンジェルス発祥地たるオルベラ街で十字架を背景に全員を写し、日本町リトゥルトーキョーを通過して、ロサンジェルス・ヒルトンホテルへ到着したのは六時だった。ここは一昨年のアメリカ中米宇宙考古学の旅で宿泊したから、これで二度目となる。

ロサンジェルスはアメリカ有数の大都会で、日本の都市とはたしかに異質的な町であり、見た眼には美しいけれども、話を聞くと、観光旅行者には理解しがたいような大国の持つ病患部が裏面にひそんでいるらしい。考え込まざるを得ないような事実を何度か聞いたけれども、私たちは政治経済の専門家ではないから、こうした問題をここで深刻に取り上げることは避けて、一旅行者として見聞したままを率直に綴ることにしよう。ただ現地在住の日本人の方々から聞いた話を綜



●ロサンジェルスのファーマーズマーケット前にて。

合すると、アメリカ人（特に白人）は生活程度は高いけれども知的レベルになると日本人よりも低いということになるらしい。日本人ほどに暗算が敏速にできない白人が多いという。しかし生活様式を高度に保つ能力があるくらいならそれなりの知能もありそうなものだが、その辺の詳細がどうもよくわからない。

夕方七時からホテル内の一室で最初の全員夕食会を開いた。この席に珍客が二人参加した。GAP会員でカリフォルニア大学のヘイワード校に留学中の脇民典君（長崎県佐々町出身）とその友人の山本君の二人である。サンフランシスコ付近からロサンジェルスまで車を飛ばしてかけつけたのだ。この二人の留学体験談は貴重なものだった。そしてアメリカ人よりも日本人が断然優秀な民族なのだと脇君が折にふれて強調していた。

清澄なパロマーガーデンズを訪れる

十六日は早朝六時に目覚めて時差ボケが解消。旅行中私は朝食を一切とらぬことにしているので、ゆっくりと身仕度ができる。

九時に全員バスでホテルを出発してフリーウェーを疾走し、そのあとを脇君と山本君の車が追いかける。目指すはパロマー山。紺碧の空に太陽が燦然と輝き、快適なバス旅行となる。十時頃果物市場に立ち寄って少憩し、十一時にオーシャンサイドのレストランで昼食をとる。一時半にレストランを出てパロマー山の登山道路を登り、二時頃にまずキャンプグラウンドへ着いて降りた。

●パロマーガーデンズ。後方の木小屋はア氏が建てたもの。

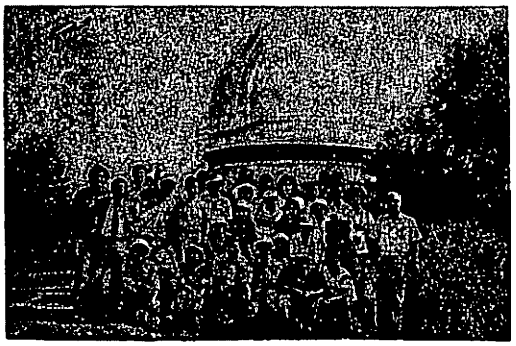
ここは一九五〇年代にジョージ・アダムスキーが一族と共に住んだ場所で、当時はパロマーガーデンズと呼ばれていた。生活資金を確保するために弟子のアリス・ウェルズ女史がここでレストランを経営し、パロマー天文台見学者の休憩所として役立った。俗界を離れてこの山中に多年住んだこと自体、アダムスキーが超俗の人であったことを示すけれども、もっと重要なのは、ここに在住していた当時、アダムスキーが六インチ反射望遠鏡を駆使して、名高い円盤写真類を撮影したり異星人とコンタクトをしたのであって、「宇宙からの訪問者」に述べられている体験の原稿はすべてここで書かれたのである。したがって現在ビスタでアダムスキー財団となっている晩年の四年間をすごした家よりも、このパロマー山中の静謐な場所のほうが史跡としては重要である。このパロマーガーデンズにアダムスキーが住んでいた頃から私は文通を続けていたから、ずいぶん古い話になるのだが、私自身はここへ来るのが今度で五度目にすぎない。

しかし最初に来た七年前と様子はほとんど変わらず、レストランの跡はコンクリートで固めてあり、アダムスキーが自ら建てた木小屋もそのままで、これらはこの土地の現所有者によって永久に保存されることになっている。

私から皆さん方に由来を説明し、全員の記念写真を撮ったあと、しばらく解散した。清澄な空気の中にキャンプ中のアメリカ人の子供たちの騒ぐ声が響いて、少々うるさい。しかしア氏が愛したという樫の大木は今もなお帰らぬ主人を待っているかのようだ。初めてこの場所を訪れる皆さん方の心情は私にもよく理解できるが、時間に制限があるので約四十分後に再度バスで山頂を目指して出発した。

二時三十五分に山頂の駐車場に到着。ここでバスを降りた一行はまず右側の天文博物館を見学して、小道を歩きながらパロマー天文台へ向かった。一点の雲もない青空に高さ六十メートルの白亜の大ドームが映えて美しい。これをバックに全員記念撮影後、私たちは天文台の内部に入った。かつて世界一を誇った二百インチの巨大な望遠鏡のメカニズムについて皆さんに説明していると、アメリカ人の団体がぞろぞろと立ち入り禁止区域の中心部へ入って行く。ガラス越しにガイドの山本氏が雑談でもって理由を尋ねると、あらかじめ内部の見学を申し込んで許可を得た団体は望遠鏡の反射鏡の位置まで行けることがわかった。しかもこの団体のために係員が操作してドームのスリットを開いたり、ドームを回転させたり、望遠鏡や極軸を動かしたりしたから、めったに見られぬ光景に一同大喜びした。

いったいに今回の旅行はツイていた。八月に全米航空管制官組合のスト騒ぎが発生して海外向け飛行機が引き返したり旅行を中止したりするので、どうなることかと気をもませる状態だったが、その騒ぎがおさまった直後に私たちが出発し



●パロマー天文台をバックに。

たのだ。ところが実はこうした状態になることをテレパシストの田中氏が昨秋すでに予言していたのである。「来年の旅行の直前に何か大きな事件が発生して実現があやうくなるが、結局は行けることになって全員無事に帰国するだろう」。まさにそのとおりになったのだ！

アダムスキー財団を訪問したけれど

四時半にバスで山頂を出発して下山の途につき、六時にビスタ市内のヒルトップモーテルに着いて旅装を解く。ここも昨年宿泊した場所だからなじみ深いが、経営者は白人から中国人に変わっており、しかも奥さんは日本人同様に日本語を話すので便利だ。

日本でモーテルと言えばよくないイメージが浮かぶけれども、アメリカでは車で旅をする人のための宿泊施設をモーテルと称し、室内は一流ホテルなみの立派な設備がしてある。風光明媚な南カリフォルニアにはこうしたモーテルが沢山ある。ただちにアダムスキー財団のステックリング氏に電話をかけると、夜九時半に私の部屋へ来ると言う。

私たちは七時に町の中心部にあるキャロウズというレストランへ行って夕食をとったあと、自室へ帰って待機していると、時間通りにステックリング氏とホワイティング氏が車でやって来た。室内に請じ入れて約四十分間話し合ったが、彼らは翌十七日の財団訪問はよいけれども、多忙で余暇が取れぬため夕食会には出席できぬと言う。また十八日のデザートセンター行きも、ステックリング氏は午後三時までに帰宅して仕事に出かけねばならぬから、朝七時までに出発するのならなんとか現地まで案内できるが、それ以後の出発では同行しかねると強調する。二人を見送ったあと私は田中氏やガイドの山本氏と協議して、夕食会は私たちだけでやろうということにした。彼らには複雑な事情があるようだが、私たちの旅行は合同夕食会が主目的ではないということを皆さん方に説明すると、一同はこころよく了解された。人間の理解力と協調の重要さをこのときほど痛感したことはない。

翌十七日の午前中は自由行動なのでゆっくりと眠り、十時に朋君と山本君が私の部屋を訪れたので、室内で約一時間ほど語り合ったあと、十二時に全員でキャロウズへ昼食をとりに行き、一時にアダムスキー財団を訪問した。

アダムスキーに最も長く仕えたというマーサ・ウルリッチさんは九十歳を越える高齢だが、おそろしく元気な婦人で、私たちの来訪を大喜びし、屋内の見学を気持よく許してくれた。

まもなくステックリング氏が来たので皆さんに紹介したあと日本から携行した土産物を贈呈し、質疑応答を行い、これを朋君と山本君の二人が通訳した。二時半にス氏が去ったので、そのあとなおもアダムスキーの寝室その他を見学する皆さん方に私が説明しているうちに、妙な事に気付いた。

アダムスキーは私以上の大男であったとのことで、以前に何度も見た彼のベッドはたしかに大型であったが、今度見るベッドはなぜか小さいのだ。これでは身長一メートル八十センチ近くの私でさえも足がはみ出て寝られないだろう。この点を指摘した人が他に一名いた。取り換えたのか？　また、以前にだれかが伝えてくれた話によると、一人の日本人がこの財団を訪問した際にこの部屋のア氏のベッドに寝させてもらったことがあるという。これが事実とすれば全く価値はないことになる。

●アダムスキー財団にて。前列左より筆者、マーサ・ウルリッチさん、フレッド・ステックリング氏。

もう一つ気付いたのは入口の壁にかけてある金星人オーソンの絵である。これは昔、アダムスキーの話やアリス・ウェルズ女史のスケッチなどを参考にして、ア氏の友人であった女流画家のゲイ・ベッツが描いた名画だが、あるときポヤが出て煙のためにオーソンの顔が黒ずんでしまった。昨年私がビスタに滞在したときはまだ黒ずんだ状態のままであったのに、これがきれいに修復されているのだ。これではベッツの描いた当時の高貴な波動が消滅してしまい、価値はない。大体、貴重な美術品の書画などをむやみに修復するものではない。汚れていてもオリジナルのほうがよっぽど値打ちがあるのに、つまらぬことをしたものだと失望の念を禁じ得なかった。もうアダムスキーの時代は終焉を告げて〝修復された遺跡〟の時代に入ったということなのか。

複雑な心境でこの家を辞したのは三時頃で、バスでモーテルへ帰ってからゆっくりと仕度をし、全員盛装してバスで隣町のエスコンディドに向かったのは五時である。メドウレイク・カントリークラブのレストランというので、てっきり湖のそばだろうと思い、運転士に湖を探させたが、さっぱり見つからない。結局、山中のゴルフ場の静かな食堂で愉快に数時間をすごしたが、白人のウェーターは皆さん方の立派なマナーに感動していた。

九時にバスでここを出てビスタ市内へ帰り、バーへ入って、ここでも楽しくすごし、十二時にモーテルへ帰ってから、更に伊藤達夫氏（愛媛県）の部屋に七～八人が集まって深夜二時まで談笑した。

熱砂のデザートセンター行き

翌十八日はステックリング氏がデザートセンターまで同行するというので七時にモーテル前に集合し、やがて車で来たス氏の助手席に私が乗り、バスを先導して一路アリゾナ州境の方角を目指してぶっ飛ばす。途中ス氏は約三時間休みなしにアダムスキー問題やUFO関係の事件などに関して興味深い話をしてくれた。それによると、アメリカ政府の要人や一部の科学者連は太陽系内の別な惑星群に進歩した人類が存在することを知って知り抜いているのだけれども、現状では公表できず、どうしようもない状態にあるのだという。

デザートセンターに到着してからス氏はホワイティング氏からあずかったという手紙を私に渡してすぐに引き返して行った。私たちは全員で醵金した合計二百六十一ドルを財団に対する献金としてス氏に贈り、心から感謝した。

熱風の吹く砂漠はものすごく暑く、温度を計ってみるとセ氏四十一度ある。一同は約一キロ歩いてコンタクト地点へ到着した。ここは一九五二年十一月二十日、アダムスキーが金星人オーソンと会見した場所で、三十年間の風雨により地形は少々変化しているようだが、コンタクト地点たることに変わりない。当時の模様は『宇宙からの訪問者』に詳述してあるので省略するが、実はこの場所が重要なのは他にも理由があるのだ。

二千年前、イエスはエルサレムのゴルゴタの丘で磔刑に処せられたが、ローマ軍の兵士が引き揚げてから、上空に金星の円盤が飛来して特殊な放射線を放射してイエスを蘇生させた。その夜イエスは夕食をとり、円盤に乗せられて、アメリカ大陸のこのデザートセンター砂漠へ飛来し、ここで宇宙の法則を探求していた偉大なインディアンの種族の指導者として八十数歳まで生きて、この地で最後をとげ、死後は火星に女性として転生して、その惑星でも精神的な指導者としての生涯をすごし、その後金星へ転生して帰ったという。

ゴルゴタでイエスが磔にされる前に弟子たちはローマ軍の兵隊に詰問されると、ごまかして逃げてしまったが、最後までイエスを救出しようとして付き添っていた弟子が一人いた。黙示録を書いたヨハネである。このヨハネは二千年後にアダムスキーの名で転生して宇宙の法則の探求者として活動することになる。そして、かつてのイエスであった金星人は「今度はあなたを援助してあげよう」と、この地で劇的な対面をする。これがオーソンと名付けられた人である。

以上の話はかなり以前に東京でステックリング氏から聞いていたのだが、一昨年の『アメリカ中米宇宙考古学の旅』でここを訪れたときに、同行の日本人の皆さん方にその話をしてよいかと尋ねたら、内緒にしていてくれと言い、昨年の『アメリカ南米宇宙考古学の旅』でここへ来た際に同様の質問をしたら、あんたの意志にまかせようと言うので私は黙っていた。

●デザートセンターのコンタクト地点。すごく暑い！

ところが今回別れ際に同じ質問をしたら、あっさりと「話してもいいよ」と言うので、現地で皆さんに説明した。荒唐無稽に響くだろうが、以上の内容を聞いたままに伝えることにした。判断は読者の自由である。また、ス氏がこころよく承諾したとき私はある予感を覚えたが、それはあとで的中した。

コンタクト地点で全員の記念写真を撮影後、暫時解散する。丘の上のインディアンの井戸を見に行く人たちもいる。だが、なにせ暑くて隠れる場所もないので、約三十分後に引き揚げてバスの方へ帰った。そしてロサンジェルス目指して長途のドライブを開始した。ちなみに私はデザートセンターへ行く道順と地形をよく覚えたので、今後は私が案内できると思う。

果てしもない西部の大荒野が展開し、アメリカの雄大さを実感する。しかもここは全米の国土のほんの一部分にすぎない。西部開拓時代の疾走する幌馬車の蹄音とインディアンの喚声がとどろくような錯覚を覚えるうち、長時間車内の冷風をモロにあびた上、ホワイティング氏の不可解な手紙を読んでいるうちに気分が悪くなってきた。

五時前にヒルトンホテルへ着いたときは寒気がして体が震えだした。自室へ入ってからすぐに就寝したところ、まもなく発熱してきた。抗生物質のアクロマイシンを飲んだら、九時頃から熱が下がり始めて気分が良くなったので、ホテル内のレストランから食事を取り寄せた。ビーフサンドイッチと紅茶で八ドル八十九セント。かなり高価である。夜は睡眠薬を飲んで熟睡し、三時頃目覚めてからあとは眠れなかった。

十九日の朝八時前に田中氏から電話があり、グランドキャニオンへ行くかどうするかと尋ねられたので、行けないこともないが、キャニオンへは昨年行っているし、大事をとって今日は一日休養したいと伝えて寝ていることにした。昼前に食事を取り寄せる。やはり九ドル近くと

られる。中米人らしいボーイに十ドル渡して、釣銭はチップとして取ってくれと言うと「オー、ビューティフル」と言って大喜びする。

夕方、八時前にグランドキャニオンから帰った田中氏からまた電話があり、気分がよければ夕食をとりに一緒に出かけないかと言われるので、入浴してから大勢の人と共に日本人町のリトゥルトーキョーの日本料理店へ行った。ここで日本酒を少々とスシ、ウドンを食べたが、このウドンは東京でもお目にかかれないほどの美味で、どうやら大阪から来た職人さんたちが作るらしい。道理でうまいはずだ。ウェートレスをやっている従業員は皆上品な顔つきのお嬢さんタイプの人たちで、こちらに留学している学生さんがバイトで働いているのだという。日本人留学生のバイトは違法なのだが、結構やっているようだ。

十時半にホテルへ帰って就寝。

白銀色のUFOが出現！

二十日は五時半に起床した。気分は好調である。室内温度は二十三度。外気は二十二度。六時半に全員ホテルを出て三十分後にロサンジェルス空港着。今日はメキシコへ行くのだ。ここで日本へ帰る石川敏雄氏（東京）やガイドの山本氏と別れた。少々寒いのでトイレでモモヒキをはく。

七時発のメキシコ市行きメヒカナ航空九一五便のDC10型機が予定を二十五分遅れて七時二十五分に離陸した。

メキシコ上空だろうか、九時四十三分頃、突然、田中氏が左の窓外を指さしながら叫んだ。「あれは何だ?」。見ると遠い山上の空に白銀色の物体が浮かび、不規則な運動をしている。

飛行機にしては動きが一定しない。右から左に方向を少し変えて、そのあと静止した状態になったが、やがて急に消滅した。物体は強烈な白銀色に輝いていた。私の左側の窓際に座っていた伊藤佐和子さんはキャッチできなかったようだが、前列の窓際の伊藤氏と清水君は確認し、清水君は双眼鏡で観察したあと一三五ミリレンズ付きのニコンで撮影した。目撃時間は三十ないし四十秒ぐらいだろうか。後日判明したが、清水君がファインダーで確認しながらシャッターを切った写真には現像後物体が全然写っていなかったという。奇妙なことがあるものだ。

日本人を尊敬するメキシコ人

米時間の十二時半にグァダラハラ空港着。いったんイミグレーションを通過して、ただちに再度同じ飛行機に乗り、出発。二時にメキシコ空港へ着陸。これはメキシコ時間で三時に相当する。

四時にバスでホテルへ向かう。標高二千三百メートル、富士山の五合目にあたるメキシコ市は八月の平均気温が十五～六度だが、計ってみると今日は二十五度もあり暖かい。人口は千四百万、その点では世界有数の大都市なるもロサンジェルスほどの近代性はなく、中南米特有の不潔さがただよい、雑然としている。

空港へ出迎えに来たガイドさんはメキシコ生まれの日系二世アルトゥーロ・ヤマダ氏。まだ日本へ行ったことがないというこの人はスペイン語と日本語の両方を母国語とする完全なバイリンギストで、メキシコ滞在中、この人からずいぶん有益な話を聞いた。普通の日本人ガイドとは違って抜群に優秀で、メキシコのガイドとしては最高の方である。

氏によると全人口の九十パーセントはスペイン人その他との混血の混血で、雑種化し、純粋なインディオは六パーセントしかいないという。次のような興味深い話も聞いた。

メキシコ人に最も嫌われている人種は〝グリンゴ〟という渾名をつけられたアメリカ人で、これは大国意識をひけらかすからであり、次に征服者意識の抜け切れないスペイン人、三番目に金の餓鬼であるユダヤ人の順序になる。反対に、最も好かれている民族は日本人で、これは大昔、土着インディオの先祖がアジア系であったという感覚と、日本人の一世がこの国で粒々辛苦の開拓をして誠実に働いたために絶大な信用をかち得たからであり、現在も日本人は世界一頭の良い民族で、日本製の自動車、カメラ、時計、電気製品などは世界最優秀だとみなされている等々、尻こそばゆくなるような話をヤマダ氏からうんと聞かされたが、これらは事実であることが次第にわかってきた。

というのは、個人的にも私はむかしから名画『真珠』その他のメキシコ映画を通じてメキシコに魅了されていた。その原動力になったのはこの国の陽気な民族音楽なのだが、スペイン文化とインディオの原始性との混交で醸し出される独特な異国情緒には一種の郷愁さえ感じるほどで、言いしれぬ愛着を覚えていた。そしてメキシコ人も日本人を尊敬していることにうすうす気づいたのは四年前に初めてメキシコを旅したときである。

ところがヤマダ氏も指摘したように、メキシコ人は東洋人を見ても中国人と日本人の区別がつかず、大抵の場合はすぐに中国人と判断して「チノ、チノ」と言い出す。ヤマダ氏も子供の頃はチノといわれたという。そこで今回の旅行では一計を案じて、胸につける旅行団のマーク（これは金星のシンボルマークなのだが）の下に、私だけは小さな日章旗をつけることにした。私自身、日の丸の旗はデザイン的に大嫌いだが、これは「日本人ナノダ」というシルシとしてつけたものにすぎない。私のカメラバッグにも小さな日章旗を貼りつけておいた。しかしこれが行く先々で絶大な効果を発揮したのである。一見して日本人とわかると彼らは親近感を示して接近してくる。そのために私たちが有利になることがしばしばあった。メキシコ人は、いざとなって自分たちを助けてくれる民族は日本人だけだと考えているという。こうした実状を一般日本人はもっと認識するべきだろう。石油が欲しいばかりに口先だけの外交に堕してはならない。またメキシコ人をだらしのない民族だといって軽蔑してかかることは大間違いである。大ジャングルを切り開いてピリャエルモサとカンペチ

ェを結ぶ四百キロの直線弾丸道路を短期間で建設する強靭さを持っているのだ。

熱狂の『思い出の館』

さて、バスで一行は四時半にホテルのフィエスタ・パラスに到着。少憩の後、全員盛装してバスで夕食会場へ向かった。目指すは有名なレストラン『思いでの館』である。ここは一昨年にも来た〝思い出〟の場所だ。ただし今回は人数が少ないために別室は取れず、階下の大広間でメキシコ人たちと共に夕食をとったが、これがよかった。専属楽団を呼んで『ランチョ・グランデ』『ラ・クカラチャ』『シェリト・リンド』その他をリクエストする。ギター四挺、アルパ一挺から成る五人組のハロッチョは一昨年の楽団より優秀で、高らかにメキシコ民謡を合唱する（ちなみにマリアッチというのはトランペットやバイオリンを主体にした楽団で、ギターを弾きながら歌う合唱団はハロッチョという）。

芳醇なワインと陽気な音楽に陶酔した私は、手のすいたボンゴを取り寄せて叩いた。皆さん方にも「騒げ騒げ」とせきたてると一同は歌に合わせて手拍子を打っていたが、やがて全員が立ち上がって肩を組み、体をゆすりながら拍子をとる。熱狂と喧噪――。

すると、私たちを見ていた酔っぱらった一人のメキシコ人の男が私の方に接近して、いきなり抱きついて早口でしゃべり出した。「この店に日本人がよく来るが、みなおとなしすぎる。それにくらべると、あなたのグループはメキシコの音楽に合わせて実に陽気に楽しんでくれる。心から敬意を表したい」と言いながら、酒くさい息を吐いて私の両頬に頬ずりをした。これはメキシコ流の敬意の意志表示である。気持が悪かったが嬉しくもあった。こうした場所では騒ぐほどに彼らは喜ぶのである。

牧歌的な『エスタ・コモ・キエーレ』の素晴らしい合唱を聴く頃には私もかなり酔ってきた。美しい混血女、強烈な竜舌蘭酒、サンフラワー油の生臭い匂い、ギターやアルパの軽快な調べ、歓声と拍手、C音をS音のように発音する歯切れのよいメキシコスペイン語のざわめき――。異国の酒場で私の意識は朦朧となっていった。

●『思い出の館』の楽しい夕べ。

壮大なテオティワカン遺跡

翌二十一日の早朝は気分爽快。バスで九時にホテルを出発して、メキシコ市の北東五十キロの所に位置するテオティワカンの大遺跡へ向かう。天気はよい。

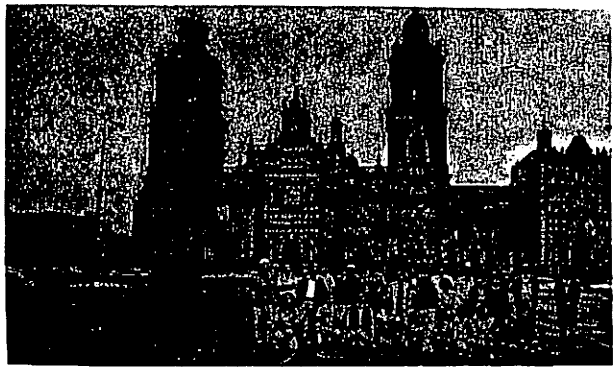
十時頃に現地へ着いて、太陽のピラミッドと月のピラミッドをバックに全員記念撮影後、現地解散する。私には三度目の見学となるテオティワカンは紀元前後頃から謎の種族によって繁栄した大宗教センターであった。六五〇年頃まで文化が栄えたが、別な謎の種族によって滅ぼされた。すべてが謎に包まれている古代の大都市跡である。マヤ古典期前期にはメキシコの大半を支配下に収めるほどの大帝国だったらしい。後年アステカ族がこの壮大な廃墟を発見して畏怖の念に打たれ、太陽のピラミッド、月のピラミッドなどとロマンチックな名をつけた。

現在の両ピラミッドは一九〇〇年代初頭に復元されたとき、かなり外形が変化してしまったが、『太陽』の二二〇メートルの底辺と六十メートルの高さは元のままである。内部のトンネルの発見騒ぎなどの史実については拙著『七つの謎と奇跡』の『古代マヤの謎』で詳述してある。（10頁の写真は太陽のピラミッド）

午前中、強烈な日光を浴びたけれども、二時頃から暗雲が垂れ込めて雨が降り始めたので、全員バスで付近のレストランへ行き、昼食をとった。窓外には激しくヒョウが降っている。珍しい光景だ。

帰途は例によって半官半民の大きな土産物店へ立ち寄ったが、あまり買わなかった。メキシコは銀製品の名産地だが、どうも安くないような気がする。

夕方六時半頃にホテルへ帰り、田中氏と共に近くのタコス専門店へ行くと、ほとんどのメンバーが来ている。タコスというのはトウモロコシの粉を練ってサンフラワー油でセンベイ状に焼いたものに肉や野菜などを包んで食べるメキシコ人の常食で、このタコス屋のは生臭くなくておいしい。食べきれないほどの量に生



●メキシコ市の中央広場

ビールをジョッキ三杯飲んで百二十二ペソ（千二百二十円）だから安い。メキシコのビールの味は日本のよりもよい。帰り際にそばのテーブルに座っていたメキシコ人夫妻の可愛い娘さんが話しかけてきて家族は非常に友好的な態度を示した。

サンタ・プリスカ教会での礼拝

二十二日はオプショナルツアーでメキシコ市南方の銀山の町タスコへ行った。赤い屋根に白壁のコロニアル様式の家が立ち並ぶエキゾティックな美しい町で、バスの走る道は、昔十七世紀初頭に日本の支倉常長が部下と共に馬で通った道路だという。

九時半頃、標高三千四百メートルのアフスコ峠のトレスマリアス村を通過。山間部にはトウモロコシ、ナタネ、小麦、カボチャ、豆などの広漠たる畑が展開する。日本人入植者が指導しているらしい。土俗的な市場が道ばたに見える。

十時頃、クエルナバカの町に入り、ここで中南米大陸最初の寺院、カテドラル・デ・クエルナバカに立ち寄る。十八世紀の壁画には長崎の二十六聖人の絵があるけれども、当時画家がフィリピン人の話を聞いて描いたという日本人は奇妙な服装をしている。

一時にタスコのホテル・ドゥビンの食堂でバイキング様式のメキシコ料理をとる。すごく美味だ。このベランダから町全体が見渡せる。眺望絶佳、いつまで見ても飽きのこない素晴らしい風景だ。

二時二十分に町の中央広場へ行き、昔の銀山王ホセ・デ・ラ・ボルダが寄進したサンタ・プリスカ教会へ入る。これは一七〇〇年代中期に建立されたメキシコ・バロック建築の最高傑作である。

スペイン人が中南米に残した大いなる遺産は教会建築だろう。こんな山奥の町にも壮大な教会をぶっ建てたのだ。彼らの高度な石造建築技術には驚嘆のほかない。

中へ入った私たちは〝メキシコ人ヤマダ氏〟に敬意を表して、ここで礼拝をすることにし、私が十字を切り、皆さん方にも道中の無事を祈願してもらった。観光に来た日本人が集団で礼拝をするとはこの教会始まって以来の珍事だろう。

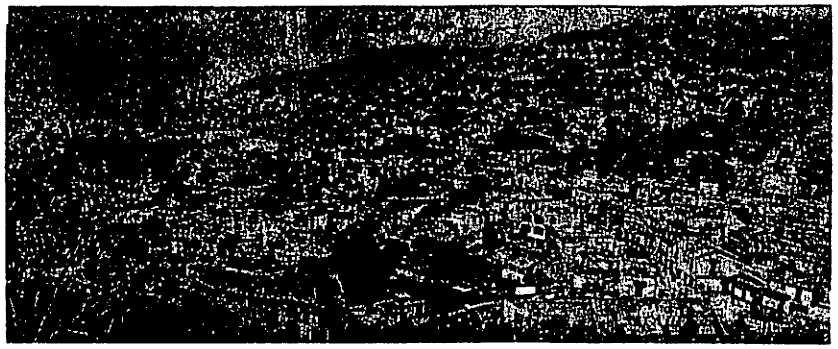
奥の院にはデ・ラ・ボルダをはじめとする歴代要人の素晴らしい肖像画が約二十点かけてある。外では雨が激しく降ってきたので、しばらくこの部屋で休憩後、雨がやんでから四時頃に銀製品の土産物店に立ち寄り、五時前にバスで出発してメキシコ市へ向かった。

ヤマダ氏の話によると、メキシコはオパールの名産地だが、メキシコ人はこれを〝神様の涙〟とみなして使用しない。これを使うと生活が苦しくなると考えている。オパールを買うのはアメリカ人、ドイツ人、日本人だけだという。

メキシコは貧富の差が激しく、この辺一帯のインディオはどうしようもない最下層民で、来る途中も山中の貧村でイグァナという大トカゲを持つ子供たちを見た。このトカゲはおとなしくて、子供たちの愛玩動物になっており、ときには焼いて肉を食べるらしい。子供が生まれても十人の内、平均六人は一歳未満で死ぬという。

彼らは自己の運命をすべて神様の思し召しと考えているので、悲運にあっても決して他人の悪口を言わないとヤマダ氏が説明する。生活は貧しくても精神は高貴ではないか。

また近来メキシコでは宇宙人やUFO関係の情報がかなり出まわっており、ある底なしの湖からロケット様の物が飛び出て空中に舞い上がり、また水面に飛び込むのを現地人が目撃するという事件が発生したが、これは宇宙人の仕業と考えられているという。私がこの方面の研究家であることを知ったヤマダ氏は後日資料を送ると約束された。



●美しいタスコの町

●イグァナを頭に乗せるインディオの女

不吉な夢が的中？

夜八時半にメキシコ市のホテルへ帰着したが、その夜私は不吉な夢を見た。

私たちの飛行機ではなく、日本の航空会社かまたは日本人が沢山乗った外国の航空会社の旅客機がエンジン故障で不時着地点を探して低空で飛んでいるうち、ついに失速し、尾部から墜落して大惨事が発生するというもので、多数の救急車が集まってくる光景は鮮明そのものであり、二十三日の早朝目覚めてからもゾッとするほどだった。

今日はパレンケ行きなので早朝三時四十五分に田中氏から電話で起こされて大あわてで仕度する。四時半に空港着。さほど寒くはないが用心のためにモモヒキと長そでのアンダーシャツを着る。六時二十五分にメヒカナ航空六二五便で出発。機内の冷房がききすぎて寒い。だが厚目の下着をつけたので私は安心していた。

このとき機内で田中氏に不吉な夢を見たことを話すと、「二〜三日してどこかの新聞に墜落事件の記事が出るのじゃないですか」と氏は冗談まじりに笑って曰う。清水正君も私の話を聞いていた。しかしメキシコの密林地帯の遺跡を歩き回る私たちには日本や世界の状況が全くわからない。その後、気になりながらもこの夢の記憶は薄れてしまった。

だが八月三十日の夕方七時半に成田空港の税関から出た私を出迎えに来られた石川敏雄氏（東京）から開口一番、「二十二日に台湾で飛行機が落ちて、全員死亡し、女流作家を含む日本人も十数人亡くなられました」と聞かされたとき、飛び上がらんばかりに驚いた。あの夢は正夢だったのだ！　同じ二十二日ではないか。同時刻とは言い難いが、何かの関連があったのだろう。到底偶然とは思えない。この頃は予感や予知夢をしばしば体験する。

宇宙的遺跡パレンケへ

さて一行はタバスコ州の州都ビリャエルモサの空港からバスでチアパス州のパレンケへ向かった。パレンケは〝アメリカ大陸の星〟と称されるほど古代マヤの古典期後期に絢爛たる文化の栄えた代表的な宗教センターで、この遺跡はマヤの全五万個所にのぼる遺跡中で最重要なものである。

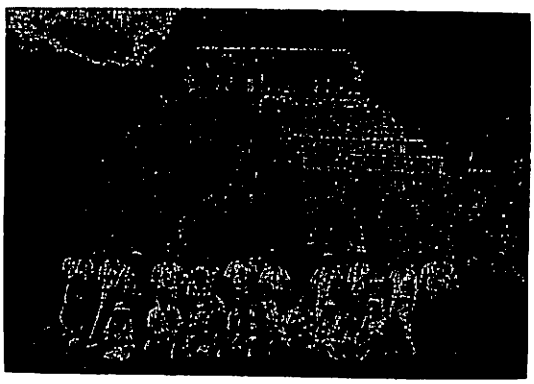
四年前にここへ来て感動した私はパレンケのとりこになり、私なりに研究しているうちに、どうやら遥い大昔、太平洋に沈下したムー大陸の栄光を伝える聖なる場所だったのではないかと考えるようになった。このあたりの詳細については拙著『七つの謎と奇跡』（主婦の友社刊）の第二章『古代マヤの謎』に書いているので省略しよう。とにかくピラミッドの玄室の石棺のフタの有名な浮彫についてデニケンが古代のロケットの操縦士だと発表して以来、パレンケは世界的に有名になったのである。

だがこれはロケットではなく、ムーから伝承した生命の象徴である樹木の下で一人の人物が創造主に対して祈りを捧げている図であるというのが私の見解で、ジェームズ・チャーチワードの大研究を調べているうちに、そのような印象が強くなってきたのである。

しかし真相はだれにもわからない。ヤマダ氏も指摘するように、古代マヤの遺跡に関する学者の説はすべて仮説なのであって、ユカタンのジャングルに眠るあらゆる遺跡の石ころ一個に至るまで謎と神秘に包まれているのだ。軽々しく断定はすまい。

タバスコ州とチアパス州が世界で最も雨量の多い所で、三十二度という気温はさほどではないが、湿度が高いためにひどくむし暑い。だが今回の旅行で撮影に全力をあげていた私は6×9判のホースマンで撮りまくった。パレンケでは元井武士君（東京）が私の重いカメラバッグをかついで助手の役を果たしてくれたので大助かりしたし、要所要所の全員記念写真撮影では安藤澄雄君（宮城県）が大型三脚を携行して助手として活動してくれた。

いったいに今度の旅行では私の手提げバッグだけで三個にもなり、全部を身につけると十キロを超えるのだが、皆さん方が手分けをして交替でかついで下さったために体を痛めないですんだ。親切さと機転をきかせることの重要さを痛感して私は心から感謝した。

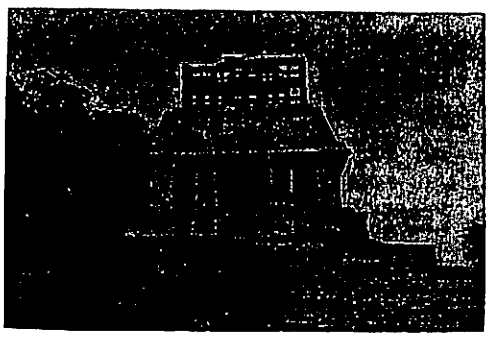


●パレンケの碑銘の神殿ピラミッドをバックに

碑銘の神殿ピラミッドの玄室に横たわる石棺のフタを四年前に見たときは大勢の人が押し寄せたために一人で三十秒間ぐらいしか見学できなかったけれども、今度は人が少ないのでゆっくりと見つめて撮影できた。

そのあとオトルム川という小さなせせらぎを渡って、太陽の神殿、葉の十字架の神殿、十字架の神殿等を見てまわる。

パレンケでは太陽の神殿が最も重要な建築物となっている。なぜなら、この神殿のあらゆる寸法を測定調査した結果、現代の建築設計者が舌を巻くほどの完璧な計算がなされていることが判明したからである。ヤマダ氏によると、古代マヤの建造物に使用された数大系には「9」という数が基礎になっているという。これはアダムスキーが伝えた宇宙数学と似ており、ここにも宇宙的な何かを感じさ



●太陽の神殿

せるものがある。

むかしアダムスキーは遺跡探険隊を編成してメキシコのユカタン半島で宇宙的な遺物の発掘を計画したことがある。私は家土地を売り飛ばしてでもこれに参加したかったのだが、どういうわけか計画は中止された。資金問題かメキシコ政府の許可の問題か詳細は不明だが、何か太古の異星人来訪と関連のある物がユカタン半島の地中に眠っていることは間違いあるまい。

パレンケには白人も沢山来ている。彼らは上半身ハダカである。白系アメリカ人は私たちを見て見ぬふりをしているけれども、私個人はフランス人の二つのグループと英語で親しく語り合った。いずれも若い男女で、日本人にはひどく友好的である。私が持つ二台のカメラ、ホースマンとニコンを彼らはいたく賞揚した。

●「スターになったみたい」と、はしゃぐフランス人女性とその仲間。碑銘の神殿ピラミッド頂上にて。

レンズを向けて撮影してやると、「スターになったみたい」と若い女性がはしゃいでいた。親近感と好意というものの重要さをまたも痛切に感じる。そして数年前エジプトへ行ったとき、早大発掘隊長の吉村氏が言われた言葉を思い出した。「エジプトの遺跡を見に来る外国人で最も知的なのがフランス人、次がドイツ人で、アメリカ人はダメ。日本人は写真を撮りに来るだけだ」。これは痛かった。

ロバートソン女史と会見

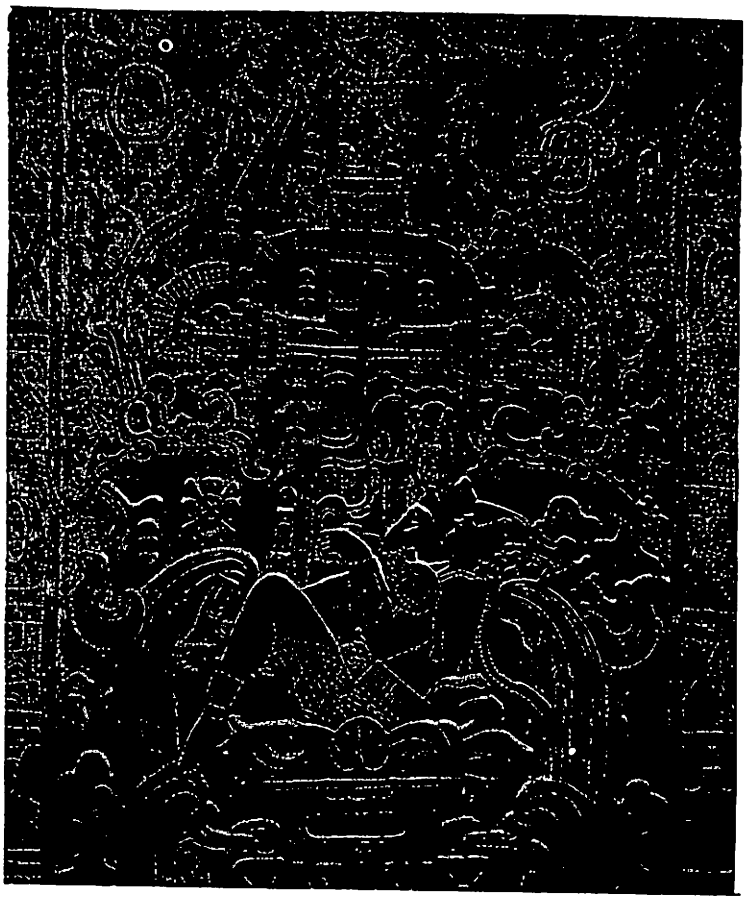
一時二十分にジャングル中の木小屋のレストランに入る。ここも四年前に来た店で、雰囲気は相変わらず素晴らしい。ビールで喉をうるおしていると、付近のジャングルの店からなんと日本の坊さんの読経の声と音木を叩く音が響いてくるではないか！

「まさかこんな場所で盆の法事をやっているのではあるまいね」と田中氏やヤマダ氏と冗談を言っているうち、ヤマダ氏がその店へ行って尋ねたところ、日本人が来たというので、日本僧侶の読経の声の録音テープがあったのを日本の流行歌と思い込んだ店主は、これを聴かせれば日本人が喜んで自分の店へやって来るだろうと考えてスピーカーで流したという。こうしたメキシコ人のユーモラスな底なしの明るさにたまらない魅力を感じるのだ。

四年前に来たとき、付近の石灰石板に彫刻をする工房で、碑銘の神殿ピラミッドの玄室の石棺のフタの名高い浮彫りの大判写真を買ったことがある。その後事情により失ったので、再度この写真を入手することに非常な期待をかけて購入するイメージを描いていた私は食事後同じ工房へ行って尋ねてみると、もう品切れになったと少年が答えた。すっかり落胆していると、「この付近にアメリカ人の研究家がいる。その人が持っているかもしれないから、そこへ行ってみよう」とヤマダ氏が言う。

バスで出かけてまもなくその家の前で停車し、しばらく大声で呼んでいたら、やがて上品な老婦人が出てきた。そこで例の浮彫りの写真の件をもち出して、一枚分けて頂きたいがと切り出すと、あと三枚しかないと言いながらも、実に気前よく譲ってくれた（左の写真がそれ）。驚喜しながら出された名刺を見てアッと驚いた。なんと有名な古代マヤの研究家マーリ・グリーン・ロバートソンその人ではないか！　そしてご本人が、まさかパレンケに住んでいようとは！

奥の広い書斎に案内されて二度驚いた。マヤ関係の専門書が三千冊、資料が五万点あり、大きなデスクには製図器があって今も古代マヤ美術に関する研究を行っているのだ。突然に訪れてぶしつけな依頼をした無名の日本人研究家に大切な資



料を無造作に与えて下さったものだから大感激した。金は要らぬというので、日本へ帰ってから何かお送りしましょうと約束して別れた。感動さめやらぬままにバスで四時二十分にビリャエルモサ空港へ着く。しかし六時二十分発の飛行機が大幅に遅れて騒がしい空港の待合室で長時間待機する。

パレンケから帰るバスの中でヤマダ氏が次のような興味深い話をしてくれた。

メキシコの日系人社会では日本人同士が互いに足を引っ張り合い、悪口を言ったりしてバラバラだが、中国系その他の外国人は結束して助け合っている。

ヤマダ氏はメキシコ在住の日本人を信用しない。彼らは同胞に対して意地悪で、ずるいからである。

日本人がメキシコ人から尊敬されるのは一世が誠実に働いて信用を得たからであるが、近来メキシコへ来る若い日本人でデタラメをする者がいて、この信用も少し落ちかかってきた。

メキシコ市の日本商社の社員たちはメキシコ人をバカにして彼らの社会に溶け込もうとせず、日本人同士で日本語で話し合うのでスペイン語がうまくならず、Yo tener… （強いて訳せば「ワタシ、持ツアル」というような具合になる）式の変なスペイン語をしゃべって笑われる。これはアメリカ人も同様である。等々。

さて、飛行機が二時間も遅れ、メキシコ空港へ着いてから出迎えのバスが二時間来ず、結局四時間遅れて、ホテルへ着いたのが夜の十一時半だったが、皆さんは全く一言も不平を言わない。これはGAP特有の信じられないほどの美点で、新聞広告で寄せ集めた他の旅行団なら予定を十五分遅れると添乗員に食ってかかったり険悪な状態になると田中氏が述懐する。全く感情のコントロールほど重要なものはない。

エメラルドグリーンの夢のカリブ海

翌二十四日はメキシコ市から飛行機でユカタン州の州都メリダ市へ飛び、ここからバスでマヤ古典期の壮麗な遺跡ウシュマルとカバーへ行き、亜熱帯の灼熱の太陽の下に各遺跡を見学後、四年ぶりにメリダ市内のホテル・カスティリャーノに宿泊。夜八時すぎからホテル横のプールサイドで八名の男女の民族舞踊を四名で観賞。衣装はかなり洋風化しているが踊りはマヤの伝統を少しは残しているようだ。

二十五日も快晴で、燃えるような熱気の中をバスでチチェンイツァへ向かう。この遺跡はマヤと野蛮なトルテカの混合文明を伝えるもので、純粋なマヤの宇宙的な思想はかなり低下し、残忍な首切りや、いけにえを池に投げ込むという悪業の低劣な空気がただよう場所であるが、どういうわけか前回同様ここへ来る観光客が多い。

チチェンイツァに行く途中、大平原の直線道路を時速百キロでぶっ飛ばしていると、十一時十分頃、左上方の白雲をバックに黒い円盤状UFOが出現、車内が騒然となった。これを最初に発見したのは私だが、それまで空を見続けて多数の鳥を観察してきた結果これは鳥ではないと判断して皆さんに知らせたのである。

これを車内からベテランの島田利勝氏（長崎県）が愛用のキャノンに八十五ミリレンズをつけて撮影した。しかしファインダーで確実に目撃しながらシャッターを切ったのに帰国後現像したら空と雲しか写っていなかった。先の潜水君の例といい不思議なことがあるものだ。

十二時前に遺跡に到着して型通りに順序よく見てまわる。暑い。敷地が広いので歩きまわるのが大変だ。

二時半に付近のホテル・マヤランドの食堂で昼食。魚料理が美味である。このとき吉田嘉美さん（札幌市）からグランドキャニオンで会ったという不思議な人物の話を聞く。

三時四十五分にホテルを出て再度バスに乗り、一路ユカタン半島北端のカリブ海岸保養地たるヤシの木と白亜の建物が並ぶカンクンを目指して飛ばし、六時にホテル・アリストスへ到着した。ここも四年前に宿泊したなつかしい場所だ。

しかしこの美しいカンクンも現在はメキシコ政府が開発に力を注いでおり、四年前にはアリストス以外にホテルはなかったのに、今は付近に続々とホテルが出来て少々俗化してきたようだ。近く南北サミットがここで開催されるというので会場も準備されている。

翌日の二十六日は自由行動なので朝十時に起床し、大洗濯をやり、十二時にプールサイドで全員記念写真を撮る。

カリブ海は濃いエメラルドグリーンの夢のような大絨毯そのものだ。広い砂浜はメリケン粉に似たキメのこまかい白砂で、これも四年前そのままである。しかし今見ると、浜に茶色の海草が打ち上げられて（あるいはわざとまいたのか）少々よごれた感じがする。

私はプールで久方ぶりに泳いだ。海にも入った。波は荒いが水は透明だ。水温も高い。プールでは思いきり泳いだ。

「豪快な泳ぎ方なのでびっくりしたわ」と近藤久美子さん（広島市）が驚いていた。

ヤマダ氏によると、カンクンは今やフランスのリビエラ海岸、アフリカのカナリア諸島のラスパルマスに次ぐ世界で三番目に高い費用のかかる保養地になったという。個人なら食事こみでホテル代一

●チチェンイツァのカスティーリョピラミッドをバックにヤマダ氏の説明を聞くGAP旅行団。

泊三万円位を要するが、私たちは団体として格安にあがるように田中氏が手配されたのである。

七時半からホテル内の食堂で合同夕食会を行い、九時終了後、安藤君（宮城県）の部屋で消水君、大橋さん（帯広市）と共にテキーラを飲みながら一時まで話す。

こうして翌二十七日にはメキシコ市へ飛び、空港で暫時少憩後、ヤマダ氏と別れて、再度飛行機に乗り、ロサンジェルス時間の夜八時二十分に同空港へ到着。同夜はまたヒルトンに投宿し、夜は遅くなったけれども十時よりホテル内の日本料理店「菊」で最後のさよならパーティーを行い、愉快にすごした。

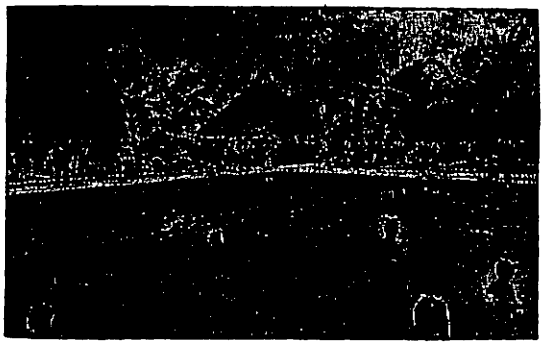
二十九日は午前中自由行動なので単独で市内を歩く予定だったが、昼食に誘われて大勢でパサデナのローリーズ・カリフォルニア・センターという庭園風の大レストランへ行く。ここは白人が黒人をしめ出すために作ったような場所らしく、日本人は大丈夫のようだが、同胞を見かけぬところをみると、日本人観光客にはよく知られていないらしい。

三時からバスで最後の行楽地たるディズニーランドへ行き、各施設を楽しんだ。圧巻は夜の光のパレードで、群集は熱狂し、私たちも歓声をあげて撮りまくった。

こうして二十九日にロサンジェルスをあとにしてシンガポール航空機で母国へ飛び立ったのである。

全く素晴らしい旅行だった。その間ほとんど支障なしに予定の行動を消化し、病人も出ず、トラブルもなく、全旅程を無事に終えることができた。これも添乗員・田中氏、現地のガイドさん方のご尽力と、参加者各位のご協力のたまものであり、衷心より感謝する次第である。特に私の重いバッグ類を運んで下さった方々にはあらためて心からお礼を述べたい。別掲予告のとおり来年夏も企画第四回の素晴らしい海外研修旅行を実施するので多数ご参加下されば幸いである。百聞は一見に如かずで、聞くと見るのとでは大違いであるから、短期間とはいえ海外を歩いて未知の事物を自分の眼で確認し納得することが国際的視野の拡張に必要であろうと思う。

（記事中の全写真は筆者撮影。集合写真はセルフタイマー使用）



●カンクン、アリストスホテルのプール、カリブ海が見える。

付記

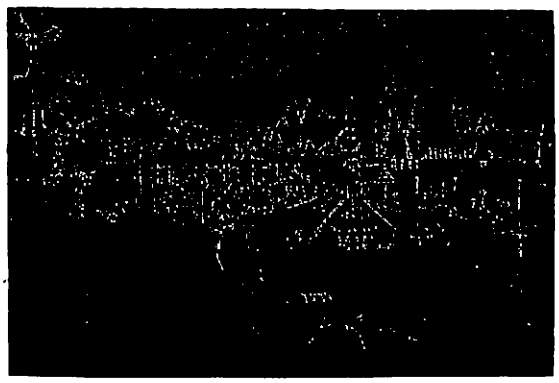
私自身はメキシコに住んだことはないしメキシコ学専門の研究者でもない。したがってこの紀行は短期間団体旅行のリポートにすぎない。現地には旅行者の知らない陰惨な内幕もあるのだろうが、実態を詳細に把握するには少なくとも十年は彼地に住む必要があるだろう。だがそんな余裕はないし、だいいちその必要もない。多数の良書がある程度伝えてくれるからだ。

メキシコ関係図書で推せんしたいのは写真家として名高い並川萬里氏の左記の著書である。

『メキシコ　時間のない国』　新潮社版　七八〇円

陽気な国メキシコの裏面をこれほど痛快に活写した本を他に知らない。この中の『メキシコ時間』という章がとびきり面白い。

メキシコ人の時間の観念が乏しいことは「アスタ・マニャーナ（明日まで）」という言葉で表現されて軽蔑されがちだが、時間に束縛されることを嫌う彼らのおおらかな生き方は、余裕のないギスギスした日本人の生活よりもある意味で宇宙的と言えるだろう。そのせいか都市の街路で車が渋滞して混み合ってもメキシコ人ドライバーは他の車にむかって怒鳴ることはしない。道があくのを辛抱強く待つだけである。衝突しそうになると相手を睨みつけたり罵倒し合う日本人は精神的に未熟な感じがする。東京に住むと特にそれを痛感するのである。



●ディズニーランドにて。

一方、アメリカ人の長所は率直でユーモアを解する点にあるだろう。タクシーの運転士さんなどもきさくで親切だし、ユーモラスな話をして客を笑わせたりする人が多い。これからみると東京のタクシー運転士はユーモアどころかマナーというものさえどこかへ置き忘れてきた人種みたいだ。料金を受け取ったとき「ありがとうございます」と謝辞を述べる運転士は十人の内二〜三人ぐらいで、あとは終始ブズッとして無言のままである。ユーモアとマナーの点で日本人はもっと成長するべきだろう。こうして短期間ながらも海外旅行は図り知れぬレッスンを与えてくれるのである。

回想のアメリカ・メキシコの旅 (1)

到着順に掲載

素晴らしかったアメリカとメキシコの旅

宮城県　安藤澄雄

「とても楽しかった！」――昨年の南米に引き続き、二度目の海外旅行を体験して来た感想は何と言ってもこれです。

昨年は「自分の旅の目的は何か？」などということばかり考えていたために、却って自分を閉ざしてしまいましたが、ニューズレター72号の「宇宙と人間の真相」の中の「あらゆる瞬間をただ楽しめばよい」というステックリング氏の言葉で大いに反省させられ、今年はとにかく「楽しむこと」を目的にして出かけました。

再び訪れたパロマーガーデンズ、初めて入ることができたア財団の室内、懐かしのデザートセンター、「スゴイ!!」としか形容できないグランドキャニオン、底抜けに明るいメキシコのメロディー、偉大な各地の遺跡、メルヘンの世界に飛び込んだようなタスコの美しい街並、柔らかな感触を与えてくれたカンクンの白い砂浜、そして、ディズニーランド――。私の幼さゆえに全てを楽しめたわけではないけれど、少なくとも昨年よりは心を開いて楽しむことができました。

興味深いのは、「何かを感じよう」などと変に力を入れない方が却って多くのことを感じ取れたということです。これはアダムスキー氏が「テレパシー」の中で「集中と関心は全く別物である」と言っている通りで、その意味でも私たちは日頃学んでいる宇宙哲学を実践するためにもここにいるのかもしれないと感じました。

とにかく書こうとすればいくらでも書けるほどに充実した、そして素晴らしい旅行でしたが、その陰には何か月も前から計画を練り続けておられた久保田先生と田中さん、非常な親しみを示して下さった現地ガイドの山本氏とヤマダ氏あるいは快適なドライブを提供して下さった名ドライバーの方々などのお力があったことを抜きにしては語れません。

特に私はバスの車内等でしばしば先生や田中さんのすぐ後ろに座るチャンスを与えられましたが、そこから拝見したお二人は、常に他のメンバーに気を配っておられ、時には調和と旅行の成功のために、近寄り難いほどに強烈なパワーを発しているようでした。

そんなお二人の献身的なお姿を拝見していたら、旅行中に読んだ『生命の科学』の一節、「私がするのではなく、父が私を通じてなし給うのだ」が、なんとなく理解できたような気がしました。

皆様、本当に有難うございました。

旅の醍醐味を満喫

鹿児島県　鶴田清則

メキシコの大地ヨ、ラカンドン族の娘ヨ、俺を待っていてくれ！

今回の旅行は、旅の醍醐味を味わうのに充分過ぎる内容であったと思う。正に百聞は一見に如かずである。

テオティワカンの大遺跡群を彷徨するインディオの吹き鳴らす哀愁を帯びた笛の音色に足を止める。百五十ペソで買い、吹いて見るがどうも良い音色が出ない。太陽のピラミッドとその周囲の広場で、屋外コンサートでも開催したら面白いものになるのではないか。なぜなら現代のコンサートホールに劣らない音響設計がしてあるからだ。

パレンケの遺跡見学後、昼食の為に立ち寄った食堂は、丸太とヤシの葉で作った30坪位の広さであった。簡単な作りである。日本の文化住宅とやらと比較してみる。3LDKやら、なんのと言うのがバカらしく思えた。ラカンドン族の娘さんの美しき事、肩まで垂れ下がった真っ黒な髪、鼻筋の通った顔、黒い瞳、どの白人の美女より美しい。

グランドキャニオンは正に絶景なり。地球の大地に出来た亀裂なり。ビッグな米国にあって似合うもの。日本にあれば不つり合いなり。

カンクンの海の青さ、真っ白なカモメも青に染まる。下痢気味のお腹を抱えながら真青な海に飛び込む。大和ナデシコの勇敢な事。メキシコの空港で一人の白人乗客がこんな事を言っていた。飛行機に乗っている時間は二時間なのに、もう三時間も待たされたと。あきらめ顔だった。

銀の町タスコにサンタ・プリスカ聖堂が建っている。この中の祭壇に向かい先生が十字をきり始めた。僕らにも祈れと言う。ここまでは良かったが、その後がいただけない。見学を終わり出ようとした所、突然スコールが降り始めた。坂の町タスコの石畳は川の様な流れになり、全員外に出られず、立往生。たぶん天上の神様も僕らの祈りに面喰らい、祈りの内容を取り違えたのであろうか？

まだまだ書きたりない。書き尽くせない初めての海外旅行であったが、キラリと光る何かを感じた。

もう一度行きたいタスコ

北海道　大橋博子

ビル街の中の噴水、懐かしいロスアンゼルス。パロマー天文台での思いがけない出来事。ドームが回った。アダムスキー財団での感動、胸が一杯になりシャッターがおせなかった。バスを降りると熱風、デザートセンターで先生の話された事に思いを馳せる。写真や話ではとても表現が難しい雄大なグランドキャニオン。

テオティワカンの太陽のピラミッドの上からの眺め。登頂してよかった。月のピラミッドも登頂したかった。タスコまでのバスの中から、昔私が住んでいたのじゃないだろうかと思える風景が続いた。また緑が多く北海道とよく似ていて一瞬

メキシコにいるのを忘れてしまう。石畳の街タスコ。もう一度行ってゆっくりまわりたい。何て素晴らしい感じの遺跡パレンケ。ずうっといたかった。暑かった。

チャクの神様の歓迎と別れの雨、ウシュマルとカバーの遺跡。ここもとても良かった。メリダまでの自然が造る雲の模様、メリダのホテルからの夜景と朝日の昇る瞬間、酔いしれてしまう。

威張っているチチェンイツアのククルカンのピラミッド。行くなとカミナリがなったいけにえの池。海水が暖かく砂浜がきれいなカンクン。おとぎの国ディズニーランド。

とてもとても素晴らしい旅行でした。そして旅行に参加されたみなさん、楽しい思い出を作って下さり有難うございました。

想いはいまもメキシコへ

東京　原　弘子

ふと眼を覚まして「大変だモーニングコールは聞こえなかったのかしら」なんて眼をこすってみると、なんと東京の自分の部屋だ。まだロスアンゼルスのホテルで眠っていたつもりだったのに、現実に引き戻されて、がっかり。帰国後しばらくの間はテレビも読物も受けつけない。何もかもが色あせたように私の前に立ちはだかる。

十六日間の素晴らしい旅の日はパノラマのように少しずつ遠ざかり、やがて一コマの映像のように、あるいは鮮やかに、あるいは薄ぼけて私の脳裏を去来する。

今回のアメリカ・メキシコの旅行に参加させて頂き、ほんとうによかったと思っています。

私にとっては再度のロスアンゼルス、メキシコの旅でしたが、私の念願の一つであった、メキシコに今回は充分に触れることができたことがまず一ばんの喜びでした。

勿論ロスアンゼルスは明るく清潔で、一昨年の時と何一つ変わっていないヒルトンホテルも私にとって懐かしく言い知れぬ愛着さえ感じさせられました。

ビスタの落ち着いた美しさは又格別で、師アダムスキーがこの町をこよなく愛した気持がわかるような気がします。

そしてお伽の国ディズニーランドは何度訪れても素晴らしい夢の国で、その上今回はあの光のパレードを見ることができました。言葉ではとても表現できない美しい別世界に引きずりこまれるようなひとときでした。

パロマーガーデンズ、ビスタのアダムスキー財団、デザートセンター、グランドキャニオン、とみんなさまざまな想い出が浮かび上がってまいりますが、紙数もないので省略させて頂きますが、やはり私の心を捕えた最大のものはメキシコそのものでした。こうしていても私の心はメキシコへの想いにじっとしていられない程の郷愁を感じさせられます。

銀の町タスコに向かうバスの車窓に延々と繰り広げられた、あののどかで美しい田園風景、なだらかな丘陵に放牧された牛や馬がのんびりとたわむれて、そこにはあまりにも美しい自然が横たわっていて、私と後席のKさんとは溜息まじりに、「ああこんな所に住みたいわね」とささやき合いました。

タスコの町は山腹にまるでセザンヌの風景画の如く、そして中世のスペインの町を偲ばせるように点在していて、昼食を取ったホテルのベランダから眺めたタスコの町の美しさは生涯忘れられないことでしょう。

更にユカタン半島のマヤの遺跡のかずかず。その名の如く優しく美しいメリダの町。コバルトブルーのカリブ海に沿ってキラキラと真夏の太陽に輝くカンクンの町。何もかもが素晴らしくて、とても筆舌にはつくせません。

ああメキシコ。いつかまた必ず訪ねよう、素晴らしい国！

さてこの度の旅行がこれ程までに素晴らしく感じられたのは、同行の皆さんが又素晴らしい方々ばかりで、その波動が一つとなって終始笑いの絶えない和やかな旅ができたからではないかと思われます。

私にとって今までの最高の旅でした。久保田先生とワールドセブンの田中様に厚くお礼申し上げます。

そしてこの旅の間中お世話になった御同行の皆様のおひとりおひとりに心から感謝致したいと思います。

大好きな国メキシコ

広島市　升田裕子

なんて楽しく有意義な旅だったことでしょう！　こんなにすばらしく精神が高揚し、充実した日々を持つことができたなんて今思うと夢じゃないかと思う程です。旅行中のあの雰囲気、自分自身の安住の場をやっと見つけたという喜びを通りこした安心感、これがまさしくGAPの人々の高次な波動が集まった結果の現象なんですね！

さてビスタは幸せなゆったりとした空気の町で、さすがあの方が住んでおられただけあるなあと思いました。私にとってショックだったというか重要な場所はデザートセンターでした。グランドキャニオンに行く時乗った民間のプロペラ機から見た砂漠をジーッとみつめてると、またデザートセンターでわきおこった感情がグワーッと来て、いつか久保田先生に聞いてみようと思ってます。

インディオとメスティーソのメキシコはほんとにすばらしい国です。カンクンで泳いで真茶色（黒でない！）になるまでは〝日本人〟でしたのに色が変わると「日本人か？」と「？」がついて、どこの人間に思ったのかいまだに疑問ですが、こういう状態ですからこの国にはすぐにとけこめます。スペイン語なんぞペラペラッとやればもうどこの国の人間なんて気にかけてもらえません。メキシコは非常に宇宙的、陽気、楽しく明るくて、もう大好きで大好きでたまらない国です。何度でも行ってついに住みついてしまいたい程心の底から本気で大好きになった国です。

あれだけ不思議な遺跡があるんですから宇宙がすぐそばだし、ブラザーズ・シスターズも沢山いらっしゃいます。ディ

ズニーも近いし、ビスタもパロマーガーデンズもね。広島にもう少しいて1／Fの音楽や他の惑星から転生して来たといわれる作曲家、演奏家をみつけて、人々に知らせ、後任がみつかったらメキシコへ帰ろう！

来年はエジプトのピラミッドです。もちろん行きます。いっしょに行きましょうね。ほんとにすばらしい旅行ができますから！

久保田先生、田中さん、サンフランシスコのみかずきさん、山本さん、ロス・支部長の山本さん、メキシコの紳士ヤマダさん、そしていっしょだった二十六人の皆様、ほんとにどうもありがとうございました。

素晴らしい体験

青森県　中根　豊

農繁期にもかかわらず、長期の休暇を認め、やさしく見送ってくれた家族。いろいろな面で援助・協力して下さった会員の方々。それら多くの方々の温かい愛に支えられ実現できた今回の旅行は、大変素晴らしい、意義のある旅行でした。

ア氏が愛したという樫の大木に囲まれた、パロマーガーデンズのレストラン跡。ア氏自ら建てた木小屋とそのコンクリートに書かれた円盤の絵。レストランの敷地跡に立ち、大自然の落ち着いた雰囲気に留し身を委ねていると、ア氏を含めた男女数人がテーブルを囲んでイスに座っている情景が浮かんできました。

高貴な波動が満ち溢れるビスタのアダムスキー財団。ウルリッチ女史とステックリング氏の澄んだ瞳と素晴らしい波動。ア氏の寝室、そして遺品やオーソン氏の肖像画を見ているうちに、言い知れぬ感動が込み上げてきて、膝がガクガクして立っているのがやっとでした。

宇宙的な転生の大ドラマが展開したデザートセンター。広大な砂漠の大地と澄み切った青い空。宇宙の法則を探求していた偉大なインディアンたちが水を得るために掘った井戸の跡。印象的だったその三角の木組。ここでア氏とオーソン氏が……とこの場所の重大な意味を思いながら、コンタクト地点の小石を拾っていた私。

これらの宇宙的な意義を持つ場所に実際に立ち、素晴らしい高次な波動に触れ、無数の印象を感じることができたのは大変貴重な体験でした。

その他にも、パロマーの青い空に浮かぶ白亜のドーム、雄大なグランドキャニオン、陽気で楽しいメキシコ音楽、幻想的なマヤの遺跡群、感動の「碑銘の神殿」徹夜までしてカメラに収めたカリブの朝日、カンクンのエメラルドグリーンに輝く海と白い砂浜、宇宙的施設ディズニーランドでの楽しいひととき等々、たくさんの思い出が浮かんできます。

また参加された素晴らしい会員の方々と接することにより、自分を見つめ直す機会が与えられたことは大きな収穫でした。会員の方々の持つ素晴らしい波動と、宇宙哲学に対する純粋さ、熱心さを感じる度に、自分の傲慢さを痛感しました。再出発しなければいけないと強く感じました。ある方が言うように、出会った人すべてが自分にとって教師であったように思います。今回の旅行は本当に素晴らしい体験（レッスン）でした。

最後になりましたが、旅行中いろいろとお世話頂きました久保田先生と田中さん、そして会員の皆様に心からお礼申し上げます。

ＵＦＯを目撃！

山形県　清水　正

昨年の南米旅行につづいて二度目の参加となりました。今年は気持ちも落ちつかないまま、おそくなって参加を申し込みました。しかし今回もなんと素晴らしい旅行だったでしょうか。人数も少なく初めの頃は寂しかったのですが、しだいに慣れてくると全体に一体感を感じ、自分がこの旅行にかけるもの、目的や誠実さ明るさなども考えることが多くなりました。

デザートセンターでは円盤が出ませんでしたが、忘れた頃には必ず出ると思ってましたので、いつも外を眺めていました。そして八月二十日ロスアンゼルスからメキシコへ向かう飛行機で松山の伊藤さんと双眼鏡を使って観察していました。ロスアンゼルスは軽飛行機が多く銀色に光るものはたくさん飛んでいます。しばらくして少しねむろうと思った時です。後ろの座席の久保田先生と田中さんが外を見てなにか言っています。私も見ると銀色のものが私たちの飛行機と水平に飛んでいます。双眼鏡でのぞいてもはっきりわかりません。てっきり飛行機と思いつつレンズを135ミリに交換してファインダーをのぞくと小さくはっきり見えましたから一枚撮ると、その瞬間消えてしまいました。驚いたのは日本に帰っての現像でした。その写真には影も形も写っていないのです。絶対に撮ったと思った写真に写ってないとなると、あれは本物の円盤でしょう。

今になって身にせまるものがわきおこってきました。スペースピープルはこちらの想念を手にとるように感じることができたのでしょう。昨年はティティカカ湖上でみんなが気づかないうちに写真に写っていましたが、今年は気づいてて消えてしまいました。このことからスペースピープルは純粋に宇宙問題に関心を示し、それに積極的にせまろうとすればどんな人でも注目してくるのではないかと思いました。

毎日が出会いの日でした。メキシコ人の親日ぶりは実際行ってみて強く感じました。遺跡を見て思ったのは、その建設に従事した人々でした。どんな気持ちで、どんな方法で、どんなきっかけで……。深い緑のジャングルに囲まれて何かを語りかけるくずれかけたピラミッド群、この旅の間じゅう実に感覚的であり素晴らしいフィーリングに包まれました。

夜おそくまでミーティングをしたり、楽しいひとときを作っていただいた共に旅行に参加された皆さんほんとにどうもありがとうございました。久保田先生、田中さんには大変お世話いただきました。これからも貴重な体験を生かして人生を

大きく生きていきたいと思います。

旅行を転機にゼロから出発

広島市　近藤久美子

三カ月前、夢又夢であったこの旅行に「行かなくては」と強い衝動に駆られ、それからは思いもよらぬ展開で参加させて頂くことが出来ました。

私は本来人前に出るのが苦手で団体旅行など以ての外でしたが、この旅行は久保田先生と田中さんを中心とした素晴らしい一体感があり、大家族旅行にでも出かけた様な和やかな楽しい旅でした。

なによりも皆さんと一緒に過ごせたことは私にとって素晴らしいレッスンとなりました。皆さん一人一人生活の中に宇宙哲学を浸透されており、実践していくことの重要さを身をもって教えて下さいました。日頃の生活の何十倍もの時を過ごして来た様な気がします。

残念なことにアメリカの方々は合同夕食会には出席なさいませんでしたが、ビスタのアダムスキー財団に於てステックリング氏とマーサさんの波動に触れることが出来ただけでも私にとっては大いなる喜びでありました。又、財団以外にもパロマーガーデンズと天文台のそこここにG・アダムスキー氏の高貴な波動が満ちており、いいようのない感動を覚えました。

青く澄んだ空のデザートセンターでは、悲しいかな「何かを感じなければ」という余計な心が欲を生み、石を拾ったり、井戸のある小高い丘に登ったり、視覚的なものにとらわれすぎて、あっという間に時が過ぎてしまいました。

メキシコでのハロッチョを聞きながらの夕食会。先生の叩かれたボンゴの音色が何とも言えず愉快な夜でした。

又、数々の壮大なる遺跡群。中には逃げだしたくなる所もありましたが、パレンケの遺跡は暖かく、大らかで、故郷にでも戻った様な居心地の良い所でした。

そしてメキシコの最終地カンクンへ。サラサラの白い砂にエメラルドグリーンの海青い空のコントラスト。グランドキャニオンもそうでしたが、宇宙の創り出す色は素晴らしいとしか言いようがありません。ここでも又、先生の爽快な力泳ぶりを拝見させて頂き、万年二十五歳のうなずける一こまでした。

そして旅行の幕切れに相応しいディズニーランド。夢の詰め込まれた別世界での一時。特に「イナースペース」では大きな人間の目が現れた時、自分が一つ一つの分子に戻った様な不思議な感動がありました。美しい光のパレードに続き、天高く舞った花火がこの旅行の成功と今後のGAP活動の発展を祝福しているかの様に感じました。

思い浮かべればきりのない各地の光景、そして人々との出逢い。心次第で全ての物から学ぶ事が出来るのですが、エゴを排除していこうとすると心が欲しんで苦しがります。もっと平静でいられたらもっと多くの事を学べたのにと思いますが、これを転機にゼロから出発したいと思います。

遅くなりましたが、この旅行を企画して下さいました久保田先生と田中さんを始めとして、全てのGAP会員の方々に支えられての素晴らしい旅行に参加させて頂き、心より感謝致します。生涯忘れ得ぬ旅行となりました。ありがとうございました。

素敵な旅と音楽

旭川市　吉田有希

アメリカ・メキシコ・カリブ海の旅行は、私にとり実りある研修旅行となりました。二十才の時に身体を害し、医師より過度の運動や仕事を禁止され今迄に至ったのですが、「宇宙哲学」等の実践がこのような結果を生みだしたのだと思うと嬉しくてなりません。出発二週間前迄家族の反対にあったのですが、あの「ミラクルワード」を利用したのです。健康で無事帰れる姿を映像化し、皆様に御迷惑をかけまいと、八月十三日に家を出て成田に向かいました。

北海道は八月初旬より全域が荒模様の天候で旭川ー札幌間の一部が不通となりましたが幸いなことに出発二、三日前には解除となり無事参加できたのです。そのようなことも重なり少し不安もありました。だが成田空港で会員の皆様の笑顔に出会ったときはあの不安は消え小学生のように心が浮き立ったのを記憶しております。それなのにロスアンゼルスの空港ではアメリカに着いたという実感がわかずとまどいました。そのせいでしょうか前半一週間の日々が長く感じたことを覚えております。今思いますとこれらの日々が私の「レッスン」の場となり、デザートセンターでは体力の挑戦、グランドキャニオンでは想念波動による疲労感の「チェック」があります。これらの体験を考えますと、後の日々は素晴らしい毎日で、自分自身では分からないエネルギーが身体を包みはじめておりました。その土台があったからでしょうか、会員の方々に驚かれるような生活体験もできました。今振りかえりますと良く体力が続いたなあと不思議な気がいたします。また、このような生活が出来たからこそ、他の国の人達と心の触れあう機会も持てたのです。

情熱の国メキシコは心豊かな人の多い国です。人間を生き生きさせる国とみました。その国で今回色々なことを学び知らされました。アメリカのビスタの町でもこのようなことがあったのです。夕食会の時、たまたま席をはずし、ある部屋の前にさしかかりますと、軽快な「チャチャチャ」のリズムが耳に入りました。興味を持ちドアに手をかけてのぞきますと高齢の御夫婦がカップルとなりダンスを楽しく踊っているのです。その人達の顔は生き生きとして輝き、素晴らしい波動に満ちておりました。高齢にもかかわらず、あの老人特有の暗さはありませんでした。席に戻ってからもあの波動を忘れられず、会員二名の方をさそいまたもやその場所に出向いたことが今は思い出深いものとなりました。そこには「愛」が、夫婦愛があったのです。またもや眼の前で学びました。

メキシコとビスタの時も音楽、リズム

が私を積極的にさせました。音楽は人の心を和やかにすることは知っていましたが、心と心をつなぐことを身をもって他国で体験したのです。本当に素晴らしい旅行でした。人生これから色々なことがあると思いますが今回の旅行が私の人生にとり大となることでしょう。

ミラクルワードとイメージ法で旅行が実現！

広島市　佐々木朋子

この度は素晴らしい旅行に参加させていただき本当にありがとうございました。

この旅行の企画を知った時、絶対に行かなくてはと思い立ち、困難に思える状況ではありましたが、内部からの衝動なのだから間違いはないという確信をもってミラクルワードやイメージ法を続けたところ、不思議に参加できるようになりました。本当に参加してよかったというのが今の実感です。

こうしてまたいつもの生活にもどってからも、同時に二つの場所（今いる所と旅行中に訪れた所）にいるような気がする事があります。そんな時は、旅はまだ続いているのだと、とても幸福な気持ちになれるのです。現に旅行中、飛行機の窓から外を眺めている時心に湧いた、―この旅は、永遠に続く旅なのだ、―という感じは、帰って来てからも続いています。

最初訪問したパロマーガーデンズやビスタは本当に素晴らしい場所でいつまでもとどまりたい気持ちでいっぱいでした。特に、財団でマーサさんにお会いした時、急に熱いものがこみあげてきて、英語力のなさも返り見ず握手を求め、お話を聞くことができたことは最高の喜びでした。

デザートセンターへむかう途中、バスの窓から見た景色の言い様のない懐かしさ。丘のむこうから黒い馬が駆けて来るイメージ。それらが強烈に湧いてきて涙があふれてきました。

その他、意義深いデザートセンター、雄大なグランドキャニオン、そして、この上もなく楽しいディズニーランド等々、本当に感動の連続のアメリカでした。

メキシコは、最初雑然としただらしのない感じがして、アメリカに引き返したいような気持ちになったのですが、徐々におおらかで明るい本当のメキシコの良さが見えてきました。遺跡の素晴らしさは言うにはおよばず、それを取り巻く自然や、出会った人たちも強い印象として残っており、もう一度ゆっくり訪ねてみたい国でした。

16日間の旅行を終えて成田に着いた時、自分の頭の中に特別濃い濃縮されたものがつまっている様な気がしてなりませんでした。これから普段の生活の中でこれをどううまく咀嚼していくかが課題だと思います。

この旅行を企画され、よりよい旅にと心を配られた久保田先生並びに田中様、そして思いやりにあふれた参加者の皆様、その他旅をより楽しくしてくださったガイドの山本さんやヤマダさん、出会えた方々すべてに感謝致します。

ディズニーランドに感動

愛知県　佐分兼治

今回の旅行に参加させて頂きまして、誠に有難うございました。

過去二回の旅行と同じようなイメージかと思っていましたら、少人数で、半分近くが女性という事で、雰囲気が円らかで柔かな感じがしましたのには驚きました。

今回の旅行の一番の目的として期待していたアダムスキー財団、パロマーガーデンズ、デザートセンターは残念ながら、鈍感な私にはこれといって感動するところがなかったようです。

むしろ、最後のディズニーランドで強く感動させられた事を忘れられません。全ての遊戯施設が万人平等に楽しめられるように設計されているのには驚き、又ここでは、全ての人々が笑いと喜びに満ち、温かくて生々としたフィーリングを感じ、いつまでもここで遊んでいたいという気持ちにかられた事を忘れません。これを創ったウォルト・ディズニーを思うと、なぜかア氏と同様、胸が熱くなったのです。

最後に、旅行中私なりに色々と勉強反省と教えられたところが多かったようで、人との共鳴、自然との共鳴、三して意識との共鳴、自己中心的な考え方から他を生かす思いやりへの転換、それからア氏の哲学が実践なき学習であったことなどが強く心の中に残り、今後の大きな課題となっています。

この様な旅行を企画して下さいました久保田先生、田中さんに心よりお礼を申し上げます。

感動の涙はとめどなく

秋田県　佐々木三羊子

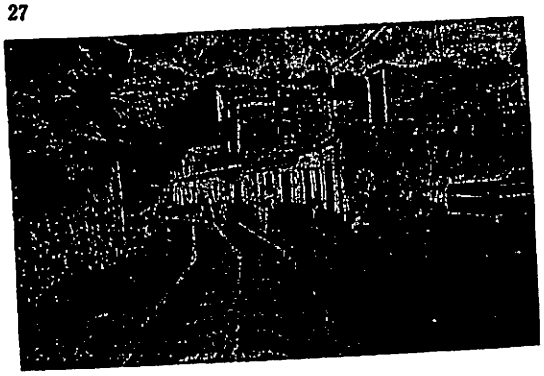
素晴らしい旅行に参加させていただきました事に深く感謝いたします。

会員の方々といっしょにおりますと、まったく不思議なくらい違和感が感じられず、旅行三日目くらいの時で、もう皆様と一カ月以上もいっしょに旅をしているような気がしました。これからもずっと永遠に旅をし、そしてこうしている事がまったく自然のように思えてならなかったのです。旅行前、友人の方が「大母船に乗っているか飛行機かの違いくらいでしょう！」とおっしゃられた言葉のとおりだったと思います。

私が特に印象深かったのはビスタのアダムスキー財団でした。財団の建物を見ていると感動で涙が出てきそうになり、堪えて中へ入りました。

家のまわりの木々、色合い、家の様子、絶えず聞こえる心地よい水の音、見るものすべて違和感が感じられず、むしろなつかしい気さえしてくるのです。そして周囲からのすばらしい波動の中で自然に涙が溢れて止まりませんでした。その状態は質疑応答が終わるまで続きました。その間とてもマインドが静まっていたように思います。ニカカイ（犬の名）に会えたのもうれしい事でした。

パロマーガーデンズでは日曜日のためか人がたくさんいました。小屋とまわりの木々が印象的で、時間が許すならいつまでも木々の間を散歩していたい思いで



●スペインの田舎町そっくりのタスコの町を行くGAP旅行団。石だたみの街路は16世紀建設当時のまま。

●堀立小屋に住むインディオの子供たち。右から2人目の混血の美少女は名前をチカといい、10ペソ銀貨をねだった。

す。きっとアダムスキー氏もそうされていたのでしょう。忙しい間を縫っては自然のすばらしい中に浸っていたのかもしれません。木々がその事を語ってくれているようです。そして、ときどき美しい空に円盤が姿を現し、アダムスキー氏を激励していたのでしょう。あの広々とした山々、その間を円盤が敏速に降り行きかう、その様子を何度も想像してみました。

デザートセンターでは井戸のある山より見下ろして、コンタクト地点に続いている山々がとても印象的だったことを覚えています。デザートセンターへ行く途中の風景は実に広大なアメリカを見る思いでした。私たちの旅行は一般の方の旅行で全然行かない所を訪問しますので、いろいろな顔のアメリカを見る事が出来たと思っています。

遺跡ではそれぞれの所が印象に残っていますが、中でもケツァルコアトルの神殿で正面の壁面にケツァルコアトルと雨の神トラロックの顔が交互に刻まれていて、その間に貝殻がはめこまれていたのに心を引かれました。そしてなぜかテオティワカンの中でこの遺跡だけが違うもののような気がしました。

カリブ海のカンクンでは朝五時半に起きて食事以外は海かプールで泳ぎまくり、期待どおりの楽しい一日を過ごす事が出来ました。以前より南の島に強いあこがれを持っており、まぶしい太陽と青い海、そしてヤシの木のある所にいると、もう楽しくてしようがない私でしたので、大変満足のゆく一日でした。

旅行中はいろいろな方々にアドバイスをいただいたり、親切な心づかいを教えていただいたり、得るものが多くありました。それは今後の私の大きな心のささえとなり励ましとなって、これからも皆様に負けないよう私もがんばらなくては！と大きな希望がわき起こってまいります。この旅行に参加できてほんとうに良かったです。旅行を企画してくださいました久保田会長、田中さん、現地ガイドの山本さん、ヤマダさん、同室の工藤さん、そして皆様に心よりお礼申し上げます。

アメリカ・メキシコの旅を終えて

前橋市　山城尚雄

昨年の南米旅行に引き続いて今回もアメリカ・メキシコ旅行に参加できましたことは私にとって何よりも幸運な事でした。

何しろ昨年の旅行と比較し、日程的にも、また、海外旅行に対する私自身の心構えにも「ゆとり」を持つことが出来たことから、今回は正式の旅行日程もさることながら、それ以外の、会員の方々や現地の人々との交流を大切にしようと考えていました。

旅行の始めのころ、アメリカの大学に数年来留学されているGAP会員の方とその友人を囲んでの日米の生活習慣や文化の違いについて語り合ったビスタでの夜。メキシコシティーのレストランでは、ちょうど仲間の誕生日を祝ってそこに居合わせた現地の男たちとのカタコトの英語と身振り手振りを交えた会話、そしてカタカナで彼らの名前を書いてみせた時の彼らの大仰な笑顔。また、旅の終わる頃には、カンクンで二夜連続の深夜に及ぶディスコダンス（特に二日目の夜は、会員男女十名近くが参加し、ユカタンの夏の夜に突如出現した盆踊りか、はたまた阿波踊りといった風情でしたが）。さらに、メキシコシティーからロサンジェルスへ向かう機内で覚えたての日本語を披露してくれたメキシコ航空の愛嬌たっぷりのスチューワーデス、等々。

数え上げれば際がない程の見知らぬ人々との出会いや交流に恵まれ、旅とは単なる物見遊山だけではないことを実感し、また大いなる人生経験となり得たようです。

さらに本来の遺跡見学では、テオティワカン、パレンケ、ウシュマル等の石の大建造物を見るにつけ、その各所に残る十字や七頭の蛇等の紋様が、かつて読んだことのあるジェームズ・チャーチワードの本の中にみたムー大陸の高度な宇宙哲学を示すシンボルマークを彷彿とさせ、何万年か前に確かに存在した地球文明発祥の地の栄光と栄華をかすかに感じ取れもしました。またここでも、ガイドとして深い見識と誠実さを示して下さった日系二世のヤマダ氏との出合いもあります。

とにかく、今回の旅行で見聞きし体験したことは、これからかなりの月日をかけて自分の中で咀嚼しなければ消化しきれないのではないかと感じています。それほどに有益な十六日間でした。

最後に、ワールドセブントラベル社の田中氏、そして久保田先生に心より感謝致します。

（以下次号）

連載第3回

さらば空飛ぶ円盤

ジョージ・アダムスキー　久保田八郎訳

（第3章の続き）

惑星の引力はその自転速度の遠心力と静電場の求心力のあいだの自然のバランスなのである。遠心力は惑星の表面から物体を飛び出させようとするけれども、静電気の引力は物体が空間に飛び出るのを防いでいるのだ。

もし静電気の引力が存在しなかったら、我々は遠心力によって空間に投げ出されないようにするために、木か岩にしっかりとしがみついていなければならないだろう。逆に、もし静電気の力とその求心力のバランスをとるための遠心力が存在しなかったならば、我々は地面にへたばることになるだろう。

私は故アルバート・アインシュタイン博士がその〝統一場理論〟でこのバランスのとれた不可分の関係について述べていると思う。しかし私の考えはこの偉大な理論物理学者が達成したほどの深遠なものではない。

地球人は航空機やロケットなどで引力に対してささやかな対抗を試みてきた。しかし今や我々はその引力を人類に利用することによって得られる便宜さを考えるべきときに直面している。

ロケットは引力よりも大きな圧縮された化学物質の推力によって前進する。地球人が現在計画している〝イオンロケット〟は、そのエンジンからイオンを放出して、化学物質ロケットと全く同じように推力を得る。しかしイオンロケットは惑星の統一場内で有効的に作用することはできない。それは大気圏外の疑似真空圏内で有効に働くだけである。

空飛ぶ円盤すなわち〝重力に従った〟宇宙船は、それ自体の重力場を発生させて作動する。この重力場は大体に球体をなして船体を取り巻いている。この重力場は惑星の磁場と調和して共振するように、すなわち混ざるように調節されている。すると、この共振重力場が船体を無重量にしてしまうのである。この無重量つまりバランスのとれた状態にあると、船体はどこにいてもわずかな推力で動かすことができるのだ。

地球のイオンロケットはイオン化された分子の電気的な推力を働かせるように作られている。この推力たるや〝蝶のため息〟といわれるほどのわずかなものである。しかし大気圏外においては、このイオンロケットも無重量になるだろう。なぜならそれは惑星の引力とは無関係になるからだ。現在の説によると、イオンの力のこの小さな〝ため息〟でさえも、ついには時速四百八十万キロに達するほどのスピードでロケットを推進させることができるということになっている。

ファンドグラーフ起電機がカギ

ところが自家発生の〝重力に従った〟場の中にあると、円盤は光速を超えるほどの速度で進行できるのだ！　自然界の力（複数）を利用するので、その運動は自然の力（複数）の運動と同じになるのだ。

宇宙船（円盤や母船）内の発生器によって生み出される推進力は、地球の物理研究所などで用いられるファンドグラーフ静電気発生機で発生する力にたとえることができる。

空間に停止している円盤と同じような現象をあらわす興味ある実験は、大きな電磁石の直立した鉄心のまわりにアルミニウムの輪を置くことによって示される。加減抵抗器によってコントロールされたその電磁石の中に交流を流させることによって、アルミニウム輪を空間に停止させることができるのだ。しかし円盤はアルミニウム輪の場合のように磁気の渦動によって〝浮き上がる〟かわりに、それ自体の共振場を生み出すのである。

静電気の推力は、小さなアルミニウム片をファンドグラーフ起電機の放電球の近くへ持って行けば証明される。この金属片は力学的な関係なしにその放電球のまわりを回り始めるのだ！

円盤が急に消滅する理由

円盤はしばしば〝光る物体〟といわれている。この状態は、円盤が進行する空間中の微粒子が船体を取り巻いている共振周波数の場と接触するときに生じるのである。この場の中の呼吸が、舗道から発散する熱波のようににぶく光る現象を生じさせ、そのために船体を〝生きて呼吸している〟ように見せるのである。

この力は船体のまわりの光波を完全に屈折させることもできるので、船体が急に視界から消えるように見えることがあるけれども、実際には依然としてそこに存在しているのだ。ある人々が他人を信じさせようとして言っているように〝非物質化〟するのではない。

この突然の消滅については別な説明の仕方がある。船体の磁場の強さが変えられるにつれて、イオン化もスペクトルの各色どりに変わってゆく。エネルギーを高めると磁場は強化されて、スペクトルの可視部分を通りすぎるので、そのために船体は目に見えなくなる。これは厚い雲の層が飛行機を見えなくするのと同様である。

強烈な共振磁場は宇宙塵を船体からそらさせるための防壁として役立っている。と同時に、この磁場と大気または空間のあいだに混合状態が自動的に作られて、いかなる種類の摩擦も防ぐのである。

船体の作動時におけるこの〝重力に従った〟性質のために、宇宙船の乗員はどんなに烈しい飛行や不快な大気状態の影響をも受けることはない。

（訳注＝船体の持つ人工的な重力場が内部の人間の人体細胞すべてを船体の飛行方向と同じ方向に〝引っ張る〟ので、光速で飛ぶ円盤が九十度の急激なターンを

しても人間には全く影響はないという意味）

光よりも速いスピードで進行するので、船体の磁場は高度な共振点に変えられ、船体は最高速度にまで達する。このために船体には人力の操作の予備として作られた自動のロボット検波器と制御装置が取り付けてある。

円盤は惑星と同じ原理で作られている

一般で信じられている説に反して、このような条件のもとでは物質が純粋なエネルギーに変えられることはない。船体自体が発しているフォースフィールド、（電磁場）の中にある船体は、それ自体が持つ大気圏の中に存在して宇宙の構成単位として運動している惑星にたとえることができる。したがって宇宙船（円盤や母船）が加速して消えるように見えるのは、ただ最高速度に達したのであり、そのフォースフィールドは可視光より速いスピードで振動しているのである。高周波になると、レーダー信号にとっても透明になることがある。

多くの円盤写真で見られる〝穴〟現象は〝磁気の窓〟によって生じるのである。宇宙船の磁場の一小部分は中性化されているので、眼視やレーダーなどの観測を可能にする。ときどき船体のフォースフィールドがかなり高い共振状態になる場合、この〝穴〟が必要になってくる。

大抵の円盤に見られる三個の球型着陸装置は、引っ込み式着陸装置と〝三点静電推進制御装置〟の両方を兼用する。母船になると同じ制御目的のために骨組の中に組み込まれた一連の〝帯〟（複数）を利用する。地球のロケットを操縦するときに逆進ロケットを用いるように、円盤も電荷を調節することによってその可変三点装置を用いるのである。

惑星の電離層内で水平飛行をする場合は、円盤はその惑星の地磁気の力線に沿って進行する。急速にターンするには球の電荷を変えるのである。このようにして宇宙船は宇宙空間のいたる所にある渦流に導かれたりそれを利用したりする。

宇宙船の運動の際における方向転換として急速な九十度ターンや、またはしばしば円盤の活動だとされている突拍子もない運動などが目撃されることがある。

宇宙船は潜水艦に似ている

地球の宇宙船関係技術者が考えねばならない一つの重要な要素は、推進装置の大部分を収容する室としてばかりでなく安全目的のためにも必要な多重壁の構造である。最少限二枚の電荷を帯びた壁面がなければならない。外側の陰電荷を帯びた壁は船体の周囲に作り出された保護用フォースフィールドと直接に接触する。その性質そのものによってこの静電気のフォースフィールドは船体の表面近くのあらゆる物質の微粒子をイオン化させ、そのフィールドの勢力範囲内に来る宇宙塵に陰電荷を帯びさせる。用いられるパワーの量が大になればなるほど、このフィールドの勢力は遠くへ広がるのである。

これに対応する陽電荷のフィールドが内側の壁に帯びさせてあって、船内の中央の部分を中性化させている。

更に重要なのは船体の壁間に装備された自動濾化とエアーコンディショニング装置で、これにより船内の空気を静浄化し、あらゆる乗船者のために温度や気圧を快適な状態に保つのである。

実際には現代の宇宙船と地球の潜水艦とのあいだにさほどの相違はない。潜水艦は外部の圧力の低い水面上を走ったり船体に対する圧力が高い深海へもぐったりするけれども、どんな深度でも潜水艦は意のままに動きまわることが可能であって、乗員を傷つけたり不快にさせることはない。宇宙船にもそれと同じ事があてはまるのである。大気圏外では船体に対する圧力は低いけれども、惑星の電離層内に突入して惑星に近づくと圧力は激烈となる。しかし宇宙船がどこにいようと、乗員を傷つけたり不快にさせることはなく意のままに動きまわることができるのである。

地球の潜水艦の航海士が海面下を流れている多くの海流をよく知っていなければならないのと同様に、宇宙船の航海士も惑星とその電離層のあいだの磁気の流ればかりでなく、宇宙空間の磁気の流れも知っている必要がある。宇宙にあまねく存在する温度や磁気の流れは絶えず反復の形で変化する。我々が安全に宇宙旅行を行い、他の惑星群の隣人たちとの惑星間の関係を楽しもうとするのなら、旅の方向をきめるのにこの宇宙の通り道を利用する必要がある。そしてその通り道で発生しているエネルギーを推進力に変えねばならない。

●第4章 最近の科学の発達

（ただし一九六一年までを意味する。編者）

宇宙の征服においてアメリカとソ連は確かにトップをきっており、多くの〝首位争い〟がこの両国によってなされている。アメリカはソ連よりも約十倍も多くの人工衛星を軌道に乗せている。アメリカは最初に気象観測衛星を成功させたがソ連は最初に宇宙探査機を成功させた。アメリカは重いペイロードを利用しないで好結果が得られる小型トランジスター回路を持っているので、アメリカの探査機は洗練されているとみられている。我々の消息筋によると、ソ連は高推力のロケットでは先行しているけれども、科学機器においては遅れをとっているという。

一九六〇年三月六日付ロサンゼルス・タイムズ紙は、ソ連の元ミサイル専門家からソ連が巨大な核ロケットの実験に二度も成功したという意味の情報を得たと報道した。この報告はドイツのハンブルクから出たものである。二名の米国情報官にこの話を洩らした後、その専門家はそれ以来姿を消してしまった。しかし確証はないようである。もしソ連が首尾よく核ロケットの実験をやっていたのならば、彼らはアメリカの宇宙開発計画に五年から八年も先行していることになる。

ソ連は一九五九年一月二日に最初の月ロケットを発射した。月を狙ったと米科学者が信じているこの探査機はどうやら目的がはずれて、うまい具合に太陽を回る軌道に乗ってしまった。これは事故だったのか？　ある証拠が示すところによると、この探査機は全然月に打ち込む目的で発射されたものではないという。写真を撮る能力があったとされているあの名高い月写真より少なくとも八カ月前に、その探査機は月の裏側を撮影するために用いられたと考えられるのだ。

ソ連は月の裏側の真相を知っていた

ところで一九五九年十月四日にさかのぼって、私はオランダでイギリスのBBC放送を聴いたが、それはソ連が月の裏側に植物を発見していたと報道した。引き合いに出されたソ連の天文学者の説明によれば、月はこれまでに憶測されていたような火山灰でできているのではなく、地球と同様に分解した花崗岩で形成されているという。ソ連がルーニク一号で写真を撮影しなかったとすれば、彼らは一体どのようにして月の裏側の植物を知ることができたのだろう？　彼らがルーニク一号で写真を撮ったとすれば、彼らはそれをアメリカへ公表する前にその写真を修正したと考えるほうが妥当である。彼らは発見した事物について確かに我々に知られたくはなかったのだ。彼らは月への一番乗りをしたがっていて、たぶんそれをソ連の領土と宣言しようとするだろう。ルーニク三号で撮影された写真はたぶんまだ秘密にされているだろう。

国家的に有名な宇宙写真の専門家で科学評論家のロイド・マランは、ソ連の月面写真はインチキであると非難した。彼は写真の表面に修正の跡を発見し、ある部分はまるで木炭画のように見えると述べている。（原注＝アストロノーティックス誌一九六〇年六月号の記事で、サンタモニカのランド社の科学者マートン・E・デイヴィーズによる『ソ連の月写真、真実性が証された』より）

ソ連はその写真を公表する前に修正をしたのかもしれない。彼らはその写真を完全に作り直したのではないかと私は思う。なぜならアメリカも写真を撮る計画を持っており、ありのままにそれを公表する可能性のあることをソ連は知っていたにちがいないからだ。修正を加えた理由は、植物、樹木、月の裏側に基地を持っている異星人の建築物などを隠すためかもしれない。アメリカ政府が、知っている物事のすべてを語らないのと同じく、ソ連政府も発見した物事のすべてを語りはしないのだ。

南カリフォルニアのある地図作成技術者が、ソ連の月写真が一九五九年十月六日の後に公表されたとき、その写真についてきわめてありふれた事を発見した。それによると、一九五九年一月に印刷されたハンガリーの切手の図案からみて、ソ連は一九五九年十月四日よりも以前に月の裏側を撮影したことは全く明らかであるという。もしその写真が八カ月も早く実際に撮影されたとすれば、一九五九年十月四日のルーニク三号の飛行で何が達成されたのだろうか？

ソ連が未公開のもっとすぐれた写真を持っていることは全くあり得ることである。ルーニク三号は月から四千三百五十マイル以内を通過した。そしてロケットが四万二千マイルほど離れるまでは写真が撮られなかったと我々は聞いている。なぜロケットが月に接近したときに写真が撮られなかったのか？　これは私が前述したとおりであると信じている。

ルーニク三号のペイロードは計六百十四ポンドであった。そのソ連製ロケットの第三段の中には三百四十四ポンドの装置類と燃料があった。ここで大きな疑問が起こってくる。第三段の三百四十四ポンドの装置に一体何が起こったのかという問題だ。

イギリスのジョドレルバンク電波望遠鏡は四日間ソ連の信号を追跡した。はじめの二日間の送信はすべて正常で、一八三・六および三九九・八六メガサイクルの周波数であった。三日目にロケットが月の裏側から四千三百五十マイルのところにいたとき、あらゆる種類の奇妙な事が起こり始めた。

エレクトロニクス誌の一九五九年十月二十三日号によれば次のとおりである。

「送信は三九・九八六メガサイクルで受信されたのではなかった。予定より二分間早く一八三・六メガサイクルの強い信号が受信されたが、これは以前にソ連が用いたことのない連続音によって特徴づけられていた。つまりその搬送波で十五秒の信号と十五秒の間隔とから成っていたのである。二十分後に、送信は二種類の類似した断続周波数でもって不規則な連続音に変わったが、これは約三十六分間続いた。そのあと一定の信号に回復して約四十分続いたが、やがて送信は終わった。後に二つのシャックリ音が聞こえた」

四日目にジョドレルバンクは正常な一八三・六メガサイクルの送信をキャッチしたが、最初の周波数による送信が始まってから約一時間後に二分間だけ三九・九八六メガサイクルを受信した。

科学者が出した結論は次のとおりである。すなわちソ連はおそらく月面上に何かの装置を着陸させたのだろうというのである。これは今でも情報を地球へ送り返しているかもしれない。月から地球へ返って来る奇妙な信号についてある報告がすでに私のもとへ届いている。おそらくソ連の装置から来るものであろう。

ソ連が少しばかり前に月へ人間を着陸させたということがあり得るだろうか。ソ連のロケット専門家ゲオルゲ・ポクロフスキーが一九六〇年二月に発表した声明によると、「惑星に着陸したり離陸したりするときの惨事の可能性は、飛行機のテストパイロットの場合と同じぐらいである」という。

ポクロフスキー教授は次のように結んでいる。

「非常な遠距離、たとえば月においでさえも、機械装置の正確な機能を果たすのに原理上なんらの障害はない」

我々は月の大気の存在を確証しているのだが、そうなると現在地球人が月に住んでいるのだろうか？

最近フランスのニースで開かれた第一回国際宇宙科学シンポジウムで、二人の米科学者が月には大気があると報告した。月には中性化した水素と微量のアルゴンから成る冷たい大気があるというのが彼らの説である。しかし記憶しなければならないのは、月のこちら側はいちじるしいふくらみを持っているという事実である。このことはその高さが裏側よりも高いであろうことを意味する。その結果、こちら側は裏側よりも植物が少なくて空気も希薄であろう。この地球を調べてみると、大砂漠のほとんどはこの惑星の片側にあることがわかる。そのように月も同じ型に従っているのだ。

つかまらなかった謎の潜水艦

一九六〇年の始めに、アルゼンチンできわめて異常な事件が発生した。三週間ものあいだアルゼンチン海軍とアメリカの〝専門家たち〟は爆雷投下作業を行って、二隻の謎の潜水艦の降伏を要求したのである。この潜水艦らしきものは、狭い入口によって海から分離された狭いヌエボ湾の海底にひそんでいた。二隻ともアルゼンチン海軍によって湾をくまなく追跡されたが、ワナにかけられるたびにそれらは不思議にもなんとかして逃げるのだった。それらは続けて数日間も潜航することができた。そしてついにアルゼンチン海軍長官ガストン・クレメンテは「ヌエボ湾のパトロールは中止されるだろう」と記者団に語ったのである。

この事件はきわめて狭い湾の中で発生したので、熟練したスキンダイバーなら数個の時限爆弾を巧みに仕掛けてその潜水艦をやっつけることができたであろう。しかしアルゼンチン海軍の総力をあげて、しかもアメリカの最新の設備と助言を得てさえも、その仕事をすることは不可能であった。

私は自分なりの考えを持っていたが、異星人たちから説明を聞くまでは、出された質問に答えることはできなかった。その事件がすっかりおさまって人々の心から忘れ去られて数週間たってから解答が私にもたらされたのである。

解答によるとその潜水艦は宇宙船であった。それらはこの惑星上の状態を知るために海底を調査していたのである。陸地はその必要がなかったのだ。多くのこのような宇宙船が海底の地盤の徹底的な調査をやっており、多数の国の軍艦がそれに遭遇している。大抵の場合、この遭遇に関する政府筋の極秘報告は〝空想的〟だと言明している。

しかしここでもう一度言うと、わが宇宙の友人たちは水面に浮上して自分たちの姿や彼らがやっている仕事を知らせたいのだけれども、地球人は恐怖心のために敵意を持つ状態にあるので、それが彼らの出現を妨げているのだ。そのかわりに彼らは自分たちで発見した物事を地球の科学者の中に混じって働いたり世界中で重要な地位についたりしている他の異星人たちに知らせている。するとこの知識はやがて国際地球観測年の発見事として人々に伝えられるだろう。しかも我々の惑星がみずからの自然の生い立ちを続けてゆき、その自然の変化を経験するにつれて、惑星内で起こる諸変化を我々がよく知り続けることができるのは、この異星人たちの援助によるのである。

宇宙開発による諸発見

一方、アメリカの宇宙探査機は大気圏外について多くの新しい情報を伝えていた。アメリカのパイオニア五号は一連のおもな新しい宇宙の発見物を明るみに出した。これらの新発見は宇宙の物理的な自然界に新しい光を投げかけつつある。それらは地球の気象や通信などに及ぼす太陽の影響に関する問題を解決するのに役立つだろう。そして地球のまわりに発見された放射能帯に関してより多くの資料を与えるだろう。

純粋な宇宙線について最初の直接の観測は達成された。その観測は地球から三百万マイルの距離でなされたのである。パイオニア五号は巨大な太陽黒点によって作り出されたこのような宇宙線の嵐の中を乗りきって進んでいた。地球の磁場は、太陽から地球へ来る放射線の微粒子を生かすのに役立つため、強大なダイナモのように活動しているという証拠も発見された。パイオニア五号は、四万四千キロメートルから八万三千キロメートルのあいだの高度に五百万アンペアの流れで逆巻きながら地球を取り巻いている一大電流の存在の決定的な確証を与えたのである。

地球から六万四千キロないし九万六千キロのあいだの宇宙空間に、全く新しくてしかも〝波立つ〟磁場も発見された。これは地球自体の磁場とは全然別物で、このことは地球自体の磁場の空間における範囲が〝以前に推測されていた程度よりも二倍も外方に広がっていることを示している。

空軍の新しい発見がマサチューセッツ州ベドフォードの空軍ケンブリッジ研究所から発表された。最新の写真撮影技術によって月の地図が作成されたのだが、それによると月の表面は〝地球の表面と同様に、高低のひどいでこぼこの表面ではない〟ことを示している。

月の表面のさまざまの突起から影が伸びてゆくのを記録するためにタイミング装置が用いられ、五千枚の写真が撮影された。この計画の指導者であるチャールズ・F・カンペンは、多少の例外はあるかもしれないが、「けわしい斜面や空中へそそり立つ岩などは月面には存在しない」と述べている。従来の月面写真は月が断崖絶壁だらけであるかのように写っているけれども、新しい技術ではこれが真実でないことを示している、と空軍は言明したのである。

アメリカが最初となった成功例に太陽のエックス線写真の撮影がある。これはアメリカ海軍がニューメキシコ州上空二百キロの高さに打ち上げたロケットによって達成された。

この実験と同時に宇宙科学者のヴェルネル・フォン・ブラウン博士は、地球の外の宇宙空間に生命が存在するかもしれないと言った。地球の宇宙飛行士と〝宇宙の他の人類〟との会見が場合によって

は起こり得ることを見越していると彼は語る。アメリカ新聞社協会の宣伝局での演説でフォン・ブラウンは次のように述べている。

「純粋な科学的基盤と観測による証拠に基づいて、ある種の生命が宇宙のどこかに存在すると仮定すべき十分な理由がある。私の意見では、これは全く道理にかなった仮定である……」

彼は次のようにも言っている。

「最初のアメリカ人が宇宙の他の人類に会うときは、もっと記念すべき時となるだろうと私は言いたい。そのときの挨拶が『こんにちは、地球人さん』とされて、『いらっしゃい、同志よ』とならないことを我々は望む」

続いて彼は語り続けて、アメリカは三つの究極の目標を持つけれども、その一つは、生命の起源とそれが地球以外のところに存在する可能性との探求であると述べた。

地球の科学者は今や引力という自然の力がコントロールされ得ることを認めつつある。しかも最後的なコントロール機構は電気装置の形式になるだろうという。これはドナルド・C・フーフラーがエレクトロニック・ニューズ誌の一九六〇年五月二日付号に書いた記事によるものである。彼の情報源はニューヨーク州ベスページのグラマン航空機会社の航空技師長チャールズ・ティルグナーであった。彼はまたあるタイプの引力コントロール装置の研究を行っている別な十四社をあげている。

現在、科学者たちの考えは正しい方向に向かっているので、電子工業の産業において何か驚異的な新しいアイデアが明らかにされるのも遠いことではないだろう。引力の秘密が完全に公開されるとき、その解答はあまりに簡単なので、なぜ小学生がこんなことを思いつかなかったのだろうと科学者は驚くだろう。たぶんその解答はすでに公開されているのだろうが、現代の狭量な精神の持ち主がそれについて考えるのを拒んでいるのかもしれない。

アメリカの人工衛星や探査機はぼう大なデータを集めてきたので、その資料を消化して分類するには少なくとも十年はかかるだろう。地球をまだ回っている十一個のアメリカの人工衛星のうち、六個はなおも貴重な情報を送り返し続けている。ソ連はまだ三個を軌道に乗せているけれども、みな沈黙を守っている。

ヴァンガード一号は地球の表面を書き直してしまった。そして一四九二年にコロンブスが丸いと信じた地球はこれまで信じられたように丸くはなくて、ナシ型であることを明らかにした。エクスプローラー七号は、太陽の活動と地球上の磁気嵐との関係を示す放射線や宇宙線に関する情報を四百八十キロに達するテレメーターテープで送り返してきた。

気象観測衛星のタイロスは天気予報に新時代を開いている。それは地球の雲の層について一日四百枚もの写真を撮って、人間に初めて地球の天候を眺めさせたのである。

トランシット一―Bは世界最初の航海用衛星である。そのおもな目的は航海する場合の一恒星として役立つことにある。現在のトランシットは四個のうちの最初のもので、読者が本書を読まれる頃までには他の三個も軌道に乗っているだろう。

マイダス二号はスパイ衛星としての便利さを立証した。これは現在廃止されているスパイ機のU2にまもなくかわるはずである。赤外線利用の探知機を備えているので、地上四百八十キロの軌道上を回りながら一秒間に千六百キロ以上の地域を観察できる。

宇宙の渦巻型銀河系群についての新発見がカリフォルニア工科大学の天文学者ギドー・マンチ博士から報告された。発達の過程にある銀河系のほぼ完全な写真によるその新発見は、銀河の中心から外側への巨大なガスの雲の運動をあらわしている。この巨大な雲は酸素と水素から成っていることがわかった。酸素と水素のこの広大な雲が遠い銀河系群にも存在するとすれば、そこにも生命の存在する惑星が発達している可能性はある。地球に似た大気を得るのに必要な環境を惑星が持っているかもしれないからだ。

墜落した円盤

一九六〇年三月十三日に、アメリカの大衆はニューメキシコ州から出た次のようなニューズの大見出しを読んで愕然とした。

「空軍、墜落した円盤を調査中」

この報告を行った団体APRO（空中現象調査会）はワシントンの空軍筋に対して、円盤が大気圏外から来るという物的証拠を持っていると通告したのである。APROは科学的調査のために空軍へその資料を提供しようと申し出た。

多数の人がその墜落事件と内容について首をかしげた。そしてそのニューズを続いて掲載した新聞社はほとんどなかった。空軍はその証拠を受け取ることに同意したけれども、全く一方的な態度に出たのである。これではせっかくの発見物を抹殺し、APROはインチキをやっているという噂を世間に知らせることになりかねない。賢明にもAPROは空軍の申し出を拒絶した。

APROが分析用にと提案したその資料は、一九五三年にブラジルのカンピナスに落下した溶けた金属から得られたものである。数機の円盤がその町の上空に全市民の眼前で停止していた。真ん中の一機が故障しているようだった。

ワシントン州のタコマで数年前に同様な事件が発生したけれども、今度もそのときと同じように故障機が融解した金属を落としたのである。数ポンドの金属が街路や歩道に落下して輝く金属に凝固してしまった。この事件の詳細は南米の各新聞に大きく載せられたけれどもアメリカの新聞社には届かなかった。

私が受け取った報告によると、その金属はブラジルのある研究所とアメリカの一科学者の両方によって分析されたが、それは純粋な錫であり（ある報告ではマグネシュームだともいっている）、地球上では極微量が知られているだけだという。それを作り出した技術がこの地球上のものでないことは全く明らかである。

（第4章完。以下次号）

群馬支部月例会

●七月十二日（日）午後一時～五時
●太田市民会館　第四会議室
●参加者　二十名

七月十二日、久保田会長をお迎えして群馬支部月例会が行なわれました。開催地の太田市は、連日の三十度を越える暑さの中、地元の会員をはじめ関東各地、宮城、山形、静岡、愛媛と遠路ご参加頂きまして誠に有難うございました。

群馬に久保田会長をお招きする事は十年来の支部会員の願望でした。そして、日頃の時間的な制約から他の皆様と接する機会が少ない支部会員一同この日を心待ちにしていました。

前日には遠路の三氏と有志一同で夕食、ホテル内での深夜までの語らいと楽しい一時がささやかな前夜祭となりました。

当日、開会前の有志会員による会場の準備には、本業よりこちらを優先して頂いた群馬支部会員一同の宇宙的想念をこめた大変素晴らしい看板もありました。

正午近く、数名の方と会長をお迎えに行った太田駅の到着電車からは待ちに待った久保田会長、助手の山口氏と共に、いつもご熱心な会員の方々の素晴らしい笑顔もご一緒でした。

駅を出て近くのレストランにて昼食後、とんだハプニングが生じ、月例会は予定の時刻より遅れて開催され、大変ご迷惑をおかけしました。

会長は途中の電車の冷房と外気との温度差の為、体調が思わしくなかったご様子でした。以前のお疲れもあったのでしょう。しかしご講演の内容には力強さが感じられ、特に質疑応答の中では今までお話しにならなかった事柄も含まれ、大変有益な月例会になりました。

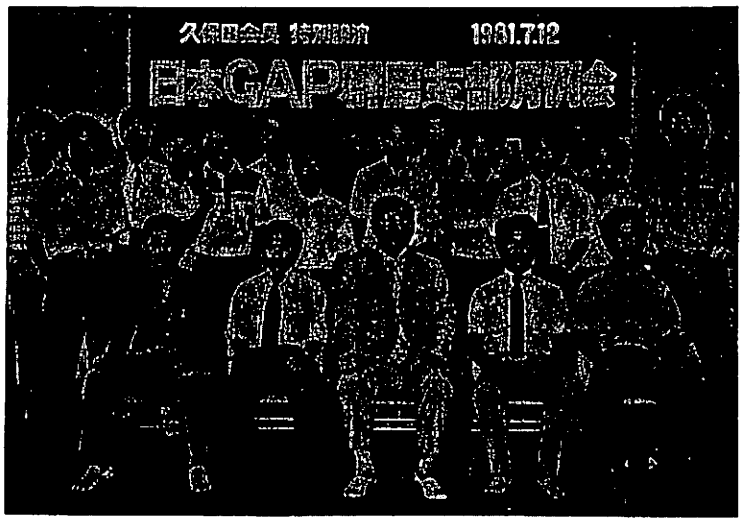
月例会終了後、宿泊のホテルにて夕食会が開催され、会長ご持参によるテープをBGMに楽しい一時を過ごしました。少人数ではありましたが、それなりの良さがあったのではと思います。その後恒例の二次会へと進み、有意義な短かい一日を終えました。

翌十三日には、一行七名による太田市の名所大光院見物、赤城山ドライブへ。群馬は歴史的には古い史跡等がありますが、宇宙的な所は少なく、上州と言えば赤城山、自然に触れて頂きました。急カーブの多いドライブコースを頂上へ、大沼にて昼食。しかし、残念な事に昼食の途中から雨となり、この辺の散策ならず。ですが、この昼食の時に、当初は参加の予定がなかったはずの二名の方が加わり、一同雨も忘れて談笑に花を咲かせました。

そして夕方、再度久保田会長をお招きできる事を願ってお世話になりましたこの二日間の思い出を胸に太田からお別かれとなりました。

この機会を与えて頂いた事に感謝致します。ご協力頂いた方、遠路ご参加頂いた方、皆様に感謝致します。そして新設された支部の皆様にも機会があります様心からご声援申し上げます。久保田会長、山口氏、どうも有難うございました。

（服部　久記）



第1回 沖縄支部月例会

●八月三十日（日）午後一時～五時
●沖縄市中頭教育会館　四階
●参加者　十五名

久保田先生、全国の日本GAP会員の皆さん、今日は！

本日、ここに八月三十日をもちまして、日本で第十四番目の日本GAP沖縄支部が結成されました。これも一重に久保田先生はじめ、GAP会員の想念が海を渡って実を結んだものと固く信じております。

日本GAP沖縄支部が出来あがったいきさつですが、元熊本GAP会員でいらっしゃいました宮城裕さんが、一人一人UFOに興味ある方を尋ねて、宇宙哲学を伝え広めて、今日に至ったしだいでございます。並々ならぬ努力で多くのUFOグループやその他の分野の門をたたき、早く沖縄に日本GAPを作りたいという情熱は、我々会員を深く感動させたしだいです。私達会員が宇宙の意識に目覚める事はもちろんですが、その想念を、人類の平和の為に役立てなければなりません。会員一人一人が、宇宙の意識というのはあるんだなとほのかな夢はもっていたようですが、ここに日本GAPという現象を見ては、もう疑う余地がございません。

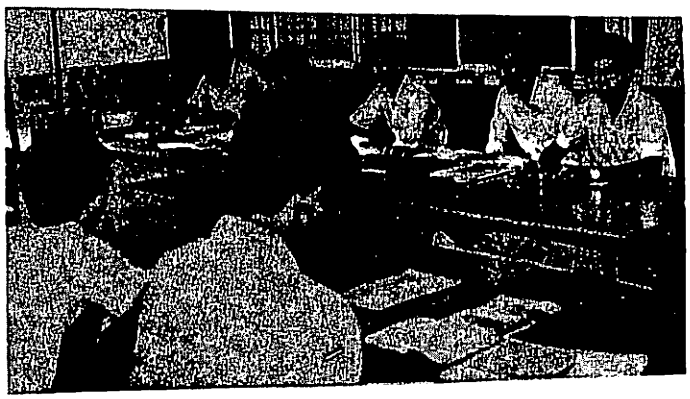
日本GAP沖縄支部は、会員登録数四十八名が集まりました。第一回月例会を大変楽しみにしていた矢先に台風情報が入り、月例会当日は台風一八号に見舞われ、商店街は閉店し、会場の中頭教育会館も閉まっていたのですが、何とかお願いしあけてもらい、強風の中月例会を決行いたしました、カサもさせない中を、十五名の会員が集まってくれました。月例会の最中にも電話がかかり、強風でどうしても出られないという、実に生涯忘れられぬ、日本GAP沖縄支部第一回月例会となりました。

その後、多くの関係者の方からおほめの言葉をいただき、日本GAP沖縄支部が、沖縄に出来ることを信じていたと熱い言葉で語ってくれた時は、我々会員は、これだけでも種の役目を果たしたんだと感激で一杯でした。思うに沖縄は、復帰後十年、アメリカ支配に苛かされて常に爆音に悩まされ、戦争の危機を日夜感じているしだいであります。日本全国の五三%もの基地を持つ沖縄こそ、早めに平和をうったえ、UFOの飛来の目的をうったえなければならない県だと、信じています。

我々会員は、日本GAP会員としての誇りをもち会の名をけがさぬ様、常日頃から、責任ある行動をとっていきたいと思います。そして私達会員、関係者の方々で、早く先生が沖縄講演にいらっしゃれる様、会費を集め、そして久保田先生の印象が（沖縄へ）早くおとずれます様、一日千秋の思いでお待ちいたしております。大変支離滅裂な文章になってまいりましたが、今後とも久保田先生はじめ日本GAP会員の皆様、良きご指導下さいます様、そしていつの日か皆様方にお会い出来る日がおとずれます様、私共一同心より願っております。

日本GAP沖縄支部が発足されましたことを、簡単ではございますが、ご挨拶と変えさせていただきます。ありがとうございました。

（稲嶺誠一記）



会員の声

むかし出会った惑星人

UFOとのテレパシー交信

岡山県　山崎利夫

考えてみれば個人の生活上で起きるほんの小さなでき事でも、それが私にとっては奇跡なのだと今は信じられます。高校時代に初めて何げなく『実見記』をみつけ、そのショックが忘れられず、銀行員になった頃、古本屋でこれまた何げなく立った所に『実見記』と『同乗記』があったので、大喜びでワクワクしながら買って夢中でよみました。これが何度も続き、ステックリング氏の書『宇宙哲学』『生命の科学』『テレパシー』と読むうちドキッとしました。「意識」と四つの感覚器官からなる「心」の一体化についての理解だったと思います。当時私は、幼い頃からUFOや宇宙人を信じて空ばかり気にしていましたし、何度も光体を見せられ、五年前に、(ちょうどその日は合唱団のレッスンに参加する途中でした)金甲山の頂上付近から突然赤い光がこちらへ向かってきて、スッと急に消えたのを見て大変ショックを受け、その頃私はGAPに入ろうかどうしようかと迷っていたのですが、何回もUFOの〝おもわせぶり〟に会い、ついに私の決意を決定的にさせる〝おもわせぶり〟を目撃したのです。

この時はもうどん底の状態で、イヤイヤ党の集会へ出向いている途中で、最初西に向う光体を見つけ何となく感じて「こっちへこないかな?」と思ったとたん、突然そのままま すぐこちらへ引返し、数十メートルまで近づいたので、私は足がふるえてこわくなり家屋のカゲに思わずかくれようとしました。なにせ夜中ですし、まだ私は宇宙人を信用していませんでした。ところがそれは何度も回りこむようにして、私を見るかのような動きをし、よく見ると赤、緑、黄が三角形をなした、ちょっと考えると飛行機に思えたのですが、全く反対方向からいつのまにかもう一機やってきて、私の目の前で二機がからまるように空中サーカスをやり始めたのです。三回ほど互いに離れ、大きく空を反対向きに回転し、ゆっくり離れ、またグルーッと周回して突然ジャレあう。まるで鳥が仲良く遊んでるみたいでした。

不思議なのはそれだけではありません。確かに二機だったのに金甲山の真上に(見かけで)輝く丸い光体がじっと停止していて、ジャレあう二機がまるで呼吸をするように、赤く光を増縮させるのですが、それと全く〝息〟があっていたのです。私はもうこわさを忘れて、その形を、「私の真上に来て見せてくれないか!」と願いました。すると本当に一機が真上にゆっくりやってきて見せてくれたのです。しかし残念ながら大きな三角形に位置した赤緑黄がみえるだけで、中間はまっ暗でした。ただ周回するときにある地点では赤、緑、黄が一色に変わったり、光が増縮するのに気付いただけです。そして私を最も驚かせたのは、私が家、(約百メートル先)になぜか母親だけに知らせようとして、自転車で走り出すと、同じように向かったり、今から思えばなぜそういったのか自分でもわからないのですが、母親に、「みてごらん。ぼくが思った通りに動くから」といって、二人で再びジャレあいを目撃したことです。

自己を変化させるのは自分だけ

愛知県　田中恵子

私は子供の頃から、宇宙とか自然科学に興味を持っていました。私は幼い頃、自分がまるで他の人間で、まちがってここ地球に来ているのではないかしら、と思っていました。自分なのに自分になれないというのかしら、まるで別の人格を持っているような気分でした。今はだんだんと慣れてきましたが。

人間は誰しもテレパシーを持っていて、相手の心を読めるのではないかと小学生の頃まで思っていましたが、実際のところ、それは私だけがそう思っているだけで、周りの人たちは何もわからないのだということを知り驚いたりもしました。自分が周りの人たちと考えることが違うような感じでした。

私は自分自身にとっても興味をおぼえ、まるで第三者のごとく自分と話したりします。以上のようなことは、現在ではもうまるで昔話のごとくの感じの思い出です。なぜなら、今この現在に生きてゆくことが、最も重要なことですし、現在から学んでいかなくてはならないと思っているからです。

アダムスキーの著書と出あってから五、六年になりますが、読み返すごとにいろいろなことを教えられます。私の心の内の何かがいつも何かを求めて、自分を向上へとかりたてているようです。この五、六年間、「なぜ自分が宇宙の意識の道を歩もうとしているのかに気づかずにすんでしまわなかったのか。それが楽な道なのかもしれないのに…」といった疑問を自分自身に問いかけてきました。自分の中の思いをふっきろうと思って、友人に相談したりもしました。でも結局のところ、自分自身が宇宙的な存在であるのに、それを否定することはできません。それに気がついているのですから、歩き出すことの方が賢明です。そう思えてきます。海外に旅行に出たのも、自分自身をみつめるためだったのかもしれません。私は自分自身、まだよくつかめていないのかもしれません。

今地球の危機の時代だといわれています。一九八二年の惑星直列、一九八六年のハレー彗星、それにともなう気象条件の変化、太陽と地球の電磁波の影響等と、まさにいろいろな条件がいっときにワッと押し寄せてくるものです。まったく自分自身、今この時代に生きている偶然に、大きな意味合いを感じさえします。自分が求めてこの時代に生まれてきたのですから、何かを学ぶために、教えられるためにここにいるのかもしれません。今まで過去何回も地球的規模の大変動が起こってきたのですから、これもまた大きな神・宇宙の摂理かもしれないと思います。それらのことが将来起こる可能性があるにしろ、それらを扱っているのは、この地球上に住む私たちの心に原因があるのだと思います。類は類を呼ぶのごとく、悪しき想念が悪しきものを引きつけるのだと思えてきます。仕方のないことだと甘えばそれまでですが、自分の心を変えるのは、その人自身が気づいて変えていくことだけが可能ですから、まず自分自身を変えていくことが重要かもしれません。私自身、まだまだわかっているようであまりわかっていないのかもしれません。先生のおっしゃるように、不動の信念と強い確信を持続してゆくことが重要になってくることに、つくづく気がつくしだいです。

ア氏の書物は私の命

大阪府　斉藤康奨

先日は月例会と出版記念会に出席出来まして、大変楽しく過ごすことができました。ただ私は踊りが苦手で、盛り上げることができず、申し訳ありませんでした。終了後は挨拶もせず、大変失礼しました。

月例会での鈴木さんの体験談。先生の迫力ある声は、身近で聴きますと心が落ち着きます。また現実に関することなど話されまして、いろいろあるのだなあ、と思いました。

それにもまして、二十数年、数多くのでき事のありました中を、今なおGAP活動をされてきましたことには、つくづく先生の「スゴサ」といいますか、何と表現してよいかわかりませんが、ただただ「スゴイ」と思うばかりです。

また、五月の大阪支部大会前日には、私のようなものに握手して下さり、突然の事でビックリしまして、あの時も本当にありがとうございました。先生へのご援助は何もしていませんが、今まで続けてきてよかったなあ、と何か安堵感みたいな気持ちが湧きました。

『同乗記』『生命の科学』『テレパシー』『ニューズレター』、その他の宇宙哲学の書物に巡り合い、今は何とか生活していけるくらいにはなりました。全く先生の訳して下さったおかげです。もしこれらの書物に巡り合っていなければ、今の私はどうなっていたかわかりません。特に社会に出ましてからの人間関係、その他は想像を絶するものがあり、何度も挫折しそうになりましたが、その度にそれらの書物のお世話になっています。今ではこれらの書物がないと、今の生活、自分はありえないという程密着していますが、まだまだ試行錯誤の連続の毎日です。でも何とかして、もう少し良き惑星へ行けますよう、終生続けるつもりです。

やはり先生の言われますように、仕事でそれ相当の実力を養い、働き生活を維持してからの宇宙哲学だとつくづく思います。そして今現在、また未来に対してどう生きていくかが問題だと思います。ただ私は先生へご援助らしいことをしていませんので、そればかりが気がかりで、申し訳なく思っているばかりです。先生にもはるかに多くのご苦労がおありと思いますが、ご無理をなさらないように、お身体に気をつけて会員の皆様を導いてください。

宇宙は愛のかたまり

東京　山岸英一

先日は先生の御会の月例会に初参加して、先生の御講演と熱心な皆様に接することができてありがとうございました。想像していたよりも大変わかり易く、学術専門的でないことが何より嬉しく拝聴できて、心より感謝申し上げます。このように全国に多くの会員が宇宙について、アダムスキーを知ろうと、単なる興味本位でなく真実を知ろうと集まっていらっしゃる若者達に絶讃の拍手をおくりたい気持です。

先生のことは各方面でいろいろと聞かされておりますが、そのほとんどは偏見と一方的感情で批判され、同じ宇宙について究めようという態度ではありません。先生がその方々を相手になさらないのは賢明で、どうぞ対立と競争など愚劣なる世界に加わりませんよう、先生は先生独自の日本GAPとその多くの支持者がおられますことをお思い下さいませ。

（中略）

私はアダムスキーが聖書を深く研究されていたことを知っています。（ほとんどはその英語講演、アメリカのGAP発行だったと思います）「神は愛なり。宇宙は愛のかたまり。愛なくしては宇宙は究められない」といわれたのも、単なる宗教や哲学でないことがわかります。

大変生意気な、一方的なことを申し上げましたが、先生のご参考まで乱筆乱文、思いつくまま書き述べましたことをお許し下さい。私もいろいろ知らぬことが多く、先生よりまたの機会、ご教導賜わりますれば幸いです。先生に宇宙よりお守り、お導きがありますよう、日本GAPのますますのご発展を心より厚く、強くありますようお祈り申し上げます。

内部の印象に従おう

東京　山木益巳

アダムスキー氏の哲学書には「心と意識の一体化」という言葉がよく見られます。そしてそれは自己の内部からわき起こる声なき声をきくことであるといわれています。何かを実行する時に、自己の内部からわき起こってくる感じに従うことであると。

毎日の仕事に追われている現実の生活の中で、そうした心のゆとりをみつけるのは確かにむずかしいことかもしれません。しかし、我々はすでにア哲学を知っているのですから、それを生かし、実らせなければなりません。正しいことは実行するという義務をともなうものだからです。

自己の感性を高める方法はア氏がのべているのですが、私自身にとってとても重大な印象を感じた事件が発生しましたので御報告したいと思います。

五月三日ー五日にかけて、実家に帰ったり、静岡支部大会に参加して、五日の夜アパートに帰ってきたところ、空巣に入られ部屋が荒されておりました。ビックリした私はすぐに警察にきてもらって調査しましたが、幸いなことに盗難品はありませんでした。私自身、貴重品と呼べるものを持たなかったのかもしれませんが、これは生活の簡素化につながると思います。

また普段、私は現金を（無用心にも）タンスの中に入れておくのですが、ゴールデンウィークに入る数日前から、「現金を銀行へあずけた方が良い」という強い印象を受けたので、その印象に従ったのが良かったのだと思います。

その体験から、ア氏の説くように、自己の内部の印象に従うことの真実性をより強く感じたのです。ですから本当の師は自己の内部の宇宙の意識であり、この意識の声をきくように自己の感受性を高めることこそ、ア哲学の基本であり、まちがいのない生活法であるということを痛感しました。ア氏は人間はメクラであるといっていますが、我々はすでにア哲学を知っているのですから、それを生かし充分な知覚力をもって歩んでゆきたいと思います。

悩んでいる人や苦しんでいる人に対しては、明るい言葉を投げかけたり、明るい想念を送信したりしてゆこうではありませんか！　そうした日常の第一歩から実践することが大切なのだと思うのです。

文通のお願い

●病弱な私ですが、ミラクルワードを唱えて人のために尽くしたいと頑張っている二十六才の独身男性ですが、こんな私でもよければ、実際に会って話し合える女性の方、ご連絡下さい。

〒519ー58　三重県南牟婁郡紀宝町平尾井　松口幸之助
☎0735ー34ー0605（田中方）

●宇宙哲学の実践でつまずいています。どなたかその方法についてアドバイスしてくれる方。またそれにこだわることなく宇宙哲学、GAPのこと、その他広く話し合える方、どなたでもお願いします。

〒124東京都葛飾区西新小岩4ー11ー11　江川元規（学生）

●一緒に語り合える近くにお住まいのGAP会員の方ぜひご連絡下さい

〒250ー01神奈川県南足柄市関本609　井上博文

●岡山近辺の方、いっしょに勉強してゆきましょう。ご連絡下さい。

〒704岡山市西大寺中野本町5ー16　小坂　恵

●アダムスキー哲学について語り合い研究しあっています。お近くの会員の方次のいずれかにご連絡下さい。（毎月第二日曜日。佐々木宅にて）

〒018ー01秋田県由利郡象潟町字浜山126ー110　佐々木三羊子
〒018ー23秋田県山本郡山本町森岳町尻47　工藤真記子

解説「テレパシー」第3部出版

1980年度東京月例会における久保田会長による「テレパシー」解説講義のトランスクリプト。（第1部，2部は好評発切れ絶版。）

第3部　B5版　活字タイプオフセット印刷　¥700　〒240

ご注文は下記へ直接どうぞ。
〒989-16　宮城県柴田郡柴田町大字本船迫字内沼田96-2　安藤澄雄　振替仙台30019

日本GAP各地行事報告と予告

81年8月以降分

日本GAP企画第3回

▼アメリカ（メキシコ カリブ海）宇宙考古学の旅

予定どおり八月十五日に総人員二十八名で勇躍成田空港を出発。素晴らしい大旅行を完了し、三十日に全員無事帰国しました。詳細は本号掲載記事を参照。

▼本年度日本GAP総会盛況裡に終了

●会場付近上空に円盤が出現！

予告どおり十月十日に東京新橋のヤクルトホールで盛大に挙行され、二百四十名の参会者は六名の講演とアメリカの名画「二〇〇一年宇宙の旅」を観賞し、宇宙的雰囲気を満喫の上、夜は六時より東京駅構内の精養軒にて百十名の出席者による立食形式の大夕食会が開催され、歌・舞踏・福引等に打ち興じて愉快な一夜をすごしました。

なお当日総会終了後、会場の外でUFOが空中高く飛ぶのを大夕食会場へ向かう野口敏治氏その他の会員が目撃し、更に円盤が東京駅丸の内側上空に出現したのを伊藤達夫氏と数名の会員が多数の一般人と共に見ました。詳細は次号に掲載します。

毎年日本GAPの総会の日には上空にUFOが出現するのが〝習慣化〟しているところから、GAPがスペースプラザーズの注目の的になっていることは確かです。

▼東京月例会

十一月より会場を古巣へもどす

東京月例会は八月より会場を科学技術館に変更していましたが、十一月（第一土曜日の七日）より古巣である上野公園内の東京文化会館へ帰ります。お間違いなきようご注意下さい。

また五十七年一月の東京月例会のみは第二土曜日の九日に変更します。

この日は月例会終了後、恒例の新年会を上野京成デパート右隣のすき焼食べ放題の店「竹弥（たけや）」で開催の子定。豪華福引あり。会費二五〇〇円。ふるってご参加の程を。

―予告―

▼熊本支部大会を開催

熊本支部は今年度支部大会を次の要領で実施子定。多数ご来場賜わらば幸いです。豪快にして気は優しき九州男児一同準備万端ととのえてお待ちしています。

日時　十一月二十二日（日）午後一時より五時半まで。

会場　法華（ほけ）クラブ八階大会議室。
熊本市通町二一一
☎〇九六三―二二―五〇〇一
国鉄熊本駅前から市電「健軍」行き乗車、「慶徳校前」下車、すぐ隣。交通センターより徒歩六分。（会場は本誌先号のこの欄に発表の「市みゆき会館」より「法華（ほけ）クラブ」に変更）

会費　二五〇〇円。大会終了後、法華クラブ内の別室で希望者のみの夕食会を開催。会費二五〇〇円。

宿舎　法華クラブはホテルなので宿泊可能。ツイン一泊四〇〇〇円、（朝食付）。夕食会と宿舎の申込は早目にハガキで〒860熊本市二本木三―一二―四五、常通寺内、津野田俊行宛に。☎〇九六三―五二―二三八一。

プログラム　一時より支部代表挨拶。久保田会長講演。二時半よりスライド「アメリカ・メキシコ・カリブ海宇宙考古学の旅」映写。四時より質疑応答。翌日（祭日）は希望者のみで雄大な阿蘇山へドライブの予定。車は支部で準備。

（首藤秀利記）

▼おめでた

熊本支部の元木和雄氏（熊本県植木町）は来たる十一月一日に長崎市の四海楼で挙式。めでたく結婚にゴールイン。新婦は長崎市の才媛・上田妙子さん。ハネムーンはハワイへ。ご多幸をお祈りする次第。

―予告―

▼沖縄支部大会開催

ものすごく真剣な沖縄支部は、五十七年五月の連休を利用して沖縄支部大会を開催する予定で着々と準備中です。

そこで本土側もこの支部大会を応援する意味で「沖縄支部大会と南国の旅」と銘打って三泊四日の旅程により大挙して沖縄へ押しかけようと計画しています。

初日は羽田空港より沖縄へ飛び翌日支部大会に出席、残り二日間は沖縄各地の名所史跡めぐりにあてて日本最南端のエキゾティックなムードを満喫します。総費用はワールドセブントラベル社田中氏のご尽力により安くして頂いて八万円台（多少の変更があるかもしれません）。詳細は次号に発表の予定。ふるってご参加下さい。

日本GAP企画第4回

▼エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅

別掲予告のとおり来年度も八月に企画第四回海外研修旅行としてエジプトの壮大な遺跡とヨーロッパ各都市をまわる素晴らしい旅を実施しますので、多数ご参加下さるようお願いします。特に今回は七万人の目撃者の眼前で巨大な円盤が出現した大事件で名高いポルトガルのファティマを訪れます。日本人がほとんど行かないこの名所の見学は旅行に大きな価値をもたらすでしょう。

主要訪問地紹介

■**カイロ**　エジプトの首都でアフリカ大陸最大の都市。新市街と旧市街とに分かれており、旧市街には約300のモスク（回教寺院）があってミナレット（尖塔）が林立し、住民の多くはガラベイヤという長い民族衣装を着て独特なエキゾティシズム（異国情緒）に満ちています。ここを基点としてギザ、サッカラ、ルクソール等の遺跡を見学します。

■**エジプト博物館**　ナイル川東岸のナイル・ヒルトンホテルの近くにあり、先史時代から古・中・新王国時代、グレコローマン期に至るまで10万点以上のぼう大なコレクションを蔵する世界最大クラスの博物館で、特に2階東側のツタンカーメン王の部屋が圧巻です。その他ミイラ室等もあり、必見の場所です。

■**ギザの3大ピラミッドとスフィンクス**　カイロ市内から15kmの所にある3大ピラミッドはあまりにも有名で、考古学上では王の墳墓とされて、スフィンクスの正面から見て右よりケオプス（クフ）、ケフレン（カフラー）、ミケリヌス（メンカウラー）の3人の王の名で呼ばれています。最大のものはケオプス（クフ）王のピラミッドで、底辺230m、高さ137m。ケフレン（カフラー）のピラミッドの内部トンネルへ入って玄室も見学します。夜間は各ピラミッドに美しい光を照射する素晴らしい「光と音のショー」が行われ、オプショナルによりこれも見物します。

■**サッカラの階段状ピラミッド**　ギザからバスで約1時間のサッカラにある階段状ピラミッドはエジプト最初のピラミッドで、第3王朝のジェセル王の墓とされ、宰相のイムホテプが建立したもの。ギザとは違って静寂な大砂漠の中にいちまつの憂愁をたたえて屹立しています。

■**ルクソール**　カイロから700km南方のナイル河畔の古都テーベの大遺跡で、カルナック神殿、ルクソール神殿、その他の神殿が大石柱群によって形成され、威容を誇っています。いずれも歴代の王が寄進して増築したもので、巨石に圧倒されます。カイロから飛行機で行き、ルクソールに1泊しますから酷暑にも疲れず、見学時間も充分にあります。

■**王家の谷**　ルクソールからナイル河を船で渡って西へ5km行った大岩盤地帯。古代の王たちはここに地下の大墳墓を建設し、現在までに発見されたものは64ありますが、特に有名なのはツタンカーメン、ラムセス2世、セティ1世、ラムセス6世らの墓で、これらの内部を見学します。付近にはハトシェプスト女王の葬祭殿もあり、これは高い岩山を背景に女王の寵臣センモウトが建築したもので、この壮厳な神殿は古代エジプト建築の傑作のひとつとされています。

■**リスボン**　ポルトガルの首都で、近代的な面と中世の面影を残すムーア風の異国的な情緒をたたえた異色ある都市です。エドアルド7世公園を中心に聖ジョルジェ城、コメルシオ広場、ロッシオ広場その他の見所が沢山あります。リスボンでは1泊します。

■**ファティマ**　ヨーロッパでは知らぬ者のない一大聖地なのに日本では全く知られておらず、したがって日本人はほとんど行きません。リスボンから130km北東のこの町は1917年にルシア、フランシスコ、ジャシンタの3名の子供が貴婦人の姿を見たり、7万人の大群集の眼前で巨大な円盤が空中に出現したりして、世界的に有名になりました（詳細は久保田八郎著「7つの謎と奇跡」（主婦の友社刊）の「ファティマの謎の太陽円盤」を参照）。奇跡が発生する（たとえば難病が治る）世界3大聖地のひとつであるファティマへはリスボンからバスで行き、見学後1泊します。

■**マドリード**　闘牛とフラメンコで代表されるスペインの首都マドリードは南欧の陽光が降りそそぐ情熱の都市で、プエルタ・デル・ソルと呼ばれる中心部の広場、スペイン広場、王宮、プラド美術館その他の見所が沢山ある美しい町です。1泊して2日間にわたりゆっくりと市内見学をし、夕方は各自自由においしいスペイン料理を賞味して下さい。

■**トレド**　マドリードの南約70kmの地点にある古い石造都市で、6世紀以来約1000年間ここがスペインの首都でした。高さ実に90mの大鐘楼がそびえるカテドラル（大寺院）は11世紀の創建になるもので、町全体が中世そのままの姿を伝える史跡の古都です。ここはマドリードからバスによるオプショナル・ツアー（希望者のみのツアー）とします。

■**パリ**　あまりにも有名なこの花の都は史跡と美術の都市でもあり、また最新のファッションの源泉として日本人は必ず訪れるべき素晴らしい首都です。ここに2泊し、24日の午前中は市内見学についやしてサクレクール寺院、ノートルダム寺院、エッフェル塔その他の名所を歩き、午後は自由行動にしますからブチックなどで好きな買物ができます。夜は各自で本場のフランス料理を存分に味わって下さい。

■**フランクフルト**　西ドイツ経済の中心地で、毎年春と秋に見本市が開かれますが、西ドイツの玄関口ともいうべき巨大な空港があり、ここへ着陸します。近郊のハイデルベルクの古城見物やライン川下りの基点になる大都市で、バスで市内を見学します。

■**ハイデルベルク**　フランクフルトの南方約85kmにある古城と大学で有名な古都。山腹に13世紀以来神聖ローマ帝国のラインランド地方選挙侯の居城であった優美なルネッサンス風の城跡があります。ハイデルベルク大学はドイツ最古の大学で1386年に創立。昔はビールと恋と歌が渦巻く奔放な学生生活で有名な町でした。城からはネッカー川の流れが見渡せます。

■**ライン川下り**　ライン川は伝説と詩に満ちた1,300kmの大河で、スイスのアルプスを源としてドイツの主要都市を通過し、北海に注ぎます。いわゆるライン河下りはマインツからコブレンツに至る区間で、広漠たるブドウ畑や古城などが見られ、伝説とハイネの詩で名高いローレライの岩がハイライトで、ここを通るときは船客が各国語でローレライの歌をうたいます。船は大きな客船で内部は立派な食堂になっており、芳醇なドイツワインやドイツ料理を賞味しながら美しい風景を眺望します。

■**ローマ**　"永遠の都"といわれるイタリアの首都ローマも2000年の歴史と伝統が脈打って大理石の遺跡群に満ちています。コロッセオ、フォロロマーノ、パンテオン、トレビの泉、カラカラ大浴場跡、パラティーノの丘その他の史跡がありますが、なんといっても見のがせないのはバチカン市国の世界最大のサンピエトロ大寺院です。イエスの弟子だった聖ペテロが開祖で、16世紀から17世紀にかけて着工完成した壮麗な高さ132mの大ドームその他の建築はミケランジェロ、ベルニーニその他の巨匠の手になるもので、本堂内はイタリアルネッサンス及びバロックの国宝級美術品が充満する芸術の殿堂です。

この旅行は他社の海外団体旅行の3倍分に相当する豊富な見学先を含んでいます。したがって他社なら総費用は80万円台になるはずですが、この企画では奉仕的な価格にして多数の方のご参加が容易になるように努力しました。このような豪華な海外研修旅行が安い費用で行けるのは日本GAPの企画で実現するだけです。

同行者紹介

●旅行団長
久保田八郎　1924年生。島根県出身。慶大文学部卒。ＵＦＯと宇宙哲学の研究グループ「日本ＧＡＰ」を主宰。毎年海外研修旅行を企画。ノンフィクションミステリー研究家。訳著書にジョージ・アダムスキー『宇宙からの訪問者』（ユニバース出版社）、久保田八郎著『7つの謎と奇跡』（主婦の友社）、その他多数ある。

●添乗員
田中　正　1944年生。東京都出身。1968年より3年間ドイツに留学、ゲーテインステュートエイトで学び、その後イギリスに1年間在住して帰国。数社の旅行会社を経て現在はワールドセブントラベル社の営業次長。海外団体旅行のベテラン添乗員。

第4回日本GAP海外研修旅行

エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅

（永遠の謎と神秘に包まれた古代エジプトの大遺跡へ！
うるわしきヨーロッパの各都市の古き面影を求めて！）

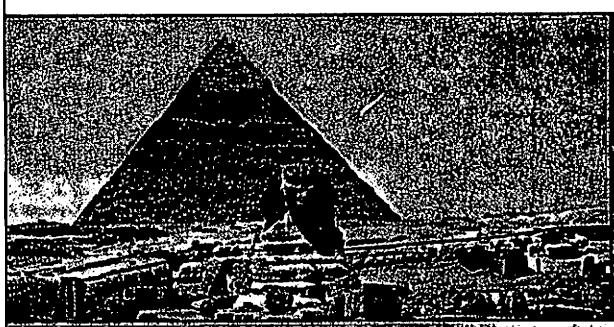
日本ＧＡＰは年次企画として過去３回にわたり海外研修旅行を実施しましたが、1982年（昭和57年）８月にも企画第４回目のエジプトとヨーロッパを周遊する素晴らしい旅を施行することになりました。ふるってご参加下さい。

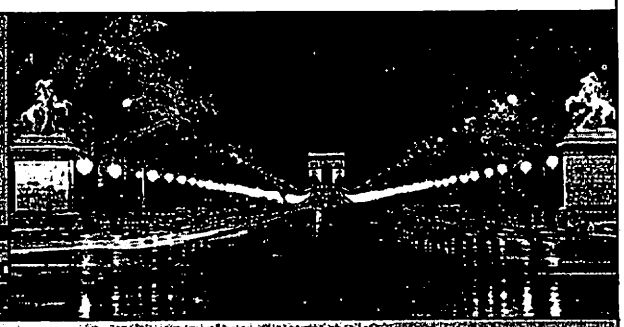
まず最初にエジプト入りしてギザの３大ピラミッドを皮切りに謎と神秘に包まれた地上最大の巨石文化遺跡群を視察し、そのあとポルトガルの首都リスボンと謎の太陽円盤出現地として名高いファティマを訪問。続いて美しいスペインの首都マドリードへ行き、フランスは花の都パリで２泊してヨーロッパ文化のエッセンスにひたり、更にフランクフルトから西ドイツへ入国してハイデルベルクその他の景勝地を巡遊後、船でライン河を下りながら天下の絶景を眺望し、最後はイタリアの首府ローマで古代の名高い遺跡を見学して、６ヵ国をめぐる大旅行を満喫しようというものです。

名コンビの久保田八郎と田中正が豊富な海外旅行の経験を生かして企画した手作りのこの旅は日本ＧＡＰ独特のもので、費用・内容において他社の追随を許しません。しかも毎回のＧＡＰ海外研修旅行団は他の旅行団にみられないほどの調和と友情に溢れて、現地のガイドさん方から絶賛を博しています。今回も多数ご参加の上、感動と歓喜に満ちた日々をすごし、生涯忘れ得ぬ思い出を残して下さい。

旅行中は久保田とベテラン添乗員の田中が同行して親身のお世話をし、現地では優秀な日本人ガイド（予定）が案内します。早目にお申し込み下さい。

旅行団長　日本ＧＡＰ会長　　久保田八郎





旅行期間　昭和57年８月15日～８月29日〈15日間〉

参加費用　¥638,000（分割払い可・月々約¥28,800・24回）

案内書　ハガキに「第４回海外旅行案内書送れ」と記して下記へお申込み下さい。

〒133 東京都江戸川区本一色町365-818　日本GAP

企画：日本ＧＡＰ
（運輸大臣登録一般旅行業第67号）

主催：株式会社トラベル日本
（運輸大臣登録旅行業代理店業第1957号）

協賛：ワールドセブントラベル株式会社
（代理店）

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2：00→6：00 ※来年1月のみ第2土曜日（9日）に変更	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。☎03－828－2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。 ※8月と9月のみ会場は科学技術館。詳細は38頁。	¥300	2：00→3：00会員による体験講演，3：00→3：30久保田会長の宇宙哲学講義と近況報告，テレパシー練習，休憩。4：30→6：00自己紹介，意見発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和毅　☎06－436－3478	300	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」（文久書林刊）を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	新潟駅前「青年の家」☎0252－44－6766 連絡先＝足立亘宏　☎0252－62－0968	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	熊本市仁本木3－12－45　常通寺 連絡先＝津野田俊行　☎0963－52－3381	200	テ　テキストとして「生命の科学」「テレパシー」（文久書林）」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1：00→4：30	名古屋市中区古沢町7－1「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331－2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先＝林　国宜　☎0586－45－6468 武田充弘　☎052－622－7339	300	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表，テレパシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222－95－0725	200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00 ※1月のみ第2日曜日（10日）に変更	福祉文化センター、小会議室。山形市小白川町、山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236－42－5181 連絡先＝清水　正　☎0238－21－5441	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30 ※1月のみ第2日曜日（10日）に変更	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011－241－9171　連絡先＝伊藤重信　☎011－251－4331	300	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会，テレパシー練習，自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00 ※1月のみ第2日曜日（10日）に変更	プラザー静岡ビル8階（静岡駅北口すぐ）静岡市御幸町9－1 連絡先＝野口敏治　☎0542－86－7729	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	旭川市四条通り10丁目右1号「北海道新聞旭川支社」会議室。電話0166－23－2111 連絡先＝石川公一　☎0166－51－5699	500	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習，研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→4：30	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫　☎0898－22－3060	200	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2：00→6：00	群馬県太田市「太田市民会館」第6会議室。 連絡先＝服部　久 ☎0276－63－2163・2771	200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室(2)　☎0177－34－0163 連絡先＝中根　豊　☎01756－3－3386		テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習、研究発表、座談会。
沖縄支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	沖縄市仲宗根4－1「中頭教育会館」4階。☎098937－7132・7133 連絡先＝稲嶺誠一　☎09893－8－2995	300	テキストとして「生命の科学」。久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介。座談会等。

★本誌バックナンバー（旧号）★

No.70 主要記事「創造主のハート」G.アダムスキー／「愛と太陽の大地」久保田八郎／「コンピューターによるUFO写真の真偽判定は正しいか」田畑宏／「質疑応答」S.ホワイティング／〈写真〉「東京上空のUFO」その他

No.71 主要記事「アリス・ウェルズ女史、逝去」Fステックリング／〈アメリカ南米宇宙考古学の旅〉紀行「大アンデスと太陽の帝国へ」久保田八郎／質疑応答「宇宙と人間の真相」F.ステックリング＆S.ホワイティング／その他。

No.73 主要記事「バック・ネルソンの驚くべきコンタクト」久保田八郎/「私のテレパシー体験」田中　正/「宇宙哲学で運命が好転した！」篠　芳史/「ミラクルワードにより奇跡が発生！」黒田保夫/「信念の力で蘇生した私」山口様/「宇宙と人間の真相」F.ステックリング/「さらば空飛ぶ円盤」(1)G.アダムスキー/その他。

No.74 主要記事　●金星旅行記「死と空間を超えて」G.アダムスキー/「日本GAPとアダムスキー」久保田八郎/「超低空に舞い降りた円盤！」末永雅仁/「各地支部大会詳報」/「さらば空飛ぶ円盤」(2)第2章この太陽系内の宇宙活動・第3章宇宙船と重力　G.アダムスキー/その他。

※No.69より71までは各¥500。No.72から¥700。〒各¥200。

「宇宙哲学」講演録音テープ

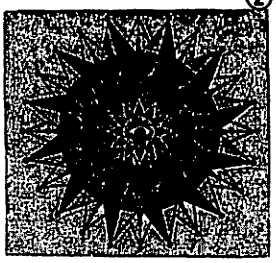
今年度東京月例会における久保田先生の毎月の講演を録音した貴重なテープ。理解を深め思想の統一を図る上で重要な資料となるものです。先生の雄大な弁舌をぜひお聴き下さい。

テープ1本（90分）　¥1000　〒200

このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい（56年1月より毎月録音）。GAP本部では扱いません。

〒430 静岡県浜松市寺島町221
小島国弘（静岡支部所属。自宅TEL.0534－52－8502）

①



②

①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。（キャビネ判）（カラー写真）

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。（サービス判）（カラー）

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500〒120　②¥200〒60一括注文の場合〒120

③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。¥500　〒120

④テレパシー練習用 ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。
美麗箱入り。
¥500　〒120

日本GAP

会員募集　日本GAP

〒133東京都江戸川区本一色町365－818

★日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故ジョージ・アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！　★コズミックマン（宇宙的人間）を志向する千数百名の男女会員は単にUFOの目撃報告の分析のみにとどまらず、アダムスキー氏が残した偉大なガイドブック「生命の科学」「テレパシー」等の研究実践により潜在能力の開発に研さん中！　★困難を克服して力強く生きよう！意識を宇宙の彼方へ拡大しよう！　★入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

編集後記

★八月の海外研修旅行、十月の総会と多忙な行事の連続でしたが、ここに75号を刊行でき て一息ついたところです。会員諸兄姉のご支援に深謝いたします。

★本号ではアダムスキーの『土星旅行記』の改訳版前半が圧巻です。壮麗きわまりない光景が見事に活写されており、更めて思いを彼の大惑星に馳せるこの頃です。

★編者の旅行記は紙数の都合により充分な描写は不可能でしたが、補足的に参加者各位の手記を多数掲載しました。これにより旅行の意義の深い理解が可能になると思います。

★別掲予告どおり来年度も素晴らしい海外研修旅行を企画しましたので、ふるってご参加下さい。航空運賃その他の経費は年々上昇する一方ですから、思い立ったときに決行するほうがよいでしょう。海外旅行の参加はそうしたものなのであって、「あのとき思いきって参加したのがよかった」というのが大方の参加者の感想です。

★十月十日の総会と大夕食会も盛況裡に終了しました。写真入りの詳細な記事と各講演者の講演内容を次号に掲載します。特に当日夕食会場上空に出現した円盤に関する伊藤達夫氏（今治市）と仲間秀樹氏（福知山市）の目撃報告は貴重な資料となるものです。ご期待下さい。

★本号表紙には編者撮影の円盤写真を掲載しました。これは八年前本誌52号に発表したもので、日本テレビのUFO番組でも放映されて話題になった写真です。新しい会員の方々のために再公開しました。

★日本GAP会員にとってUFOの目撃は重要な体験となります。常に双眼鏡やカメラを携帯し、出現した場合は目撃報告や写真等を編者宛お送り下さい。その意味で光学製品になじむことが大切です。十月十日に伊藤氏は橋口真市氏（静岡県）が携行された大型双眼鏡を使用して白銀色の物体が円盤状であることを確認されました。

★編者は本誌の英文版を発行して国際間の交流を図る企画をしています。資金面で難点がありますが、具体化したら本誌に発表します。

★来年一月の東京月例研究会だけは第一土曜日を第二土曜日の九日に変更しますからお間違いなきようご注意下さい。この日は月例会終了後恒例の新年会を別会場で開催します。例によって福引も行いますからふるってご参加下さい。詳細は37頁を。

★GAPに対する卑劣な妨害行為がありますが、本号5頁の最後の個所を熟読してワナにかからぬよう警戒して下さい。究極は自分自身の判断と意志にかかっています。

★ご送金の際は当方の事情により現金書留にしないで必ず郵便振替でお願いします。（K）

日本GAP機関誌・季刊 秋季号
GAPニューズレター 75号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色町365－818
電話（651）0958
振替東京4－35912
一九八一年十月二十五日発行
頒価七〇〇円・送料二〇〇円